2019 年度文部科学省採択

地域との協働による高等学校教育改革推進事業

（グローカル型）

2020 年度研究開発実施報告書【第 2 年次】

和歌山信愛中学校高等学校

はじめに

和歌山信愛高等学校　校長　森田　登志子

「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（グローカル型)」(以下「地域協働事業」）研究開発実施報告書の巻頭言にあたり、SGH アソシエイトプログラム活動からの 8 年間、これまでに様々な形で多くの方から有形無形のご協力をいただきましたこと、心より感謝申し上げます。

本校の設立母体である「ショファイユの幼きイエズス修道会」のコンセプトは、生まれたばかりの無力な赤ん坊のイエス（幼きイエズス）を、見返りを求めずに守り慈しむ強く優しくしなやかな母マリアのような女性を育てる、というものです。この修道会は貧困家庭や孤児の面倒を見るという活動から修道会に発展し、フランスの片田舎ショファイユで 1859 年に創立されました。明治の初めにフランスから 4 人のシスターが来日し、大阪で同じような活動を始めました。明治初めの日本はフランスからみると未知の国で、4 人のシスターたちのチャレンジ精神やエネルギーたるやそれは大変なものであったと思います。当時の手記をみると、大変な苦労の中、自分たちのシーツを裂いておむつにし、米を重湯にしてミルク代わりにするなど献身的に活動しながら周囲の理解を得、その活動を広げていきました。修道会の創設以来、本校にも脈々と受け継がれているのが、見返りを求めず人に尽くす、可能性を追究する、物事や人の背景を考える、持っている力を伸ばす努力・工夫をする、という理念です。この理念は今まさに必要とされている問題解決能力、チャレンジ精神などに合致するものであり、「地域協働事業」プログラムは、本校の理念を体現できるものと言えます。

2020 年度はコロナ禍ですべてが異例の年となりました。2 か月の休校、フィールドワークやポスターセッションの中止など生徒にも教員にも厳しい 1 年でした。そのような中、生徒はオンラインによる発表や会議などいろいろと工夫をしながら、自分たちの探究活動に打ち込んでいました。どのような状況であれ創意工夫を重ね可能性を追求する生徒や先生方の姿勢はまさに本校の理念を体現したもので、非常に感銘を受けました。

本校はＳＧＨアソシエイトに認可される 1 年前からプログラムを進めてまいり、今年で 8 年目を迎えます。当初は 1 クラス、和歌山市だけのプログラムでしたが、徐々にクラスから 1 学年そして高校全体、和歌山県、そして今や世界へと活動範囲を広げています。この間、企業、大学、官公庁の皆様方から多くのご協力をいただいたことで、生徒たちに変化が出てきました。明らかに積極性、アクティブさが増してきたのです。コロナ禍で世の中の変化がさらに大きく速くなると言われていますが、生徒の様子を見ておりますと、どのような状況でも柔軟に対応できるのでは、と思わせてくれます。

「地域協働事業」では、地域と世界の両方の視点を持って社会に貢献していける女性「Key Girl」を育てることを目標にしております。本校の生徒が少しでも地域に貢献し、それがこれからの地域での女子生徒のモデルの一つになることを楽しみにしています。

本校のプログラムは、まだまだ未完成で皆様のご協力を必要としております。今後ともご指導、ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

2019 年度文部科学省指定
「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（グローカル型)」
2020 年度研究開発実施報告書【第 2 年次】

はじめに ……1

目次……2

Ⅰ　研究開発の概要
①　研究開発概要図……3
②　研究開発の概要……4
③　育成を目指す人材像 ……6
④　高等学校と地域との協働によるコンソーシアムの体制
⑤　海外交流アドバイザー（グローカル型のみ)・地域協働学習実施支援員
⑥　三カ年の実施内容、実施方法およびスケジュール……7
⑦　目標設定シート……11

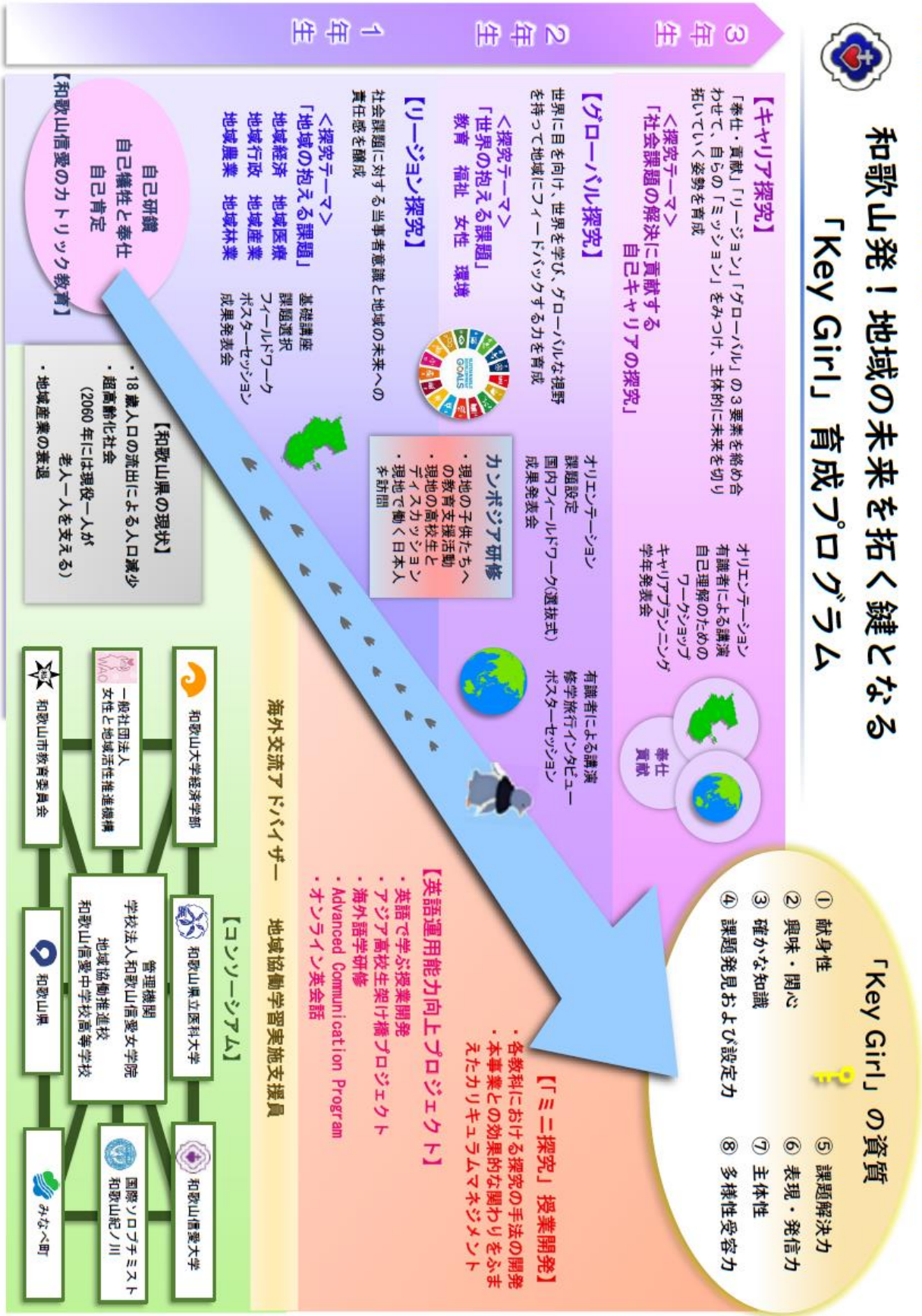
Ⅱ　具体的な研究開発内容報告
①　開発単位Ⅰ「リージョン探究」(現高校 1 年生対象　※4 月から実施）……13
②　開発単位Ⅱ「グローバル探究」(現高校 2 年生対象）……34
③　開発単位Ⅲ「キャリア探究」(現高校 3 年生対象　※プレ活動）……59
④　開発単位Ⅱ「グローバル探究」(現高校 1 年生対象　※本来は 1 月開始予定）……85
⑤　開発単位Ⅲ「キャリア探究」(現高校 2 年生対象　※本来は 1 月開始予定）……87
⑥　開発単位Ⅳ 各教科による「ミニ探究」授業開発……89
⑦　2020 年度研究成果発表会……91
⑧　その他の取り組みについて ……93
⑨　次年度に向けて……119

Ⅲ　コンソーシアム運営会議報告
①　第 1 回コンソーシアム運営会議……120
②　第 2 回コンソーシアム運営会議……121
③　第 3 回コンソーシアム運営会議……122
④　第 4 回コンソーシアム運営会議……122

Ⅳ　運営指導委員会報告
①　第 1 回運営指導委員会……124
②　第 2 回運営指導委員会……126

Ⅰ　研究開発の概要

①　研究開発の概要図



②　研究開発の概要　（2018 年度の申請時のもの）

<table>
<tr><td colspan="2">指定期間</td><td>ふりがな</td><td colspan="3">わかやましんあいちゅうがっこうこうとうがっこう</td><td rowspan="2">②所在都道府県</td><td rowspan="2">和歌山県</td></tr>
<tr><td colspan="2">2019～2021</td><td>①学校名</td><td colspan="3">和歌山信愛中学校高等学校</td></tr>
<tr><td colspan="2" rowspan="2">③対象学科名</td><td colspan="5">④対象とする生徒数</td><td colspan="2">⑤学校全体の規模</td></tr>
<tr><td>１年</td><td>２年</td><td>３年</td><td>４年</td><td>計</td><td colspan="2" rowspan="3">全日制普通科の女子校。1 学年は８学級。医進・特進・学際の３コース制。中高で 1043 名。年次進行で全生徒を対象とする。</td></tr>
<tr><td colspan="2">普通科</td><td>２３１</td><td>２６３</td><td>２４８</td><td></td><td>７４２</td></tr>
<tr><td colspan="2">（中学部）</td><td>１０４</td><td>１００</td><td>９７</td><td></td><td>３０１</td></tr>
<tr><td colspan="2">⑥研究開発構想名</td><td colspan="6">和歌山発！地域の未来を拓く鍵となる「Key Girl」育成プログラム</td></tr>
<tr><td colspan="2">⑦研究開発の概要</td><td colspan="6">地域の抱える課題を最善の解で解決に導きたいと考え、主体的に行動できる女性（Key Girl）を育成するため、「リージョン」「グローバル」「キャリア」をテーマとした探究学習プログラムを、コンソーシアム参加機関と協働しながら開発・実践する。</td></tr>
<tr><td>⑧研究開発の内容等</td><td>⑧-1 全体</td><td colspan="6">

(1) 目的・目標

若く有能な人材が都市部へと流出し続けることで、少子高齢化が加速し、様々な社会課題に悩まされるようになった和歌山県において、カトリック教育を通して己の利益に固執しない清廉さと他者の心に寄り添い、奉仕・貢献する心を身につけた本学生徒が、地域の未来を憂うコンソーシアム参加機関からの全面的支援を受け、３つの探究学習プログラムを通してグローバルな視点も有しながら、地域の未来のために主体的に行動できる女性へと成長することを目的とする。

(2) 現状の分析と研究開発の仮説

現状①本学のある和歌山県は、急速に少子高齢化が進み、このままでは 2060 年度には現役世代１人が１人の高齢者を支えるという社会構造となり、税収の減少などから行政サービス、医療、交通など生活を支える機能の維持が困難になると予測されている。そのため、次世代を担う高校生の主体的な関わりが強く求められている。

②上記のような状態を招いたのは、30 年近くに渡り和歌山県の高校卒業者の県外大学進学率が 90%近くで全国１位という状態であることが大きく関係している。地域の高等学校は有名大学への進学を競い、保護者世代も地域の未来に対して悲観的な印象を持っているのか、大都市圏にある偏差値の高い大学へ進学させることが最大の目的となっている。

③本学は建学よりカトリックの理念による人間教育に邁進してきた。1990 年代からは②の影響を受け、英語教育・理系科目の充実・二人三脚の指導が導入され、めざましい進学実績の伸びへとつなげたものの、その指導が生徒の能動的な学びを奪い、内向きの状態を招くことになってしまった。そこで、近年になって探究学習を導入したところ、生徒たちの中に主体的に将来を切り拓こうとする姿勢が見られたり、様々な外部のプログラムにチャレンジしようとしたりするなど、明らかな変容が見られはじめた。

仮説①【地域】地域の様々な機関がコンソーシアムを構成し、本学生徒と協働して、地域に貢献する人材を育成することは本地域に大きな影響を与え、産学官と地域住民とが一体となって、地域の抱える課題を解決しようとする動きへと広がりをみせる。また、これまで地域に貢献する人材の育成には関心が薄かった周辺の高等学校も地域協働推進連携校へと名乗りをあげる。

仮説②【生徒】本事業の各プログラムを通して、課題解決力や表現・発信力、主体性などの各種能力を身につけるとともに、地域の未来のために尽力する人々との協働の経験から地元との「絆」が結ばれ、将来何らかの形で地域の未来のために奉仕・貢献したいという思いを抱くようになる。

</td></tr>
</table>

	⑧-2 具体的内容	**(1) 地域との協働による探究的な学びを実現する学習の実施計画** 地域課題に取り組む「リージョン探究」、グローバルな社会課題に取り組む「グローバル探究」、これまでの探究活動の成果を踏まえ、自らの生き方を考える「キャリア探究」の３つの探究プログラムを設定し、下記の様に展開する。 Ⅰ 「リージョン探究」（高校１年生１学期～３学期） コンソーシアム参加機関の支援のもと、６つ（経済・医療・産業・行政・農業・林業）の地域課題の中から１つを選んで探究学習を行い、地域課題に対する当事者意識、地域の未来への責任感を醸成するとともに、探究活動の基礎的な手法を身につける。 なお、本プログラムでは、クラスを越えてグループを編成し、「多様性受容力」「表現・発信力」等の育成を目指す。また、課題の設定は担当講師が行う。 Ⅱ 「グローバル探究」（高校１年生３学期～高校２年生３学期） コンソーシアム参加機関の支援のもと、「SDGs」の中から本学と関連の深い４つ（教育・福祉・女性・環境）のグローバル課題の中から１つを選んで探究学習を行い、グローバルな視野を有した上で、地域にフィードバックする手法を身につける。 なお、本プログラムでは、課題設定や国内フィールドワークの作成を生徒自身が行う挑戦的な形をとることによって、「課題解決力」だけでなく「課題設定力」、困難に負けない「主体性」、交渉を成功に導く「表現・発信力」等を育成する。 Ⅲ 「キャリア探究」（高校２年生３学期～高校３年生２学期） カトリックの精神を土台とし、Ⅰ・Ⅱのプログラムを経て成長した生徒たちには、今後予測される大きな社会構造の変化に対して受け身で対応するのではなく、自ら課題を発見し、時には国籍を越えた他者とも協働しながら未来を切り拓いていく姿勢が求められる。「奉仕・貢献」「リージョン」「グローバル」の３要素を関連させながら、自らの「ミッション」を見つけた上で、キャリアプランニングを行う。 なお、本プログラムは、個人による探究学習とするが、ディスカッション等を通して、他者から刺激を受けることで、「深い学び」を実現させる。 ※ 各活動期間が重複しているが、その期間を利用し、コンソーシアム参加機関との実践を伴う発展的な活動の実現を目指す。また、２年次には、「リージョン探究」の成果を「グローバル探究」の学びで改善しながら各種の外部コンテストに応募する。 **(2) カリキュラム・マネジメントの推進体制** 本事業で育成を目指す人材像を全教職員と生徒が理解・共有した上で「総合的な探究の時間」を用いて行う本事業の学びと各教科における学びとが、目標の達成に向けて効果的であるかを、カリキュラム検討会議を実施して改善する。なお、指定終了直前の会議では、本事業の１期生の代表を本会議に参加させ、生徒の意見も反映させる。 **(3) 必要となる教育課程の特例等** 「総合的な探究の時間」を２単位（１単位増）とし、ＬＨＲと併用しながら運用する。
	⑨その他特記事項	**(1) その他の取り組み（グローカル型として）** Ⅰ 各教員による「ミニ探究」授業の開発 本事業による探究学習を補完・発展させるものとして、各教員がミニ探究授業を開発・実践する。また、教科会議の振り返りを通して、カリキュラム検討会議を実施する。 Ⅱ 「カンボジア研修」の実施 グローカル型の本事業におけるリーダー研修として実施する。本学管理機関の共同体として、カンボジアの地方で教育支援活動を行うシスターを訪問し、ボランティア活動を行うことで「学ぶことへの意識改革」「自己のキャリアに対する意識改革」を促す。 Ⅲ 「英語運用能力向上プロジェクト」 ① 「英語で学ぶ」授業開発。各教科の教員と英語科教員とが協働し、英語を学ぶのではなく、英語で学ぶ授業を共創する。 ② 「アジア高校生架け橋プロジェクト」２期生（１名）を受け入れる。 ③ 「海外語学研修」の実施（2019 年度は、カナダとオーストラリア） ④ 「Advanced Communication Program」（中学３年生は全員。高校生は希望者で実施）海外の大学生を招き、４泊５日の短期集中型プログラムを展開する。 ⑤ タブレット端末を用いた「オンライン英会話授業」の実施。（2019 年度新規実施） ※上記の取り組みを通して、卒業段階で７割の生徒を CEFR のＢ１以上とする。

③　育成を目指す人材像

1「Key Girl」とは、

・人と人を繋ぐキー（Key）パーソン
・地域の未来を拓く鍵（Key）となり
・和歌山県（紀伊）にキャンパスを構える本学に通う、女子高校生

2　資質

①献身性　②興味・関心　③確かな知識　④課題発見および設定力
⑤課題解決力　⑥表現・発信力　⑦主体性　⑧多様性受容力

④　高等学校と地域との協働によるコンソーシアムの体制

機関名	機関の代表者名
和歌山県	知事　仁坂　吉伸
和歌山市教育委員会	教育長　阿形　博
みなべ町	町長　小谷　芳正
公立大学法人和歌山県立医科大学	理事長・学長　宮下　和久
国立大学法人和歌山大学経済学部	学部長　藤永　博
学校法人和歌山信愛大学	※１副学長　大山　輝光
一般社団法人女性と地域活性推進機構	代表理事　堀内　智子
国際ソロプチミスト和歌山紀ノ川	会長　宮本　安津子
学校法人和歌山信愛女学院和歌山信愛中学校高等学校（推進校）	※２副校長　紙岡　智
学校法人和歌山信愛女学院（管理機関）	理事長　森田　登志子

※１　管理機関の理事長が大学の学長を兼任しているため、代表を副学長とする。
※２　管理機関の理事長が推進校の校長を兼任しているため、代表を副校長とする

⑤　海外交流アドバイザー（グローカル型のみ）・地域協働学習実施支援員

・海外交流アドバイザー

氏名	所属・職
Sr.橋本　進子	ショファイユの幼きイエズス修道会カンボジアカンポット共同体
伊東　邦将	HAPPY SMILE TOUR CEO

・地域協働学習実施支援員

氏名	所属・職
柳岡　克己	学校法人和歌山信愛女学院　学監

※　本事業の担当として、コンソーシアム参加機関との連絡、調整を担当し、管理機関において雇用する。

⑥　3カ年の実施内容、実施方法及びスケジュール

1　2019年度（指定1年目）　※実施済

重点実施項目

○ 高校1年生「リージョン探究」の完全実施

・　2018年度までのＳＧＨアソシエイトプログラム「探究基礎」を改変した「リージョン探究」の全活動を実施する。

実施項目

○ 高校2年生「グローバル探究」の一部実施と開発

・　2018年度までのＳＧＨアソシエイトプログラム「探究発展Ｉ」を改変し、次年度の完全実施に向けて、内容の妥当性・効果等を検証する。

・　国内フィールドワーク、海外フィールドワークを実施し、次年度の実施に向けて研修内容の妥当性・効果等を検証する。

・　カナダ修学旅行で実施していたグローバルインタビューが、イタリア修学旅行（2019年度から行き先が変更）でも実施可能であるかを模索する。

・　必要な評価基準（ルーブリック）を策定する。

○ 「英語で学ぶ」授業の指導法および教材開発

・　今後の基準となるモデル授業の指導案の作成と実践を行い、その後、評価・改善を行う。

○ 各教科における「ミニ探究」授業の開発・実践

・　全教員が通常の授業において「探究」の要素を含んだ1コマを開発し、実践する。

・　実施した授業は、教科会議で共有する。さらに教科主任会議において、「総合的な探究の時間」に実施する本事業の進行と連携し、大きな効果をあげることができるようにカリキュラムマネジメントを実施する。

○ その他

・　生徒、教員、保護者、コンソーシアム参加機関で、本事業の内容、成長目標を理解・共有する。

・　高校3年生「キャリア探究」の実施に向けて環境整備を行う。

・　強い興味、関心と深い学びを生徒たちに生じさせるために、学校の特性、課題研究の内容、海外研修の渡航地等で共通性の高い他校と合同研修会の実施を模索する。

・　各取り組みの成果をいかに蓄積していくかを模索する。

2　2020年度（指定2年目）　※本年度

重点実施項目

○ 高校2年生「グローバル探究」の完全実施

・　前年度部分実施を踏まえ、改善の上、実施する

・　国内フィールドワーク・海外フィールドワークは昨年度の取り組みを踏まえ、改善の上実施する。なお、海外交流アドバイザーとともにその妥当性と効果を検証し、更なる改善を行う。

実施項目

○ 高校３年生「キャリア探究」の一部実施と開発

・　2018 年度までのＳＧＨアソシエイトプログラム「探究発展Ⅱ」を改変し、次年度の完全実施に向けて、内容の妥当性・効果等を検証する。

・　ジェネリックスキルを客観的に測定するため、外部業者の測定ツールを利用する。

・　必要な評価基準（ルーブリック）を策定する。

○ 各教科による「ミニ探究」授業の開発・実践およびカリキュラムマネジメント

・　前年度の反省を踏まえ、実施した「ミニ探究」授業を改善および更なる新規実施を行う。探究活動の評価基準・方法については、各教科で策定を行う。

・　各教科の教科会議でこれまで実施してきた「ミニ探究」の授業と「総合的な探究の時間」で実施する本事業との連携を踏まえ、最大限の効果が発揮できるような授業配置を行い、教科主任会議にて共有・検討する。

○ 「英語で学ぶ」授業の指導法および教材の開発

・　アジア高校生架け橋プロジェクト第 3 期生が在籍するクラスを中心に、前年度のモデル授業をもとに、さらに拡大、実施する。

○ 英語外部検定（GTEC 等）における目標スコアの設定

・　過去２カ年の GTEC の結果を踏まえ、英語科を中心にコースごとの目標スコアを設定する。

○ 「合同カンボジア研修研究会」を幹事校として開催

・　地域協働事業（グローカル型）およびＳＧＨ等でカンボジアをフィールドとして海外研修を実施する学校を招き、それぞれの学びを共有するだけでなく、さらに深化させるための会を企画・実施する。

３　2021 年度（指定３年目）　※新型コロナウイルスの影響を受け、一部変更した

重点実施項目

○ 高校３年生「キャリア探究」の完全実施

・　前年度の部分実施を踏まえ、改善の上実践する。

○ 研究成果発表会の実施

・　本事業の成果を地域や他校に普及するために、外部施設を借りて発表会を実施する。

・　初年度にプレ学年として参加した現高校３年生も数名招き、本事業と大学の学びとの繋がりについても報告させる。

○ 本事業の研究完了報告書の作成

・　本年度は本事業 1 期生の卒業年度にあたるため、3 年間の事業成果を総括の上、取りまとめる。

・　公開可能な部分に関しては本学ＨＰ上に公開し、事業普及のために貢献する。

○ 指定終了後の取り組みについて

・　指定終了後の 2022 年度も本申請内容を継続できるような体制の構築を模索する。

実施項目

○ 各教科による「ミニ探究」授業の開発再開

・ 新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から ICT を用いた教育環境への移行を優先するため凍結していた「ミニ探究」授業開発を再開する。

○ 「英語で学ぶ」授業の開発再開

・ 新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から ICT を用いた教育環境への移行を優先するため凍結していた「英語で学ぶ」授業開発を再開する。

○探究活動におけるビデオ会議ツール等の利用推進

・ 今年度、新型コロナウイルスの感染拡大という突然の事態に陥り、当初予定していたプログラムの中で、学外で活動するものや、他者との対面を伴うものを実施することができなかった。本学が一気に ICT 教育の環境を整えたことで、Zoom や Google Meet などのビデオ会議ツールを用いての調査活動を推奨した。次年度の状況はまだまだ不透明であり、対面型の調査活動の方が生徒たちへの衝撃という点では大きく、効果も高いものになるという考えには変わりはないが、ビデオ会議ツールには距離を越えて調査活動を実施できるという利点もあり、次善の策としてこれらを用いることを推進する。

○新学習指導要領に対応したカリキュラムマネジメント

・ これまでの取り組みを踏まえ、次年度に控えた年次進行による次期学習指導要領へのスムーズな移行を目指し、本学独自のカリキュラム作成を完成させ、学校、保護者、生徒に周知徹底を行う。

○オンライン型探究教材の開発

・ 本事業への取り組みを通して多くの外部機関との繋がりが生まれた。その中から、コロナ禍においても活用できるオンライン型探究教材の協働開発を行う。

○ 英語外部検定（GTEC 等）について

・ 前年度設定した英語外部検定の目標スコアの達成度合いを確認の上、英語に対する学びのモチベーションの向上も含めた指導方法の改善を行う。同時に目標スコアの適宜修正を加える。

（参考）2022 年度～（指定外 1 年目以降）

重点実施項目

○ 本申請内容の本校予算（管理機関支援）による運営

・ 地域協働推進校として指定期間と変わらない運営を実施する。

○ 文部科学省による本学事業に対する評価の精査

・ 文部科学省からの事業評価を受け、一連の研究開発について、場合によってはその内容を抜本的に見直し、より成果の見込まれる手法へと改善し、実践を継続する。

実施項目

○ 次期学習指導要領に基づく指導の実践

・ 次期学習指導要領への移行期間が終了し、2022 年度より年次進行で新しい学習指導要領のも

とでの教育が実施される。編成した本学独自のカリキュラムを実践しながらも評価・改善を繰り返すことで、さらに質の高いカリキュラムへと練り上げていく。

・ これまでの地域協働推進校としての活動成果を十分に発揮し、地域の高等学校を牽引する存在となる。

⑦　目標設定シート（2020 年度報告）

	2017年度	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度
全校生徒数（人）			732	684	645
本事業対象生徒数			485	684	645
本事業対象外生徒数			247	0	0

1．本構想において実現する成果目標の設定（アウトカム）

		2017年度	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度	目標値（2021年度）
a	（卒業時に生徒が習得すべき具体的能力の定着状況を測るものとして、管理機関において設定した成果目標） 推進校以外の機関が実施する課題探究プログラムに自主的に参加する生徒の数						単位：　名
	本事業対象生徒：			126	59		175
	本事業対象生徒以外：	38	52	0	0		
	目標設定の考え方：高校3年生は難しいが、高校１、２年生の半数が自主的に参加してほしいと考え算出した						
a	（卒業時に生徒が習得すべき具体的能力の定着状況を測るものとして、管理機関において設定した成果目標） オンライン等を含んだ外部団体が主催するシンポジウムおよび講演に参加する生徒の数						単位：　名
	本事業対象生徒：			168	37		200
	本事業対象生徒以外：	―	32	0	0		
	目標設定の考え方：高校3年生は難しいが、高校１、２年生の半数が自主的に参加してほしいと考え算出した						
a	（卒業時に生徒が習得すべき具体的能力の定着状況を測るものとして、管理機関において設定した成果目標） ローカルおよびグローバルな社会課題に関する公益性の高い大会（オンラインも含む）に自主的に参加する生徒の数						単位：　名
	本事業対象生徒：			75	22		175
	本事業対象生徒以外：	73	115	0	0		
	目標設定の考え方：高校3年生は難しいが、高校１、２年生の半数が自主的に参加してほしいと考え算出した						
b	（高校卒業後の地元への定着状況を測るものとして、管理機関において設定した成果目標） 高校卒業段階で、将来地元には戻らないかもしれないが何らかの形で地元の未来のために貢献したいと考える生徒の割合						単位：　%
	本事業対象生徒：			81	88		90
	本事業対象生徒以外：	―	30	0	0		
	目標設定の考え方：本事業を通して、全ての生徒に地元の未来に貢献する意識をもってほしいと考え算出した						
b	（高校卒業後の地元への定着状況を測るものとして、管理機関において設定した成果目標） 高校卒業段階で、将来地元に戻り地元の未来のために貢献したいと考える生徒の割合						単位：　%
	本事業対象生徒：			56	87		65
	本事業対象生徒以外：	―	10	0	0		
	目標設定の考え方：本事業を通して、将来多くの生徒に地元で働いてほしいと考え算出した						
b	（高校卒業後の地元への定着状況を測るものとして、管理機関において設定した成果目標） 高校卒業段階で自宅から通学できる地元の大学や専門学校に進学する生徒の割合　※3月23日現在						単位：　%
	本事業対象生徒：			―	39		35
	本事業対象生徒以外：	17	21	29	0		
	目標設定の考え方：本事業を通して、地元の大学に通うという選択肢を持つようになると考え算出した						
b	（高校卒業後の地元への定着状況を測るものとして、管理機関において設定した成果目標） 大学卒業段階で、地域の未来のために貢献できると感じる職業に就く生徒の割合　※2026年度						単位：　%
	本事業対象生徒：			―	―		60
	本事業対象生徒以外：	―	―	0	0		―
	目標設定の考え方：本事業の効果が大学卒業後も継続していると考え算出した						
c	（その他本構想における取組の達成目標） 高校卒業段階における４技能の総合英語力がCEFRでＢ１以上の生徒の割合　※2020年度高３生のみ						単位：　%
	本事業対象生徒：			―	59		70
	本事業対象生徒以外：	―	24	18	0		―
	目標設定の考え方：本事業を通して、留学等でグローバルな視野を獲得したいと考える生徒が増えると考え算出した						

２．地域人材を育成する高校としての活動指標（アウトプット）

		2017年度	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度	目標値（年度）
a	（地域課題研究又は発展的な実践の実施状況を測るものとして、管理機関において設定した活動指標） 教育改革推進事業運営委員会の主催で全教員が参加するカリキュラム検討会議の実施回数						単位：　回
		―	0	1	1		2
	目標設定の考え方：運営指導委員会の指導・助言を反映させるため、運営指導委員会後に開催することを踏まえて算出した						
a	（地域課題研究又は発展的な実践の実施状況を測るものとして、管理機関において設定した活動指標） 開発単位Ⅳ「ミニ探究」の充実および開発教材の情報を共有するための教科主任会議の回数						単位：　回
		―	0	1	0		8
	目標設定の考え方：「ミニ探究」は5月から開始し、8･12･3月は実施しないことを考えて算出した						
a	（地域課題研究又は発展的な実践の実施状況を測るものとして、管理機関において設定した活動指標） 研究授業の実施回数（年間1回　３教科）						単位：　回
		―	1	1	1		1
	目標設定の考え方：研究授業は現行通りとするが、「ミニ探究」授業は日常的に参観し、学びあえる環境を作る						
b	（普及・促進に向けた取組の実施状況を測るものとして、管理機関において設定した活動指標） 各開発単位における発表会（動画形式を含む）の実施回数						単位：　回
		―	2	5	7		8
	目標設定の考え方：開発単位Ⅰ・Ⅱはポスターセッションと最終発表会の2回ずつと成果発表会の1回と合わせ、計5回とした						
b	（普及・促進に向けた取組の実施状況を測るものとして、管理機関において設定した活動指標） 本学ＨＰ上での本事業の活動報告を行う回数						単位：　回
		―	43	35	7		20
	目標設定の考え方：ＳＧＨアソシエイトプログラムにおける2018年の活動報告の回数をもとに算出した						
c	（その他本構想における取組の具体的指標） 他のグローカル校と連携し、地域人材の育成を補助するような取り組みを行う						単位：　回
		0	0	0	2		2
	目標設定の考え方：「Glocal High School Meetings2021」における協力校と合同カンボジア研修の幹事校を踏まえて						

３．地域人材を育成する地域としての活動指標（アウトプット）

		2017年度	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度	目標値（年度）
a	（地域人材を育成する地域としての活動の推進状況を測るものとして、管理機関において設定した活動指 コンソーシアム構成団体数						単位：　団体
		―	(10)	10	10		12
	目標設定の考え方：本事業を継続する中で、連携を申し出てくれる機関が増えると考えて算出した						
a	（地域人材を育成する地域としての活動の推進状況を測るものとして、管理機関において設定した活動指 課題研究または発展的な実践に協働する外部人材の参画状況（オンラインを含む）						単位：　人
		―	72	のべ153	のべ438		のべ230
	目標設定の考え方：本事業のプログラムおよび各発表会等への参加を依頼することを踏まえて算出した						
b	（地域人材を育成する地域としての活動の推進状況を測るものとして、管理機関において設定した活動指 コンソーシアム運営委員会の実施回数						単位：　回
		―	0	3	3		4
	目標設定の考え方：年間で前年度反省・新規参入１、カリキュラム検討・助言2、成果報告１と考え算出した						
c	（その他本構想における取組の具体的指標） コンソーシアム参加機関等との協働のもと地域協働事業の学びを踏まえたオンライン教材の開発を行う						単位：　個
		―	0	0	0		2
	目標設定の考え方：株式会社マイナビとの教材開発を踏まえて算出した						

Ⅱ　具体的な研究開発内容報告

①　開発単位Ⅰ「リージョン探究」（現高校１年生対象　※４月から実施）

１　目的

地元和歌山の抱える地域課題と向き合うことによって、社会課題に対する当事者意識、地域の未来への責任感を醸成し、探究活動の基礎的な手法を身につけることを目的とする。地域の未来のために尽力するそれぞれの立場の人たちと協働するということで「絆」が結ばれると同時に、人と人とを繋ぐ「Key」パーソンとしての資質が育成される。また、自己の利益だけを考えたキャリア形成ではなく、将来地元のために奉仕・貢献したいという気持ちが育まれる。

２　内容

地域の「医療」「経済」「産業」「行政」「農業」「林業」という６つの分野の課題をテーマに、高校１年生を６つのグループに分けて探究学習を実施する。コンソーシアム参加機関から派遣された講師が提示した課題についてグループディスカッション、フィールドワーク、中間発表等の活動を経て、最終発表会において、最善の解決策を提案する。本探究プログラムは、グループによる協働活動とし、コースやクラスの垣根を越えたグループ編成を行う。

３　期待される成果

「Key Girl」の資質　…　①・②・③・⑤・⑥・⑦・⑧

４　新型コロナウイルスの影響

緊急事態宣言および和歌山県知事の休校要請を受け、4 月 7 日（火）入学式の翌日から 6 月 13 日（土）まで休校措置をとった。そのため、本来４月に予定されている新入生研修合宿からスタートするはずの本事業をスタートすることができず、他者との対面型のプログラムに関しても、中止および内容の変更で対応することとなった。詳しくは、６のｉに述べる。

５　ICT 機器の活用

本年度の高校１年生より、iPad を１人１台所有することとなった。休校が年度当初からであったことから、iPad そのものの配布ができなかったこと、また、使用におけるルールを徹底できなかったため、本事業において使用することができなかったが、休校明けの With コロナ時代の探究学習においては、ルールを設定しながら積極的に活用している。

また、同時に教育プラットフォーム「Classi」および学習支援クラウド「ロイロノート SCHOOL」を導入した。

6　概要（実践）

i　年間実施内容

学期	回	月日	コマ数	内容	実施状況
1	①	4月中旬	1	新入生研修合宿（内進生）にて 「地域協働事業」および「リージョン探究」ガイダンス	中止
			2	「信愛フェスタに企画を出そう」グループワーク	
			1	「信愛フェスタに企画を出そう」発表会	
			1	新入生研修合宿（高入生）にて 「地域協働事業」および「リージョン探究」ガイダンス	中止
		5月18日（月）	1	「地域協働事業」説明動画を限定配信	代替実施
		5月20日（水）	1	「リージョン探究」説明動画を限定配信	代替実施
	－	4月下旬	2	プレ活動（ブレーンストーミング練習）	中止
	②	5月下旬	2	「リージョン探究」パネルディスカッション（体育館）	中止
		5月22日（金）	1	パネルディスカッション説明動画を限定配信	代替実施
	③	5月25日（月）	2	各分野の講師による説明および課題提示動画を限定配信	代替実施
	－	－	－	分野および活動グループの編成	通常実施
	④	6月26日（月）	2	グループワーク①　アイスブレイク	通常実施
	⑤	7月6日（月）	2	グループワーク②　解決策のアイディア出し	通常実施
	⑥	7月27日（月）	2	グループワーク③　フィールドワークに向けて ※ただし、生徒は校外での調査活動を行わない	変更実施
	⑦	7月中旬	6	フィールドワーク	中止
		7月下旬	2	グループワーク④　フィールドワークの振り返り	中止
		8月3日（金）	2	動画によるフィールドワーク 「医療」… 和歌山県立医科大学、すさみ病院 「経済」… 湯浅町伝統的建造物保存地区、湯浅醤油角長等 「産業」… みなべ町うめ振興館等 「行政」… 和歌山市役所、ぶらくり丁等 「農業」… 桃山町、有田川町の農業関連施設等 「林業」… 田辺市林業現場等 ※担当教員が現地を訪問し、フィールドワーク動画を作成	代替実施
				グループワーク④　フィールドワークの振り返り	変更実施
夏休み	－	夏期休暇中	－	自主的な活動を推奨 ※今年度は夏期休暇が１週間しかないため実施せず	中止

学期	回	月日	コマ数	内容	実施状況
2	⑧	8月31日（月）	2	グループワーク⑤　中間発表のアウトラインを考える ※昨年度のポスターセッション形式ではなく発表動画を作成	変更実施
	⑨	9月7日（月）	2	グループワーク⑥　中間発表用のポスターの作成	変更実施
	⑩	10月12日（月）	2	グループワーク⑦　中間発表用ポスターおよび発表原稿の作成	変更実施
	⑪	10月26日（月）	2	グループワーク⑧　中間発表動画の撮影	変更実施
	－	10月中旬	2	ポスターセッション（体育館・口頭発表）	中止
		－	－	動画による中間発表 ・10月31日（土）を発表動画の提出期限とし、11月2日（月）～11月12日（木）の期間で限定配信動画を視聴 ・本学独自の発表用ルーブリックを用いて評価 ・各分野講師に評価およびアドバイスシート作成を依頼 ・生徒も動画を視聴の上、評価活動を実施	変更実施
	⑫	11月16日（月）	2	グループワーク⑨　中間発表からのブラッシュアップ活動	通常実施
	⑬	12月9日（水）	2	グループワーク⑩　最終発表用ＰＰＴ資料および発表原稿の作成 ※昨年度の口頭発表形式ではなく、発表動画を作成	変更実施
	⑭	12月14日（月）	2	グループワーク⑪　最終発表用ＰＰＴ資料および発表動画の撮影	変更実施
	－	12月中旬	8	最終発表会（ホール・口頭発表）	中止
		－	－	動画による最終発表 ・12月18日（金）を発表動画の提出期限とし、12月21日（月）～1月8日（金）の期間で限定配信動画を視聴 ・本学独自の発表用ルーブリックを用いて評価 ・各分野講師に評価活動および講評動画の作成を依頼 ・生徒も動画を視聴の上、評価活動を実施	変更実施
3	⑮	1月18日（月）	2	「リージョン探究」リフレクション ・各講師の講評動画の視聴 ・ルーブリック評価表を用いて、評価活動（自己、他者）	変更実施
	－	－	－	「リージョン探究」レポートの作成 ※1月23日（土）を期限とし、Classi上に提出	変更実施
	－	2月中旬	3	研究成果発表会（体育館・口頭発表） ※高２「グローバル探究」と合同で優秀班のみ発表	中止

ii　担当講師および提示課題

医療　：　和歌山県立医科大学　上野雅巳先生

〔課題〕①和歌山県における医師偏在、診療科偏在をどのように解決するか。

②医療環境に関わらず、病気にかからない体をどのように作っていくか。

経済　：　和歌山大学　足立基浩先生

〔課題〕三密（密室・密閉・密接）回避の時代での商店街活性化について考える。

産業　：　みなべ町うめ課　下浦智久先生

〔課題〕持続可能な梅産業を形成するには

行政　：　和歌山市都市建設局都市計画部　松尾陽介先生

〔課題〕和歌山市を魅力的で楽しいまちにするには

農業　：　和歌山県農林水産部農林水産政策局　初山守先生

〔課題〕和歌山県産の農産物の効果的な PR・消費拡大・ブランド化（加工を含む）について考える

林業　：　和歌山県農林水産部森林・林業局　小川泰典先生

〔課題〕私たちの生活の中で紀州材をどのように活用していくか（新商品の開発なども含む）

7　評価

i　評価方法

各担当講師から提示された地域の抱える課題に対する「最善の解」の提案に向けて、主体的かつ協働的に探究学習に取り組んだ経緯をプログラム終了後に、「S（大変優れている）・A（優れている）・B（改善を必要とする）・C（努力を必要とする）」の４段階からなる本学独自のルーブリック評価表（表１）を用いて評価を行った。なお、本ルーブリック評価表は、「リージョン探究」のスタート段階で生徒に配布し、評価基準を明確化するとともに、目指すべき目標としている。また、評価は自己および他者（グループのメンバー）、そして担当教員から実施し、より多面的かつ客観的なものとなるようにしている。

さらに、発表に関しては、アドバイスシートに付属したルーブリック評価表（表２）を用いて、各分野の講師、生徒、教員、コンソーシアム参加機関、保護者など複数の視点からの評価をいただいている。

ii　ルーブリック評価表

（表１）

	姿勢		探究	コミュニケーション	
	献身性・主体性	興味関心	課題解決力	表現・発信力（他者へ）	多様性受容力（他者から）
S	グループのリーダー的存在として自らの役割や責任を果たすだけでなく、活動を通して進んで地域の未来のために貢献しようとする強い意志が感じられた。	地域の方々の危機意識からスタートした活動であるが、強い好奇心とともに深い探究が行われ、未来の地域のあり方に強い興味関心を持つようになった。	充実した調査を通して得た資料やデータを踏まえ、十分な論拠とともに独創的な解決策を展開することができた。	他者に対して様々な方法・手段を駆使して分かりやすく伝えることができただけでなく、意見の異なる相手からも理解を得ることができた。	自らと考えや価値観が異なる人とも自分から積極的に交流し、自らにない価値観を受け入れるなど相互理解を通して質の高い成果につなげることができた。
A	グループの一員として自らの役割や責任を果たした経験から、将来地域の未来のために貢献したいという思いを抱くに至った。	地域の方々の危機意識からスタートした活動であるが、深い探究を行おうと積極的に取り組んだことで、未来の地域のあり方に興味関心を持つようになった。	熱心な調査を通して得た資料やデータを解釈して、解決策を展開することができたが、ありふれたものに留まってしまった。	他者に対して常に分かりやすく伝えようとし、意見の異なる相手からも理解を得ようと工夫することができた。	自らと考えや価値観の異なる人のことも尊重し、探究活動がより意義あるものとなるように協働することができた。
B	与えられた自らの役割は果たしたが常に受動的で、地域の未来のために貢献するという生き方に価値を見いだすことができなかった。	地域の方々の危機意識からのスタートであったため、積極的に探究活動に取り組むことができず、興味関心を広げることができなかった。	独自の解決策を展開しているが、調べた資料やデータ等を活用することができておらず、論拠に乏しいものとなってしまった。	他者に対して自らの思いを伝えようとする気持ちはあるものの、伝わらないもどかしさから感情的になる場面が多く見られた。	自らと考えや価値観の異なる他者の存在に気付くことはできたが、自らの考えを押し通そうとする場面が多く見られた。
C	グループの一員としての役割も果たそうとせず常に消極的で、地域の未来のために貢献することへの価値を全く見出すことができなかった。	地域の方々の危機意識からのスタートであったため、興味関心を持つ事柄を全く見出すことができず、探究活動を他のメンバーに任せきりであった。	調べた資料やデータ等をただ列挙しただけにとどまっており、その調査も質・量ともに十分なものとは言えない。	そもそも他者に思いを伝えようとする気持ちに乏しい。もしくは他者に思いを伝えることができなかった。	自らと考えや価値観の異なる他者の存在を認めることができず、自分の考えに固執する、もしくは協力しあうことを放棄するなど協調性に欠けた。

（表２）

【 発表 】		
	S	原稿を見ず、聞き手への配慮もなされ非常に聞き取りやすかった。
	A	原稿を見るのは最小限で、聞き手への配慮がなされ聞き取りやすかった。
	B	原稿を見ながら、もしくは声が小さく聞き取りにくかった。
	C	原稿を見ながら、かつ声も小さく聞き取りにくかった。
【内容】		
	S	綿密な調査に基づき、独創性のある興味深い課題解決策を提示していた。
	A	課題解決策の着眼点などに良さがあり、さらなる飛躍、発展を期待したい。
	B	課題解決策が調査不足であったり、一般的なものであったりなど物足りなさが感じられた。
	C	課題について調べたことをただ発表しているだけであった。

８　成果　　※文中の【　】は、本開発単位終了後の生徒レポートから引用

本開発単位は昨年度に実施したものを土台とし、新型コロナウイルスの多大な影響を受け、変更を余儀なくされた部分はあるものの、本学が目指す「Key Girl」育成の第１段階として、一定の成果を上げることができたと認識している。本開発単位では、探究活動の基本的な手法やポスターやパワーポイント等のプレゼンテーション資料の作成、効果的なプレゼンテーションの方法などの基本的な力を身につけると同時に、「Key Girl」の８つの資質のうち７つの育成を目指している。今年度は新型コロナウイルスの影響から当初想定していた新入生研修合宿での導入活動を実施することができなかったこともあり、本来対面型で実施していた本開発単位の内容や学びのねらいに関する講義を動画にまとめ、限定配信した。また、昨年度は本学体育館においてパネルディスカッション形式で実施した「リージョン探究」の課題提示および課題の背景説明も中止せざるを得ず、各分野講師に動画作成を依頼し、その動画も限定配信することとなった。しかし、この手法が結果的に功を奏したように感じている。【長い期間に渡って活動するので、途中でどう進めていいか分からないということがあったが、最初に配信された動画で確認することができたので修正することができた。普段の授業は１回限りなので、見直せるというのはとてもいいと思った：林業】、【調査を進めていく上で、最初に先生が説明してくださったことを確認したいと思った時にYouTube で確認できたことはよかった：医療】などと、本来１回限りであった本開発単位の導入部分を見直すことができる仕組みには、一定の価値があることを確認できたように思う。

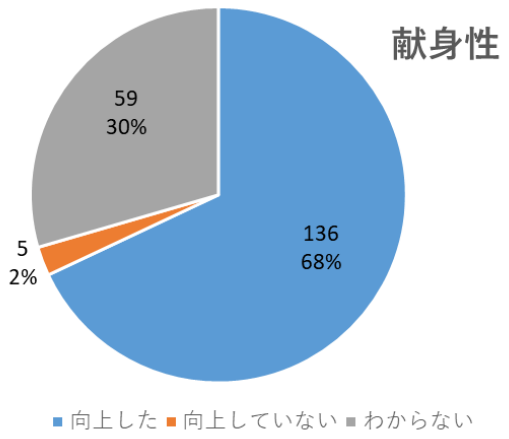
では以下に、本開発単位で期待される成果と対比させながら詳細を述べる。

ｉ　資質①「献身性」

本開発単位終了後に実施したアンケートでは、「リージョン探究」を通して「献身性」の向上を実感した生徒が 68%となっており、「分からない」と答えた生徒の割合が最も多い項目となった（次ページのグラフを参照）。

そもそも本学はカトリックミッションスクールであり、週に１コマ「宗教」という授業が設定されているだけでなく、年間を通して聖母祭、物故者追悼ミサ、クリスマスミサなどの各種宗教行事も多い。また、教室やトイレなどの学校施設を生徒たち自身が毎日清掃するという伝統もあり、日々の学校生活の中でも「献身性」を育んでいるため、本開発単位の活動を通して「献身性」が向上したとは

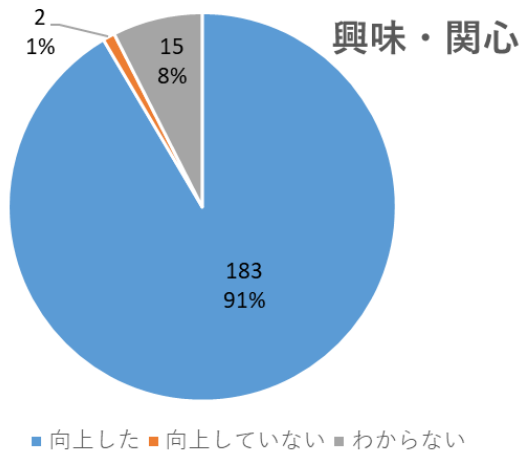
とらえにくかったのかもしれない。しかし、【これまで地域の課題について考えたことがなかったけれど、今回の経験から自分たちの地域をこれからは自分たちの力で変えていかなければならないと感じた：行政】、【実際に地域の課題について考えてみたが、正直なところ自分たちの考えたことが課題解決には繋がらないだろうと思う。しかし、だからと言って他の人に任せて無関心でいることも違うのではないかと感じた。最初の説明動画で「当事者意識」という言葉が出てきたが、その言葉の重みをとても感じる：医療】などと、本開発単位における活動を踏まえ、「奉仕・貢献」の意識と結びつけることができていることが確認できた。



ii　資質②「興味・関心」

アンケートからは 91%の生徒が「(社会課題に対する）興味・関心」の向上を実感しており、今年度最も成果が見られた項目となった。

本開発単位終了後に実施したレポートには、【「リージョン探究」を通して、自分たちの住む土地に様々な課題があることを知った。他のグループの発表からも刺激を受け、自分たちの取り組んだ課題以外のことも調べてみたいと思うようになった：産業】、【私たちの班は誰も※ブラクリ丁に行ったこともないというところからのスタートだった。ブラクリ丁の歴史を調べるとかつて非常ににぎわっていた時期があることを知ってとても驚いた。「時代の移り変わり」と片付けることは簡単だが、これがもしかすると和歌山全体の未来の姿かもしれないと思うと怖くなり、より関心を持って取り組むことができた：経済】などの意見があり、本開発単位の学びが「(社会課題に対する）興味・関心」の向上に大きく貢献していることが分かる。



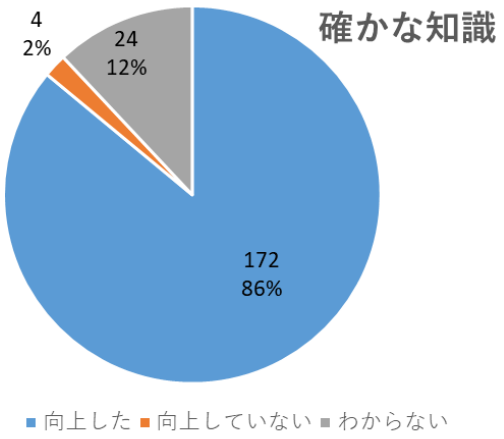
※ブラクリ丁 … 和歌山市内の中心市街地にある商店街。かつては多くの人で賑わっていたが、現在はシャッターが目立つ商店街となっている。

iii　資質③「確かな知識」

アンケートの結果からは 86%の生徒が「確かな知識」の向上を実感している（次ページのグラフを参照)。

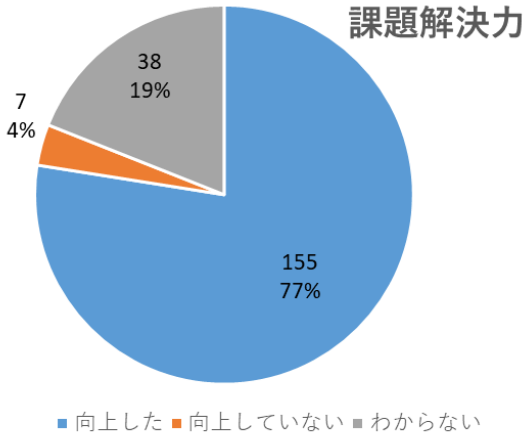
【これまで森林は保護しなければならないものだと思っていたが、適切に保護するために利用しなければならないということを知って驚いた。今はコロナウイルスのせいでできないが、現地を訪問して調査できたらもっと充実したように思う：林業】、【インターネットで調べたことと Zoom でインタビューした方の意見とが全く反対だった。これまでは当たり前のようにネットの意見は正しいと思っていたが、考えなおすきっかけとなった：農業】、【今まで考えたこともなかったけれど、同じ

和歌山で満足な医療を受けることのできない地域があることを知って驚いた。普段の授業にない学習なので、新鮮で楽しく感じられた：医療】などと、インターネットから得た知識を鵜呑みにすることの危うさや、視野の広がりを通して「確かな知識」の重要性を認識した生徒が多数いることが分かる。



ⅳ　資質⑤「課題解決力」

アンケートの結果からは 77%の生徒が「課題解決力」の向上を実感している。



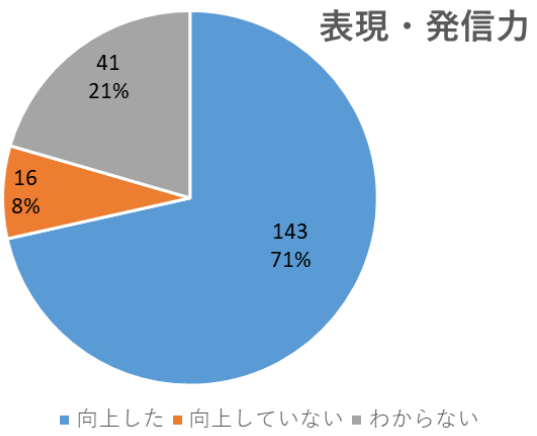
レポートからは、【私たちは医療過疎の地域に応急処置のできる医療キットを常備するという方法で医療格差を埋めるというアイディアを考えた。その費用をいかに賄うかという問題に対して、「サブスク」を提案したが、このアイディアを講師の先生から評価していただき、とてもうれしく感じた。実際にこのアイディアが活用されるかは分からないが、認められるということが自信につながった：医療】、【「リージョン探究」では、2 回発表する機会があった。私たちは紀州材の認知度をあげるためのアイディアを考えたが、1 回目の発表の際に、いくつかのアドバイスをもらった。2 回目の発表ではそのアドバイスを参考にし、より具体的なアイディアを提示できたと思う：林業】、【最初は、和歌山の抱える課題に対して、私たち高校生に何ができるのだろうと思っていた。しかし、色々調べながら自分たちなりのアイディアを考えるという探究学習は非常におもしろいものだった。シャッター商店街となりつつあるブラクリ丁をコロナ禍であることを踏まえて活性化するということについて考えたが、和歌山市と韓国の済州島とが友好関係にあることを知り、コリアンタウン化するという提案をした。最初は単純に韓国の音楽が好きというところからスタートしたアイディアだったが、聞き手を納得させたいと思い、アイディアの細かな部分まで考えることができたと思う：経済】と言った意見が見られた。

なお、昨年度の取り組みと比較すると、ややオリジナリティに欠け、提示された課題に対しての解決策として内容にズレの感じられるものもいくつか見られたように思う。しかし、探究学習に初めて取り組んだにも関わらず、新型コロナウイルスの影響を受け、自由な活動を制限されたという背景を合わせて考えると、仕方のない部分はあるかもしれないと感じている。

ⅴ　資質⑥「表現・発信力」

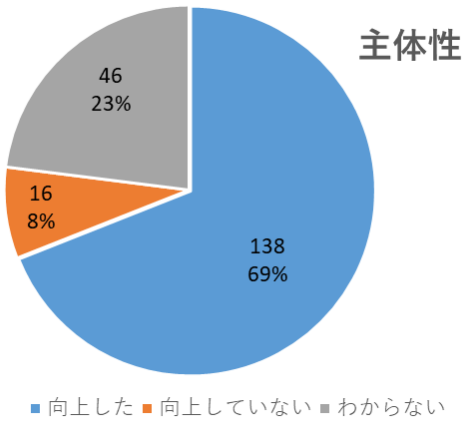
アンケートの結果からは 71%の生徒が「表現・発信力」の向上を実感している。

レポートからも【もともとあまり他人と交流するのが得意ではないので、最初はこの活動がとても嫌だった。しかし、自分が殻の中に閉じこもってしまうと迷惑をかけてしまうと思ったので、途中からは自分なりには頑張ったと思う。自分の意見をゆっくりと待ってくれる人が多かったこともあり、今までにないほど意見を発信できたと思う：農業】、【今年度発表する機会が何度かあったが、人前でなくても緊張し、上手く話すことができなかった。他の班の発表動画を見ると、とても上手に発表している人がたくさんいて正直うらやましいと感じた。次年度はもう少し上手に発表できるようになりたい：行政】などと、本来発表を苦手とするような大人しい性格の生徒も比較的ポジティブに捉えている印象を受けた。



vi　資質⑦「主体性」

かつての本学の一番の弱点がこの「主体性」であった。しかし、2015 年度から探究学習を導入したことで最も大きな変容が見られていると感じている分野である。その印象からすると、今年度「主体性」の向上を感じている生徒が 69%にとどまったのは、正直なところ意外であった。これについては、もう少し調査が必要だと感じているが、学校全体の活性化が一段落ついた感もあるため、より「主体性」の向上を感じるハードルが上がったせいかもしれないと予測している。

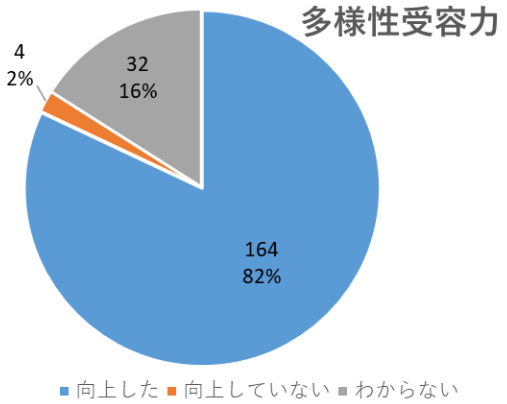


なお、生徒のレポートからは、【私たちは、梅の消費を喚起するための一つの手段として梅シロップを自分たちで作ることのできるキットの販売を提案した。講師の先生の協力のもと、実際にシロップを作ってみると、時間はかかったが、思った以上に簡単に梅シロップが完成した。材料と機材さえ事前に揃えてしまえば甘くておいしい梅シロップを簡単に自宅で作ることができると思い、ぜひ販売してほしいと感じた：産業】と、自らアクションにつなげたグループや、【今年度もっとも残念だったのが、コロナウイルスのせいで実際に現地を訪問したり、多くの人に直接インタビューしたりすることができなかったことだ。しかし、悔しかったため、Zoom を使ってオンラインインタビューを行った。結果的に多くの方の意見を聞くことはできたが、とても残念に思っている：行政】などと、運営側の働きかけはあったとはいえ、物怖じせず主体的に探究学習の範囲を広げていった様子を確認することができた。

vii　資質⑧「多様性受容力」

本開発単位の活動として、最も成果を期待しているのがこの「多様性受容力」であり、アンケートの結果からも 82%に及ぶ生徒がこの力の向上を実感している。本学は、「医進」「特進」「学際」の 3 コース制で、探究学習導入以前はコース間の交流はあまりなかった。また、中学校から進級する「内

進生」、高校から入学する「高入生」、全国大会レベルの運動部が所属するスポーツクラスと 1 つの学年の中に多様な生徒が在籍しており、学年の一体感に乏しいというのはこれまでの課題でもあった。入学したばかりの高校 1 年生はその背景を知っている訳ではないが、本開発単位では、この環境を逆手にとり、コース、クラスの垣根を取り払って、希望する分野ごとで探究グループを編成することで、「多様性受容力」を育成しようと考えた。終了後のレポートには、【「リージョン探究」の活動は、普段の学習と違いおもしろかったが、一つ不満がある。それは、グループの中に無責任なメンバーがいたことだ。そのせいで一部のメンバーの負担が多くなり、私自身もかなり大変だった。放課後の時間的な余裕もクラスごとに異なっており、みんなで集まるのも難しかった。正直、同じクラスのメンバーでグループを編成してほしいと思う：経済】というネガティブな意見もなかった訳ではないが、【色んなクラスの人とのグループ活動は大変だったが、コミュニケーション能力という部分ではとても役に立ったと思う。最初は緊張したが、活動を通して打ち解けることができ、それぞれが積極的でありながらも協調しながら取り組むことができた：農業】という意見や、【最初の動画の中に「これから私たちは変化が速く予測することの難しい社会の中で、国境を越えた人たちと協働しながら生きていく可能性が高い」という言葉があったが、正直同じ学年の違うクラスのメンバーという狭い範囲の中、一つの課題について考えるという活動においても、これだけ色々な考え方が出てくるとは思わず驚いた。自分と近い価値観を持った人たちといることは楽かもしれないが、それではいけないのではないかと考えるきっかけになった：産業】などと、本事業の学びを理解し、それを探究学習のみならず人生に活用しようと考える生徒も見られたことは大きな成果と言える。



viii　その他の資質

本開発単位終了後のアンケートで、「『リージョン探究』の活動を通して、向上したと感じる能力で上記に含まれていないものがあれば教えてください」という項目を実施した。以下に主なものを記載する。

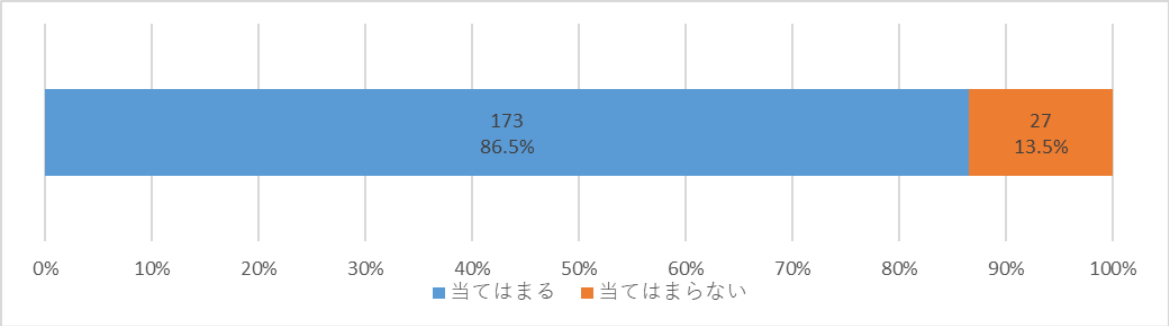
・ICT 機器の活用能力
・リーダーシップ
・計画立案力および実行力
・傾聴力
・状況判断力
・伝えたい情報を整理する力
・デザイン力

9　事後アンケートの集約

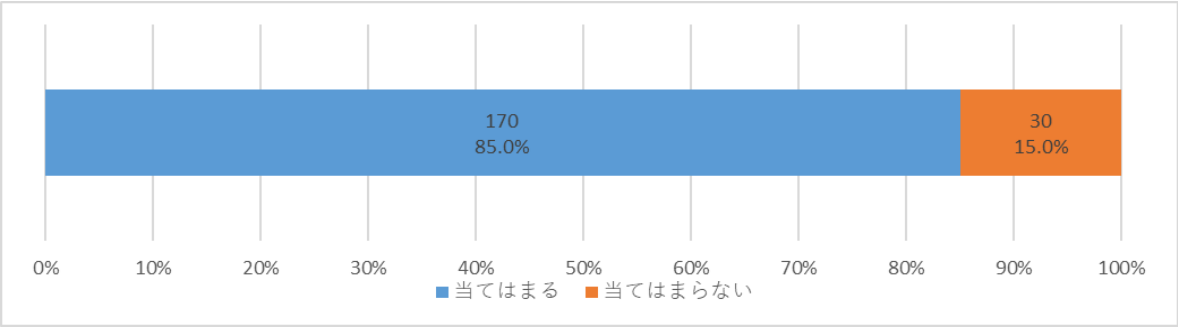
8でも述べた通り、本開発単位の終了後に、学びの効果を測定するためアンケートを実施した。上記に含まれなかった項目を以下にまとめる。

〇質問項目

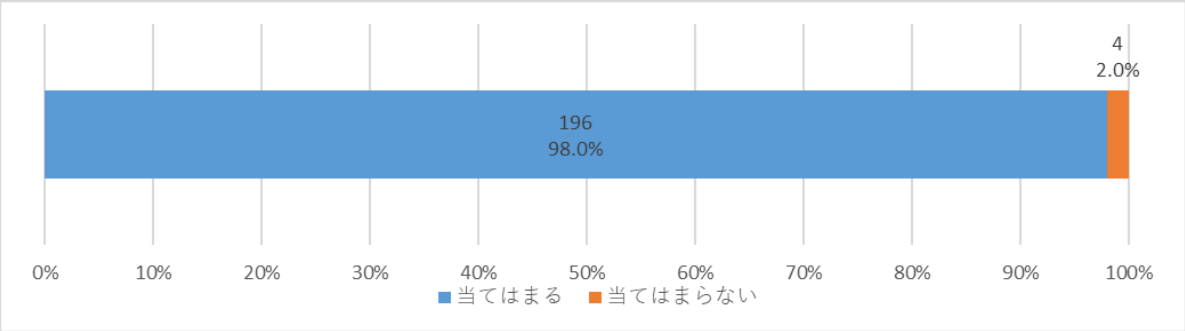
①「リージョン探究」の学びを通して、将来「(自らが生活する）地域」で地域の未来のために貢献したいという思いが強くなった。



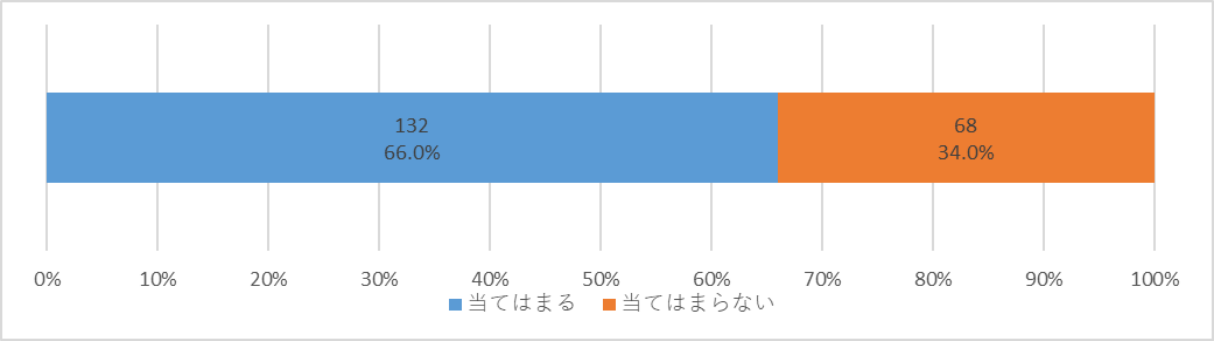
②「リージョン探究」の学びを通して、将来他地域や他国で生活することになったとしても、何らかの形で「(現在自らが生活する）地域」の未来のために貢献したいという気持ちが強くなった。



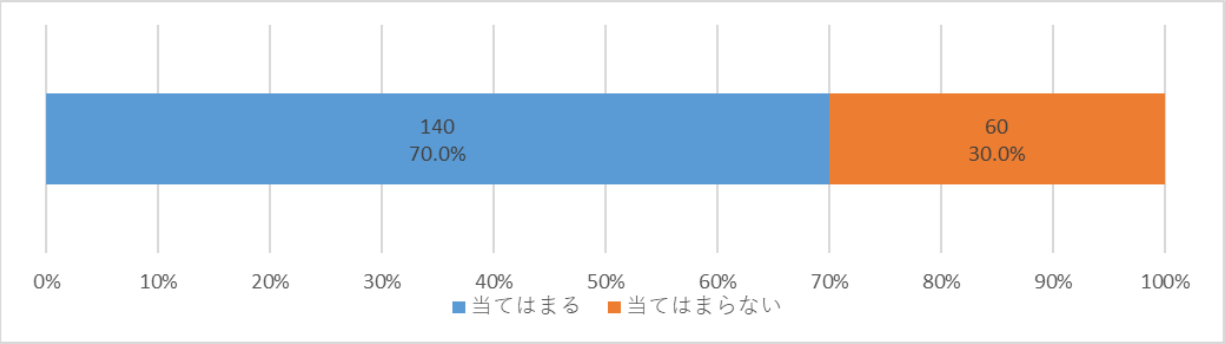
③「リージョン探究」の学びを通して、これからの社会を生きていく上では、「答えが一つとは限らない課題」と向き合っていく必要があると感じるようになった。



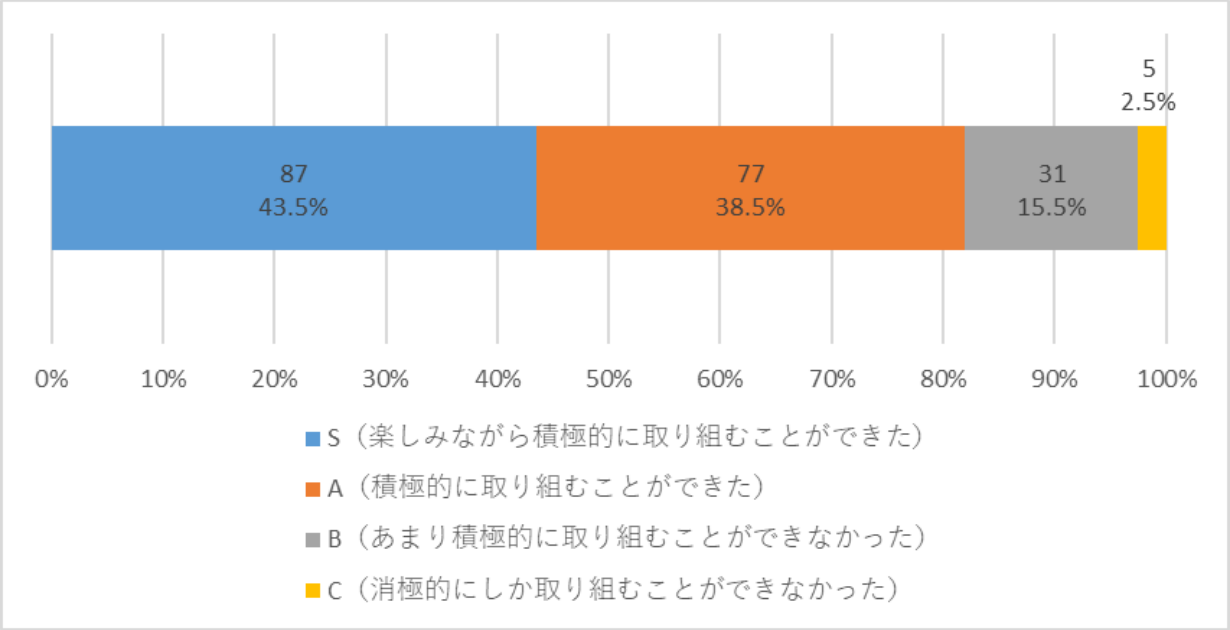
④「リージョン探究」の学びを通して、英語を学ぶことの重要性を感じるようになった。



⑤「リージョン探究」の学びを通して、自分には良いところがあると感じることができるようになった。



⑥「リージョン探究」の学びに対する自らの姿勢に対して自己評価をしてください。



10　昨年度の課題とその対応

２年目となる本開発単位の運営は、コロナ禍において一定の成果をあげることができたと認識している。ただし、昨年度の課題がいかに克服されているかについては検証しておきたいと思う。

ⅰ　生徒に対する本事業の内容の周知徹底不足

昨年度は、本事業に関するガイダンスを新入生研修合宿の際に行った。本開発単位の説明だけでなく、本事業の背景に至るまで丁寧に説明を行ったつもりであった。しかし、昨年度のアンケートでは、「探究活動を行う目的や理由が分からない」という意見が見られた。今年度は新型コロナウイルスの影響で休校となり、新入生研修合宿も実施することができなかったため、前述した通り、急遽本事業に関する説明動画を作成し、YouTube 上で限定配信することにした。この手法は、後日でも内容を確認できるというメリットがあり、課題提示動画も含めて怪我の功名と言える。次年度は、宿泊を伴わない形で新入生研修会を実施するが、ガイダンスの様子を動画に収録するなどして繰り返し視聴できる環境を整えたい。

ⅱ　「課題解決力」に対する自己肯定感の低さ

本学の生徒はよく言えば「謙虚」であるが、昨年度の「ＰＤＣＡサイクル調査研究事業」のアンケート結果にも顕著に表れていたように「自己肯定感」が低い傾向にある。そのため、本開発単位における昨年度のアンケートでも「課題解決力」における自己評価が低かった。せっかくの活動を前向きに評価できないのは残念であると感じ、何とか前向きに評価ができるきっかけを提供したいと、昨年度の「能力があがった」「変わらない」「能力が下がった」を中心とする５段階の選択肢から、今年度はアンケートの形式を少し変え、「向上した」「向上していない」「わからない」という３段階の評価へと変更し、「変わらない」という選択肢を外すことにした。結果は８－ⅳですでに報告した通り、77％もの生徒が「向上した」と回答している。そのため、本開発単位の学びが「課題解決力」を向上することができないものではないことを証明できたとともに、問い方によっては自らの能力の伸長を表現できるということが分かった。過度に自らの能力を誇るようなことは本開発単位の成果として目指すべき目標ではないと思うが、今後も自らを適切に評価することができるような環境を整えていきたいと考えている。

11　本年度の課題

本年度は予期していない新型コロナウイルスの多大な影響を受け、本来想定していたプログラムを実施することができなかった。しかし、本開発単位のみならず、本事業全体の運営において、まさしく育成を目指す「予測することが難しいこれからの社会の中で、他者と協働しながら最善の解を模索し続ける姿勢」の大切さを我々自身が体現すべき絶好の機会であると捉え、現段階で気づき得る創意工夫と他のグローカル型の指定校の動きを参考にプログラムを運営した。とは言いながらも、ポスターセッションなどの対面型のプログラムの実施を制限されたことは非常に大きく、今年度の課題もそのあたりから生じている。

ⅰ　「探究の深さ」と「発展的活動の不足」

この責任を生徒たちに求めるのは酷なことではあるが、本年度の最終発表を振り返ると、昨年度と比較して「探究の深さ」に課題があるように感じられる。例年であれば、中間発表にあたるポスター

セッションではただの調べ学習にとどまり、それを評価およびアドバイスを通してブラッシュアップすることで、最終発表では一部の班に視点や内容に深みの感じられる発表が見られた。しかし、今年度は最終発表の動画を見ても、依然調べ学習の延長線上にあるものが目立ち、視点におもしろさがあっても説得力に欠けるなど物足りなさを感じている。星城高等学校を中心に開催した「Glocal High School Meetings 2021」に参加した生徒たちがとても大きな刺激を受けたように、やはり、活動が自校のみにとどまると、それが基準となってしまう。次年度の前半もおそらく現状のような不自由な活動を強いられると考えられるため、今年度高い評価を受けた他校の発表動画などを積極的に視聴する機会を設定し、目指すべき目標をより明確にすることで対応したい。

また、本来、本開発単位終了後の１月から３月を発展的な活動の期間と位置づけ、コンソーシアム参加機関等と連携しながら、アクションを起こすことを推奨していたが、新型コロナウイルスの影響を受け、コンソーシアム参加機関が活動を自粛したことや、休校措置による本開発単位の１ヶ月延長も重なり、生徒たちによる主体的なアクションは見受けられない。Zoom 等を用いたオンラインインタビューなどのアクションは比較的広がりを見せたため、次年度は発展的活動の例を具体的に提示するなどの手段で対応したい。

ⅱ　「表現・発信力」の育成

本開発単位に限った課題ではないが、今年度の発表活動は、発表の様子を撮影して動画にし、YouTube 上で限定配信し、それを各自視聴するという方法で発表を実施した。動画は、時間や場所を選ばずいつでも見ることができるという利点があり、アドバイスや講評などを依頼する講師先生の負担を解消することができたものの、簡単に撮り直しや編集ができたり、画面にポスターやパワーポイントの画面を投影していることから原稿を読み上げることができたりするという欠点があった。

昨年度を振り返ると、対面型の発表の場合、聴衆を前に緊張しながらも思いや熱意を伝えようとしたり、発表後の質疑応答を通して瞬間的に質問、回答したりすることで「表現・発信力」が鍛えられていたように思う。生徒たちの認識では、71%が「発信・表現力」の向上を実感しているが、実質的な部分では昨年度よりも「発信・表現力」は向上していないように感じている。

ⅲ　客観的かつ適切な評価活動の実施

これも本開発単位に限った課題ではないが、本学は生徒向けの開発単位の評価を「S」「A」「B」「C」の４段階からなる独自のルーブリック評価表（７－ⅱ表１を参照）を用いて実施している。それを通して自己評価、グループメンバーおよび担当教員からの他者評価と複数の視点から総合的かつ重層的な評価を目指しているが、一つ気になっていることがある。生徒の評価の様子を見ていると他者評価において、今後の人間関係などへの配慮というバイアスがかかりどうしても甘くなる傾向が見られている。客観的かつ適切な評価ができるように改善する必要がある。

医療現場の実態

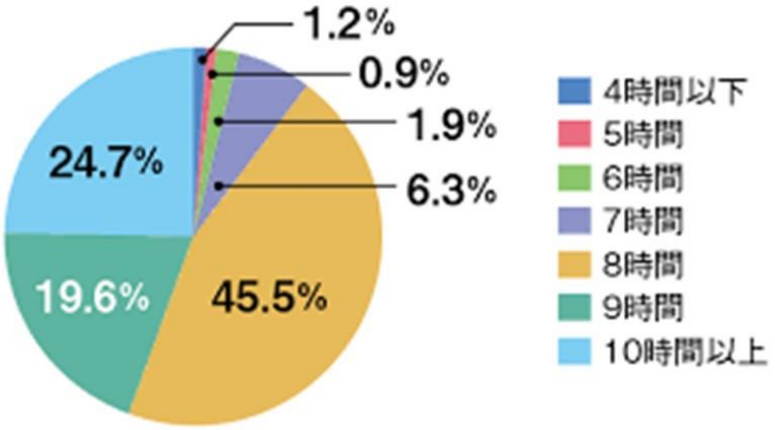
８班　岩橋　見上　蓮見　太田　久保田　小林

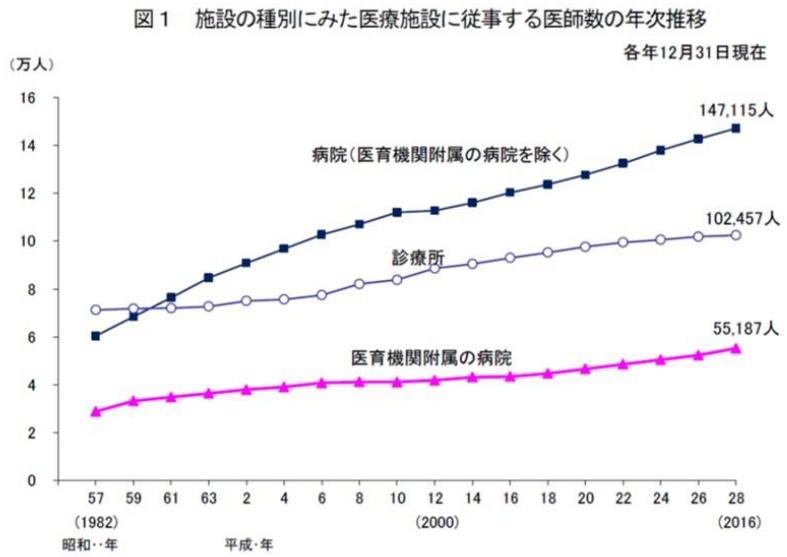
問題点

医師の長時間労働

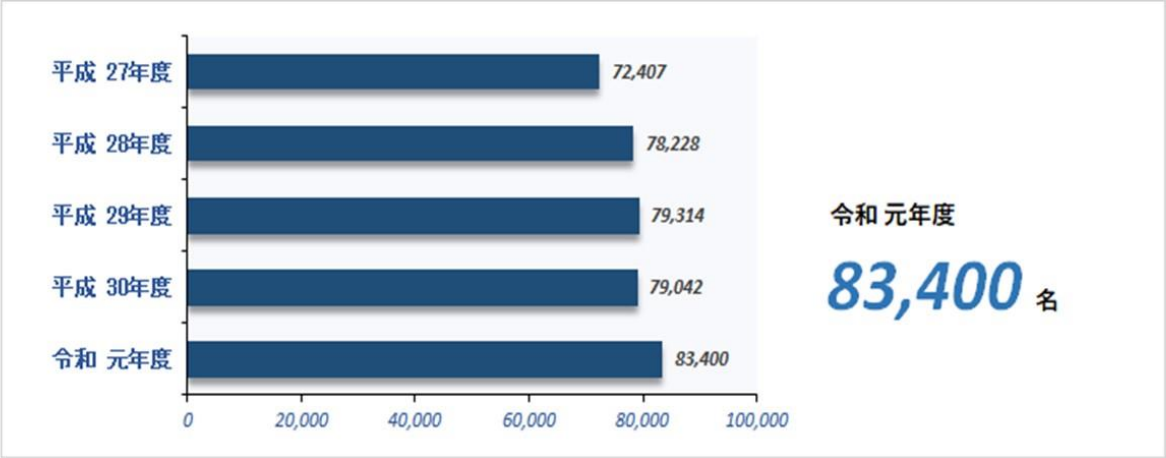
原因

医師不足





年々医師数は
増加している



患者の人数も
増加している

解策決

1.事前に予防する健康政策をとる

2.医療抑制政策をやめる

医療抑制政策とは

医師の人数が増えれば掛かる医療費が増えてしまうという考えのもと、医療費削減のために医師の人数を減らそうとする考え

1.事前に予防する健康政策をとる

① 健康診断を受けて、異常がなければ
生命保険を安くする

② 歩いた分or運動した分、買い物などで使える**ポイントが貯まるアプリ**を作る

どのようにして広めていくか

・**ＣＭ**を作る

・**チラシ**を配る

・**インターネット広告**

健康診断を受けて異常がなかった場合、

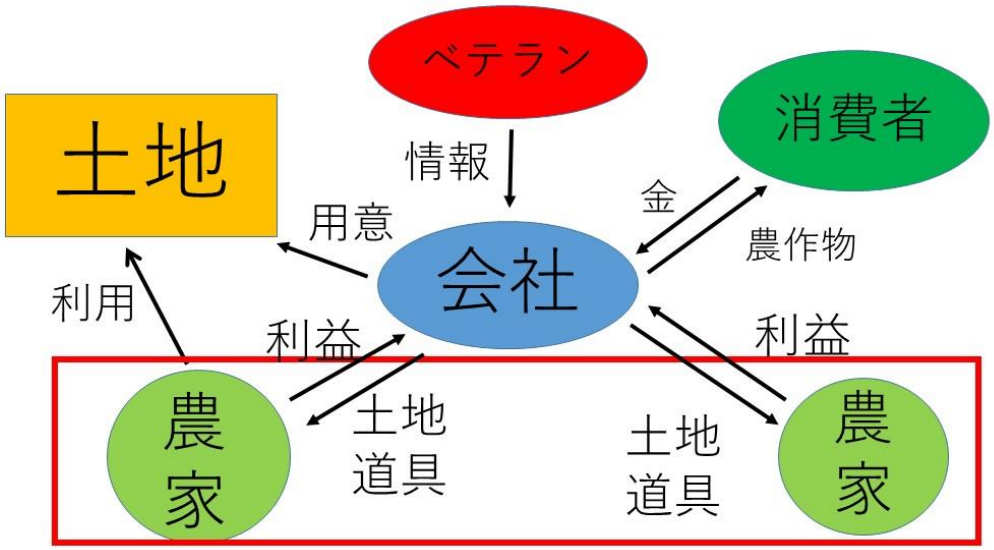
生命保険が安くなる

尚更人々の健康・運動意識が強くなる

誰もが実行したくなるような
健康政策を!

農業改革

３０班　粉川　東　秋竹　坂井　前　福嶋



農業者目線

メリット

・安定した収入
・農業を始めやすい
・後継者問題の解決
・情報共有
・一人当たりの負担が減る

デメリット

・一度に大きな利益が得られない
・会社で決められた方針でしかできない

経営目線

メリット

・農業をしない人でも間接的に関われる
・作業を分担できる

デメリット

・不作の時、経営が厳しい
・初期費用が高い
　→クラウドファンディング

クラウドファンディング

まとめ

企業化することにより
さまざまなメリットがある

↓

農業人口が増える

参考文献

・マイナビ農業
https://agri.mynavi.jp/2018_08_28_37249/

② **開発単位Ⅱ「グローバル探究」**（現高校２年生対象　※ただし、昨年度高校１年生１月から実施）

１　目的

本学の目指す「Key Girl」の姿は、グローバルな視点を有しながらも地域の未来のために貢献できる人材である。「リージョン探究」では自らの住む地域にも多くの課題があることを知り、地域に対して「興味・関心」が育まれた。また、地域の方々との協働活動は「絆」となり、いつか地元に対して自らの持てる力を還元したいという郷土愛にも繋がっているはずである。しかし、自分さえよければいい、自分の身近なところだけがよければいいという考えのもとでは、一時的な解決はできても永続性はない。「世界」と「地域」とは相反するものではなく、世界に目を向け、世界の課題を学び、そこで獲得したグローバルな視点を用い、地域にフィードバックする力へと発展させることを目的とする。

２　内容

グローバルな視点を獲得するために、SDGs の中から４つの分野を選び、その範囲の中で探究活動を実施する。2015 年９月の国連サミットで採択された国連加盟 193 カ国が 2030 年までに達成する目標である SDGs は、17 の目標と 169 のターゲットから構成され、持続可能な社会を実現するために、地球上の誰一人も取り残さないことを誓ったものである。

本学の礎が明治初期に文明開化の陰で置き去りにされた人々に教育と福祉を提供した ４ 人のフランス人シスターにあることから「教育（目標 ４：質の高い教育をみんなに）」、「福祉（目標 １：貧困をなくそう、目標２：飢餓をゼロに、目標３：すべての人に健康と福祉を、目標６：安全な水とトイレを世界中に）」。また、本学がカトリックミッションの女子校であることから「女性（目標５：ジェンダー平等を実現しよう）」。さらに、ここまでのＳＧＨアソシエイト活動で毎年行ってきたアンケートで環境問題をテーマに探究活動を行いたいという生徒からの要望が多かったことから「環境（目標７：エネルギーをみんなにそしてクリーンに、目標 11：住み続けられるまちづくりを、目標 12：つくる責任つかう責任、目標 13：気候変動に具体的な対策を、目標 14：海の豊かさを守ろう、目標 15：陸の豊かさも守ろう）」。以上の４分野を「グローバル探究」のテーマとする。

なお、本開発単位においては、「リージョン探究」よりも難易度をあげるために、テーマは設定するものの、課題に関しては生徒が独自に設定することとする。また、原則グループでの探究活動を推奨するが、どうしてもこの課題でやりたいという場合は、個人での探究活動も可能とした。

さらに、フィールドワークも「自分で創るフィールドワーク」と命名し、自分たちの設定した課題の解決のために必要なフィールドワーク先を自分たちで開拓し、交渉の上、インターンシップの形で受け入れを目指す。

３　期待される成果

「Key Girl」の資質　…　①・②・③・④・⑤・⑥・⑦・⑧

４　新型コロナウイルスの影響

開発単位Ｉの報告でもすでに述べたが、本学は緊急事態宣言に伴う休校要請によって、４ 月 ７ 日（火）から６月 13 日（土）まで休校措置をとった。そのため、本開発単位の運営にも１か月程度の遅れが生じることとなった。さらに、「密」を伴う対面型の活動の自粛、変更などを余儀なくされている。

また、本開発単位は学外における調査活動を奨励しており、その運営にも多大な影響を及ぼしてい

る。詳しくは、以下の各項にて説明する。

5　「自分で創るフィールドワーク」

ⅰ　概要

「グローバル探究」における一つのチャレンジが「自分で創るフィールドワーク」である。東京、大阪、和歌山の 3 カ所を設定しており、夏季休業期間中の最低 2 日間インターンシップを実施し、その中で調査活動を行うこととする。なお、東京・大阪に関しては、生徒の安全を確保するため受け入れの日時など細かな条件を課す。

ⅱ　新型コロナウイルスの影響

前項でも新型コロナウイルスに関しては述べたが、東京や大阪への移動など学外での活動が中心となる本プログラムは、新型コロナウイルスの影響を非常に大きく受けることとなる。今年度は、以前と同様の学校生活を送ることすらできず各種の学校行事も中止となった。本フィールドワークは、生徒自身が直接フィールドワーク先と交渉するというチャレンジ性の高いプログラムで、生徒の主体性育成にとって大きな役割を果たすものだと認識しているが、本フィールドワークを実施することは感染拡大を助長しかねず、保護者の理解も得にくいという判断のもと、今年度は中止という判断をせざるを得なかった。

ⅲ　代替案

高校 2 年生は 1 人 1 台 iPad を所有している高校 1 年生と探究活動における ICT 環境には差があるが、本学ではオンライン英会話の授業を実施するために、90 台ほどの共有 iPad がある。そこで、「自分で創るフィールドワーク」の代替として、その iPad を活用し、Zoom などのオンライン会議アプリを用いて距離の壁を越えた「オンラインフィールドワーク」の実施を推奨した。もちろん、「自分で創る」の部分が大切であるため、自分たちの設定した課題の解決のために必要と考える調査を行うために、調査先の選定や交渉は全て生徒自身で行うという本開発単位のフィールドワークの中で最も重視した部分は継続した。なお、「自分で創るオンラインフィールドワーク」と名付け、期間も夏期休暇中にこだわらず、継続して実施してよいことにした。その結果、官公庁や企業、各種団体の HP の中の問い合わせ窓口や電話などを用いて積極的にコンタクトをとった生徒が多数いた。

ⅳ　「自分で創るオンラインフィールドワーク」実績

生徒たちの交渉によって、計 43 の企業、団体、事業所などから協力をいただき、オンラインフィールドワークを実現することができた。以下に主なものを紹介する。

東京大学、大阪大学、和歌山大学、和歌山県立医科大学
和歌山県教育委員会、東京都教育委員会、秋田県教育委員会
和歌山県警、東京都 TOKYO はたらくネット
Calbee 株式会社、花王株式会社、株式会社ベネッセコーポレーション、株式会社カネカ
デイリーヤマザキ、セイコーマート、H&M
公益財団法人日本財団、公益財団法人日本ユニセフ協会、特定非営利活動法人ジャパンハート
カトリック大阪大司教区社会活動センターシナビス、ショファイユの幼きイエズス修道会

6　概要（実践）

i　昨年（2019 年）度実施内容

学期	回	月日	コマ数	内容	実施
2019年度 3	①	12月22日（水）	1	「グローバル探究」ガイダンス	通常実施
	②	2月5日（水）	2	「グローバル探究」分野選択講義１ ・「教育」「女性」分野	通常実施
	③	2月13日（水）	1	地域協働事業（グローカル型）特別講演 ・運営指導委員渡邊道子様より	通常実施
	④	2月26日（水）	2	「グローバル探究」分野選択講義２ ・「環境」「福祉」分野	通常実施
	－	3月11日（水）	2	地域協働事業（グローカル型）コンソーシアム特別講演 ・主催国際ソロプチミスト和歌山紀ノ川様	休校のため 中止

※「グローバル探究」は高校１年生の１月からスタートする

ii　今年度実施内容

学期	回	月日	コマ数	内容	実施
2020年度 1	⑤	5月27日（水）	1	「グローバル探究」ガイダンス動画の配信 ・再開に向けて、変更点などの説明	変更実施
	⑥	6月29日（月）	2	分野選択およびグループ編成、課題設定 ※本開発単位はクラス内での活動とする	通常実施
	⑦	7月6日（月）	2	グループワーク①　調査活動、フィールドワーク先の選定	通常実施
	⑧	7月21日（月）	2	グループワーク②　調査活動、フィールドワーク先へのアポ取り	通常実施
	⑨	8月3日（月）	2	経過報告会　各分野の講師に進捗状況を報告し、アドバイスを受ける ※ただし、対面形式ではなくZoomを使用した	変更実施
夏期休暇中	－	－	－	「自分で創るフィールドワーク」	中止
	－	－	－	「自分で創るオンラインフィールドワーク」 ※本開発単位５に詳細を述べる	代替実施

学期	回	月日	コマ数	内容	実施
2	－	8月下旬	2	「自分で創るフィールドワーク」成果報告会	中止
	⑩	9月7日（月）	2	グループワーク③　アドバイスを踏まえ、ブラッシュアップ活動	通常実施
	⑪	9月28日（月）	2	グループワーク④　中間発表用ポスター作成、発表原稿の作成 ※PPTのsheet１枚をもちいてポスターの代用とした	通常実施
	⑫	10月5日（月）	2	グループワーク⑤　中間発表用ポスター作成、発表原稿の作成	通常実施
	⑬	10月19日（月）	2	グループワーク⑥　中間発表用動画の撮影	変更実施
	－	10月中旬	2	ポスターセッション（体育館・口頭発表）	中止
	⑭	11月2日（月）	2	動画による中間発表、各講師からの講評、補足講義 ・発表動画の提出期限を10月30日（金）に設定 ・自らと同じ分野の発表動画を視聴し、評価活動を実施	変更実施
	⑮	11月16日（月）	2	グループワーク⑦　各講師の講評を踏まえ、ブラッシュアップ活動	通常実施
	⑯	12月７日（月）	2	グループワーク⑧　最終発表用PPT資料および発表原稿の作成 ※昨年度の口頭発表形式ではなく、発表動画を作成	変更実施
	⑰	12月14日（月）	2	グループワーク⑨　最終発表用PPT資料および発表用動画の撮影	変更実施
	－	12月中旬	8	最終発表会（ホールおよび体育館にて、口頭発表）	中止
		－	－	動画による最終発表 ・12月23日（水）を発表動画の提出期限とし、12月24日（木）～1月6日（水）の間で限定配信動画を視聴 ・本学独自の発表用ルーブリックを用いて評価 ・各分野講師に評価活動および講評動画の作成を依頼 ・生徒、コンソーシアム、保護者も視聴し、評価活動を実施	変更実施
3	⑱	1月18日（月）	2	「グローバル探究」リフレクション ・各講師の講評動画の視聴 ・ルーブリック評価表を用いて、評価活動（自己、他者）	変更実施
	－	－	－	「グローバル探究」レポートの作成 ※1月23日（土）を期限とし、Classi上に提出	変更実施
	－	2月中旬	－	研究成果発表会（体育館・口頭発表） ※高１「リージョン探究」と合同で優秀班のみ発表	中止

ii　担当講師

本開発単位は、本年度が本格実施初年度ということもあり、「教育」「福祉」「女性」「環境」のそれぞれの分野に担当講師を選定、依頼した。

教育　：　和歌山信愛大学教育学部子ども教育学科　辻伸幸先生

福祉　：　日本赤十字社和歌山医療センター
外傷救急部/外科医/国際医療救援登録要員/国際人道法普及担当　益田充先生

女性　：　一般社団法人「女性と地域活性推進機構（WAO）」代表理事　堀内智子先生

環境　：　徳島大学　環境防災センター学術研究員　松重摩耶先生

7　グループの編成

本開発単位の 2 で述べた通り、本開発単位はグループ活動を推奨するものの、生徒たち自身で課題設定を行うことから、「主体性」を尊重するため、個人での探究活動も許可した。そのため、「教育」分が 19 班、「福祉」分野が 21 班、「女性」分野が 14 班、「環境」分野が 62 班と、全 4 分野で 116 班のグループが編成され、10 人の生徒が 1 人で探究活動を行うことになった。

8　評価

ⅰ　評価方法

各探究グループにおいて設定したグローバル課題に対する「最善の解」の提案に向けて、主体的かつ協働的に探究活動に取り組んだ経緯をプログラム終了後に、「S（大変優れている）・A（優れている）・B（改善を必要とする）・C（努力を必要とする）」の 4 段階ルーブリック評価表（表 1）を用いて自己評価および相互評価、そして担当教員からの評価を行った。また、中間発表および最終発表会における発表および資料に関しては、アドバイスシートに付属したルーブリック評価表（表 2）を用いて、生徒、教員、コンソーシアム参加機関、保護者等から評価をいただいている。

ⅱ　ルーブリック評価表

（表 1）

	姿勢		探究		コミュニケーション	
	献身性・主体性	興味関心	課題発見力 課題設定力	課題解決力	表現力・発信力 （他者へ）	多様性受容力 （他者から）
S	グループのリーダー的存在として自らの役割や責任を果たすだけでなく、進んで他者や社会のために貢献しようとする意志が感じられた。	課題意識を持って活動をスタートし、強い好奇心とともに深い探究が行われたことで、関連する他の分野にも課題意識が広がった。	グローバル探究にふさわしい独自性に富んだ具体的な課題を設定することができた。	先行研究を踏まえ、十分な論拠とともに、独創的な考えを展開することができた。	他者に対してさまざまな方法・手段を駆使して分かりやすく伝えることができただけでなく、意見の異なる相手からも理解を得ることができた。	自らと考えや価値観が異なる人とも自分から積極的に交流し、自らにない価値観を受け入れるなど相互理解を通して質の高い成果につなげた。
A	グループの一員として自らの役割や責任を果たした経験から、将来他者や社会のために貢献したいという思いを抱くに至った。	課題意識を持って活動をスタートし、深い探究を行おうと積極的に取り組んだことで、さらに興味関心が広がった。	グローバル探究にふさわしい具体的な課題を設定することができた。	調べた資料やデータを解釈し、自らの考えを展開することができた。	他者に対して常にわかりやすく伝えようとし、意見の異なる相手からも理解を得ようと工夫することができた。	自らと考えや価値観の異なる人のことも尊重し、活動がより意義のあるものとなるように協力することができた。
B	与えられた自らの役割は果たすが主体的なものではなく、他者や社会のために貢献するという生き方に価値を見いだすことができなかった。	課題意識を持って活動をスタートしたにも関わらず、積極的な探究を行うことができず、興味関心を広げることができなかった。	グローバル探究にはふさわしいが、漠然とした課題設定となってしまった。	独自の考えを展開しているが、調べた資料やデータを活用できておらず論拠に乏しい。	他者に思いを伝えようとする気持ちはあるが、もどかしさから感情的になることが多かった。	自らと考えや価値観の異なる他者の存在に気付くことはできたが、自らの意見を押し通そうとする場面が多く見られた。
C	グループの一員としての役割も果たそうとせず常に消極的で、他者や社会に貢献しようとする意志も見られなかった。	他者の課題意識に追従して活動をスタートさせたため、興味関心をもつ事柄を見出せず、積極的に探究を行うことができなかった。	グローバル探究に関連していない課題設定となってしまった。	調べた資料やデータをただ列挙しただけにとどまっている。	他者に思いを伝えようとする気持ちを持っていない。もしくは、他者に思いを伝えることができなかった。	自らと考えや価値観の異なる他者の存在を認めることができず、周囲から促されて交流をする程度に留まってしまった。

（表 2）

【発　表】	
S	原稿を見ず、聞き手への配慮もなされ非常に聞き取りやすかった。
A	原稿を見るのは最小限で、聞き手への配慮がなされ聞き取りやすかった。
B	原稿を見ながら、もしくは声が小さく聞き取りにくかった。
C	原稿を見ながら、かつ声も小さく聞き取りにくかった。
【内　容】	
S	綿密な調査に基づき、独創性のある興味深い課題解決策を提示していた。
A	課題解決策の着眼点などに良さがあり、さらなる飛躍、発展を期待したい。
B	課題解決策が調査不足であったり、一般的なものであったりなど物足りなさが感じられた。
C	課題について調べたことをただ発表しているだけであった。

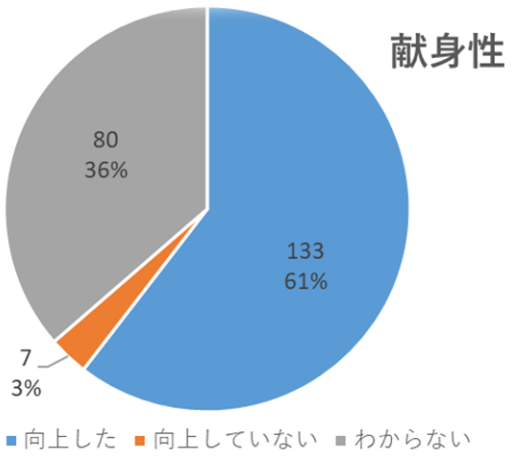
9　成果　　※文中の【　】は、本開発単位終了後の生徒レポートから引用

本事業 1 期生となる高校 2 年生に対して、昨年度のプレ実施の経験からの改善を踏まえての実施となった。新型コロナウイルスの多大な影響を受け、変更を余儀なくされた部分はあるものの、本学の目指す「Key Girl」育成の第 2 段階として、一定の成果を上げることができたと認識している。本開発単位では、「リージョン探究」で育まれた地域の未来に対して貢献したいという思いを、グローバルな視野と考え方を身につけることで実際に地域に貢献することのできる力へと発展させることを意識するとともに、「Key Girl」の 8 つの資質全ての育成を目指している。昨年度末および今年度当初の突然の休校措置により本開発単位の学びは中断されることとなったが、本学が ICT 教育環境を一気に整備したこともあり、5 月中には本開発単位の学びについての連絡を限定配信動画で伝えることができ、中断期間を最小限に抑えることができたように思う。ただし、新クラス決定後にグループ編成を行うため、休校によってグループ編成および探究分野と探究課題の設定に 2 か月近くの遅れがでたことは本開発単位の運営に多大な影響を与えた。

では以下に、本開発単位で期待される成果と対比させながら詳細を述べる。

i　資質①「献身性」

本開発単位終了後に実施したアンケートでは、「グローバル探究」を通して「献身性」の向上を実感した生徒が 61%となっており、「リージョン探究」同様「分からない」と答えた生徒の割合が最も多い項目となった。本学のカトリック教育による「献身性」の育成のイメージが強いことがその要因の一つかもしれないが、社会課題の解決に向けての活動が「献身性」の育成につながっているということをもう少し伝えていく必要性があるのかもしれないと感じている。

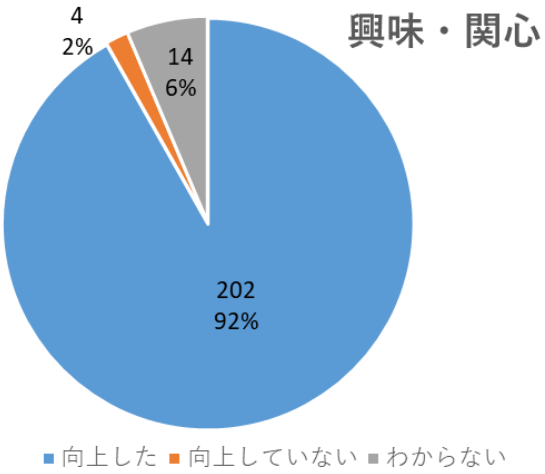


なお、生徒のアンケートからは、【自らの取り組み考えたアイディアが、もしかすると社会に貢献できるものかもしれないと思うとワクワクしなが

ら取り組むことができた：環境】、【最近テレビなどでも SDG s を扱ったものが多く、「グローバル探究」に取り組めたことは非常に意義のあることだと思う。高校生の立場で考えたことなどはすでに取り組まれていることばかりだったが、それでも世界の課題を知り、少しでも行動につなげることに価値はあると思う：女性】などと社会への「奉仕・貢献」の意識を持ちながら探究活動に取り組んでいる様子を伺うことができた。

ii　資質②「興味・関心」

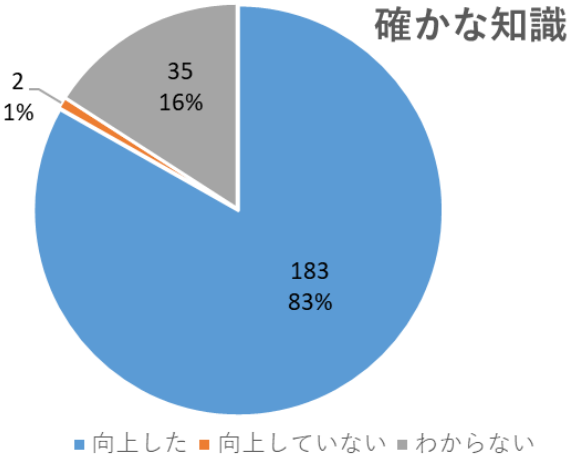
アンケートからは 92%の生徒が「（グローバルな社会課題に対する）興味・関心」の向上を実感しており、「リージョン探究」同様、今年度最も成果が見られた項目となった。



レポートにも【去年と違い、自分が興味を感じている分野について取り組むことができたので、とことん取り組むことができたと思う。将来の進路にも影響を与えてくれたように思う：教育】、【似たような課題について取り組んでいた班がほかにもあったが、全くアプローチが異なっていて非常に興味深く感じた。グローバルな社会課題は規模が大きい分色々な角度から解決策を考えることができると思う。取り組んでより興味をもつようになった：環境】などと、生徒たちが昨年度の経験を踏まえ、より「興味・関心」を持ちながら取り組むことができたように感じられる。

iii　資質③「確かな知識」

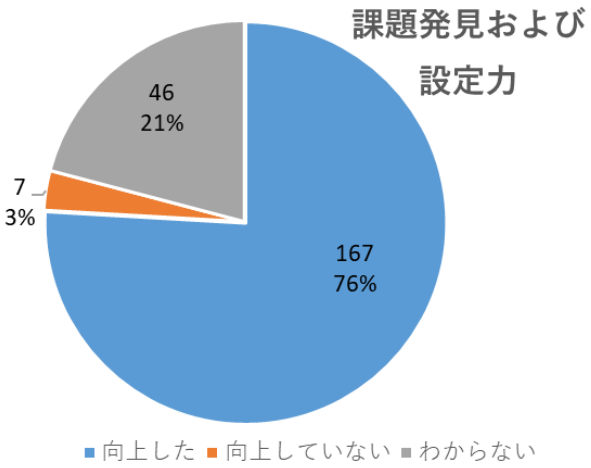
アンケート結果からは 83%の生徒が「確かな知識」の向上を実感している。また、「向上していない」と回答した人数が最も少ない項目となり、本開発単位の取り組みが成果を伴うものであったことが分かる。



レポートでは、【一つの分野でも多くの課題があって、課題を設定することも難しいと感じた。しかし、それをきっかけにして、新型コロナだけではない世界で今なにが起きているのかということについて深く知ることができたと思う：環境】、【色んな発表の動画を見て、他の人の発表から多くのことを学んだと思う。それぞれの人の取り組みの熱意が感じられたため、自分から多くの発表を見たいと思い、実際に目を通した。そのおかげで多くの知識を手にすることができたように思う：福祉】、【今回、オンラインでインタビューをすることができた。事前に新聞などで調べた上でインタビューを行ったが、いざ話を聞いてみると新聞と違う意見が返ってきた。私たちはメディアの情報が正しいと思いすぎだと思う。自らの手で得た情報の大切さを強く感じた：女性】などと、探究活動を通して、様々な観点から「確かな知識」の重

要性を感じていることが分かる。

ⅳ　資質④「課題発見および設定力」

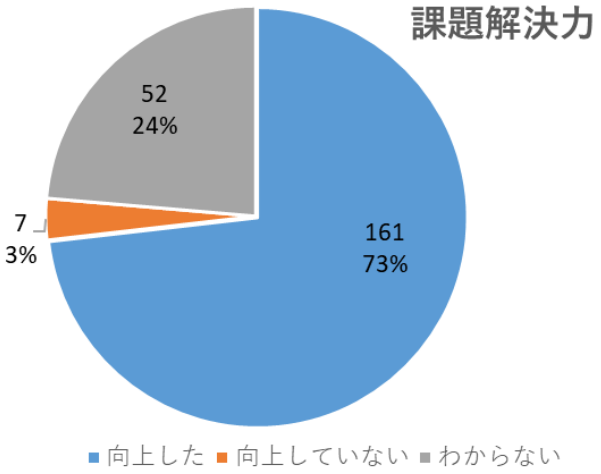


本開発単位において最も重視しているのがこの資質である。「リージョン探究」では、講師より与えられた課題に対して「最善の解」を求めるという活動であったが、本開発単位では、「教育」「福祉」「女性」「環境」の 4 つのテーマの中からグループおよび個人で課題を発見・設定した上で探究活動に入ることになり、難易度が一段階あがる。そのため、アンケートでこの資質の向上を実感した生徒は 76%にとどまった。終了後のレポートでも、【課題を決めることができるというのは自由な反面とても難しいことだと感じた。普段から社会課題に興味を持っていなかった自分のことを恥ずかしく思う部分もあった：教育】、【私たちは、新型コロナウイルスの関係から感染症への対策について探究活動を行うことにした。しかし、いざ活動を始めてみると、手洗いなど個人でできることから、国単位の政策まで様々な種類のものがあり、探究活動の幅について悩まされることになった。活動を終えた今感じるのは、もう少し身近なところに範囲を狭めて活動するのがよかったということだ。改めて課題を設定することの難しさを感じている：福祉】などと、昨年と同様、高校生段階で課題を設定することの難しさを訴える意見は散見された。しかし、難しいことに対してチャレンジすることの価値やチャレンジして失敗することの価値もあると判断している。

また、【自分で課題を決めて、そこから掘り下げていくのは、ある程度軌道に乗るまでが大変だった。しかし、そこさえクリアすればとても楽しく活動を進めていくことができる。とても意義のある活動だと感じた：教育】と、課題設定が深い探究活動へとつながる一つのきっかけとなることや、【グローバルな課題について探究することはとても難しかった。しかし、他の人の発表を見て、「自分ごと」と捉えられるかが一つのカギではないかと感じるようになった。自分はグループのメンバーの取り組みたい課題に引きずられて取り組んだので、反省している：環境】と主体的な課題設定をしなかったことが学びのきっかけになっている例も見られており、次年度も生徒自身が課題設定を行うという活動は継続させるつもりである。

ⅴ 資質⑤「課題解決力」

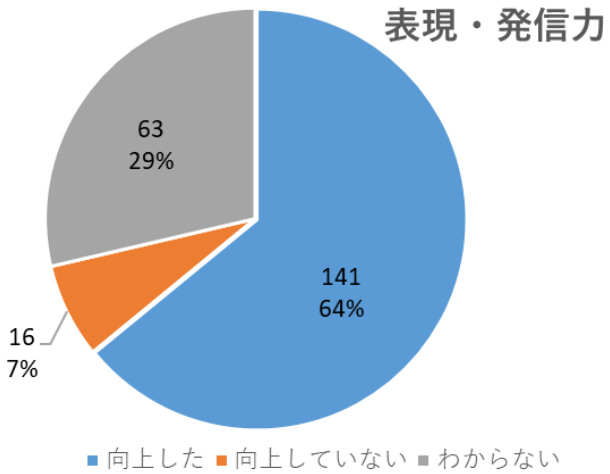
アンケートの結果からは「課題解決力」の向上を実感している生徒は 73%と想定よりも少し低い数値にとどまった印象がある。



本開発単位終了後のレポートでも、【「グローバル探究」の活動は、制約が少なく自由に活動ができるが、その反面、課題があまりにも大きく、効果的と感じられる解決策を導くことができないと感じた。正直、高校生でこのようなことをやるのは無理だと思う：女性】などのように、少しネガティブな意見が見られた。しかし、【私たちは女性の社会進出に関する意識をいかに変えていくかという意識の問題について探究したので、本当に難しかった。しかし、だからといって皆がこの問題から目を背けていては解決には向かっていかないと思うので、今回私たちが学年のみんなに発表したことでほんの少しでも良い変化をもたらすことができたと考えたい。解決の難しい課題であっても小さな意識の変化がきっと大きな流れへとつながっていくと思う：女性】、【やればやるほど課題の大きさに悩まされたが、自分たちなりには納得できる活動ができたと思う。新型コロナウイルスの影響で社会が大きく変わる瞬間を目の当たりにしたことで、この「地域協働事業」の意義を改めて感じている。社会を生きていくということは「答えが一つとは限らないことに挑戦する」ということと同じ意味だと思う。そういうことを考えると、高校生でこのような体験ができていることはとても幸せだと思うので、次の探究活動も前向きに取り組んでいきたい：福祉】と課題解決の難しさを感じつつも、前向きな姿勢を獲得した生徒も見られ、さらにこの流れをより大きなものにしていくような働きかけをしていきたいと考えている。

ⅵ 資質⑥「表現・発信力」

本項目もアンケートの結果を見ると、64%の生徒が「表現・発信力」の向上を実感するにとどまり、２年目となる本事業の中である程度の発信の機会を経ていることから考えると、想定していた程の成果を上げることができていないように感じられる。

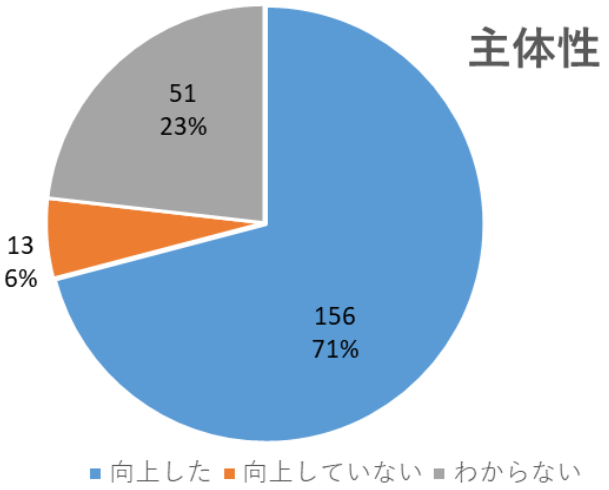


しかし、レポートを見ていくと、生徒たちはかなり高いレベルでの「表現・発信力」について考えていることが分かった。【今年の発表は、動画での発表になったため、昨年度と異なり、原稿を見ながら録画してしまった。他の班の動画を見て、昨年は聞き手の反応を見るために、原稿を自分の言葉で話せるようにと準備したことを思い出した。新型コロナウイルスの影響とは言え、反省している：福祉】、【今回「自分で創るオンラインフィールドワーク」という活動にチャレンジしてみた。しかし、問い合わせのメールを送るにも失礼にならない文面を考える力がまだまだ不足していることを痛感した。社会とつながるためには、こ

のような礼儀という部分もとても大切だと感じた：環境】、【「グローバル探究」は、自分の取り組みたいことに対する探究活動だったので、グループのメンバーとの意思疎通という点で悔いが残っている。それぞれのこうしたいという思いが強くなってしまい、上手くバランスをとることができなかったからだ。1人で活動すればよかったかなと思う部分もあるが、やはり上手くメンバーに伝える力を身につけるべきだと思った：環境】などと、「表現・発信力」を発表の場面だけを想定していないというのは、生徒のメタ認知の能力の向上を感じさせる意見であった。

vii 資質⑦「主体性」

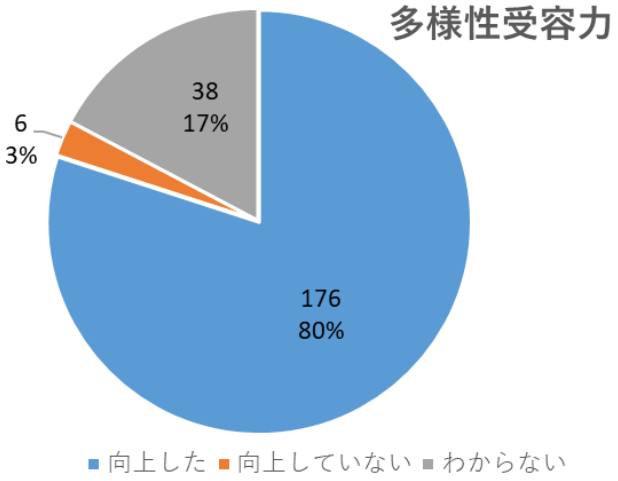
高校1年生同様、近年最も大きな生徒の変容が見られるのがこの項目であるため、「主体性」の向上の実感が71%にとどまったことには物足りなさが感じられる。特に、本開発単位は、自分たちで課題を発見・設定する、積極的に外部の方からインタビューを試みるなどの点で自らの「主体性」を実感しやすい取り組みとなっており、「向上した」と回答しやすいのではないかと感じていたからである。これについては、次年度のアンケートでもう少し丁寧に意見を引き出していきたいと考えている。



なお、レポートからは、【昨年の研究成果発表会で先輩の発表を見てから、「グローバル探究」の活動を楽しみにしていた。しかし、今振り返ってみると、昨年の先輩方ほど積極的に活動できたようには思えない。先輩方は企業の中でフィールドワークを行ったり、コンテストなどにも積極的に参加し、表彰されたりしており、自分たちはまだまだだなと感じた：福祉】と昨年度と比較している意見や、【もしかして東京で調査活動ができるかもと楽しみにしていた「グローバル探究」の活動だったのに、新型コロナウイルスの影響でチャレンジしてみたいと思っていた活動を行うことができなかったのが残念だった。急遽オンライン海外フィールドワークの提案もあったが、挑戦できなかったことも心残りとなっている：教育】と当初の予想よりも消極的になってしまったことに触れている意見、さらに【休校中の動画の中で、1月から3月は発展的活動の期間とするという説明があったが、「グローバル探究」が終わった今、全く発展的な活動を行える状態にない。探究活動に取り組んで、考えるだけではなく、行動することの大切さを感じているので、もったいないなと感じている：環境】などと、少しネガティブな意見が見られるのは気になるところである。

ⅷ 資質⑧「多様性受容力」

事後アンケートの結果を見ると、80%の生徒が「多様性受容力」の向上を実感している。開発単位Ⅰ「リージョン探究」においては、コースやクラスの枠組みを取り払ってグループ編成を行うことで「多様性受容力」を育成しようとする取り組みを行ったが、高校2年生は医進、特進、学際とそれぞれコース毎に単位数が異なっており、昨年度と同じ形ではグループ編成を行うことができず、昨年度と同じ形で「多様性受容力」を育成することができなかった。



しかし、昨年度の報告書でも述べた通り、今年度も【「グローバル探究」に取り組んで、改めて探究学習は答えが一つではない課題にチャレンジする活動だと感じた。女性が働きやすい社会の構築について取り組んだが、その課題に対して、人によって全くアプローチが異なっていた。そのため、昨年度以上にグループのメンバーと意見をぶつけ合う場面が増えた。上手くいかない場面もあったけれど、人それぞれの考え方や感じ方というものがあるのだということが理解できた：女性】のように自らと他者の意見のぶつかり合いや、【「グローバル探究」では、講師の先生への進捗状況を報告するなどの機会があり、他の人の考えや意見を多く聞くことができた。探究学習は答えが一つではないとよく言われるが、同じ「環境」という分野を選択していても課題の種類は無数にあるし、解決に至るアプローチの仕方も無数にあると感じた：環境】と課題設定の幅広さや解決へのアプローチの多彩さから他者への尊重を、さらに、【今回「教育」の分野を選択し、自分たちの探究活動や、同じ分野を選択した人たちの発表を通して、今の社会はまだまだ思いやりが足りないということを痛感した。外国籍の児童をどのように受け入れるか、貧困家庭の子どもたちをどう守っていくか、外見と心の性とが異なる子どもの尊厳をどう守っていくかなど、個人の集合が社会であることから考えると社会は多様なものであるはずなのに、常識を守ることや普遍性、統一性を求められるという矛盾を強く感じさせられた：教育】など社会的弱者と言われる人々の存在への気づきなどから「多様性受容力」の高まりを感じることができた。

ⅸ その他の資質

本開発単位終了後のアンケートで「『グローバル探究』の活動を通して、向上したと感じる能力で上記に含まれていないものがあれば教えてください」という項目を実施した。以下に主なものを記載する。

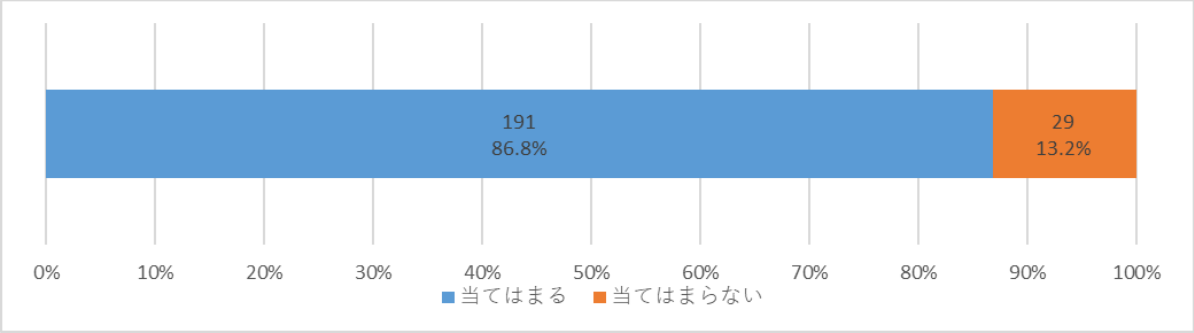
・ICT 機器の活用能力
・計画立案および実行力
・傾聴力
・集中力
・徹底的に取り組む力
・物事を楽しむ力
・礼儀

10　事後アンケートの集約

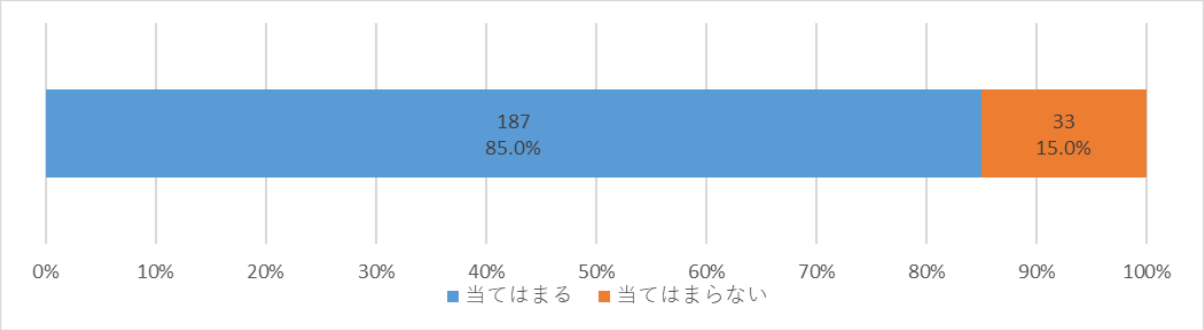
9でも述べた通り、本開発単位終了後に、学びの効果を測定するためアンケートを実施した。上記に含まれなかった項目を以下にまとめる。

〇質問項目

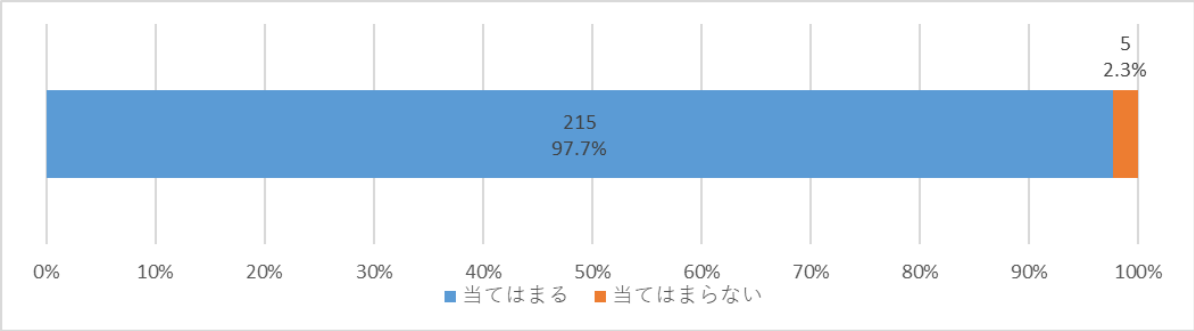
①「グローバル探究」の学びを通して、将来「(自らが生活する）地域」で地域の未来のために貢献したいという思いが強くなった。



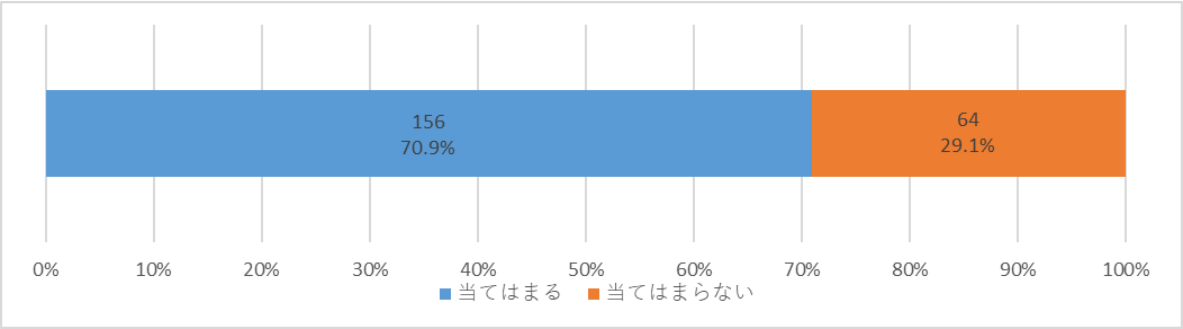
②「グローバル探究」の学びを通して、将来他地域や他国で生活することになったとしても、何らかの形で「(現在自らが生活する）地域」の未来のために貢献したいという気持ちが強くなった。



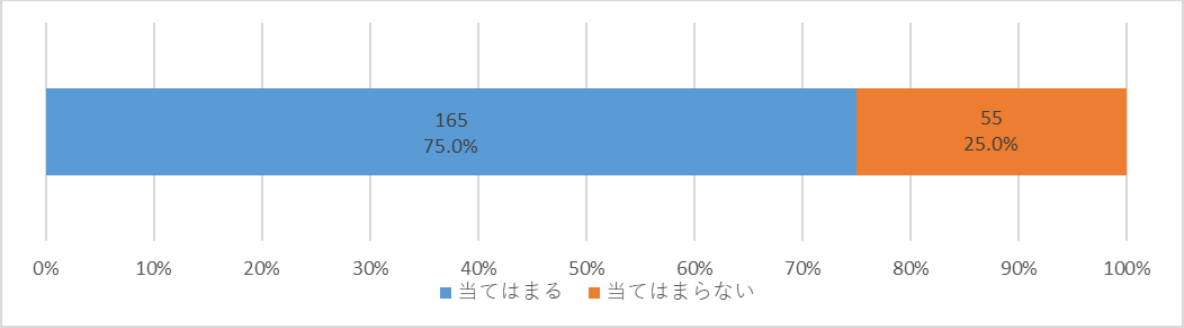
③「グローバル探究」の学びを通して、これからの社会を生きていく上では、「答えが一つとは限らない課題」と向き合っていく必要があると感じるようになった。



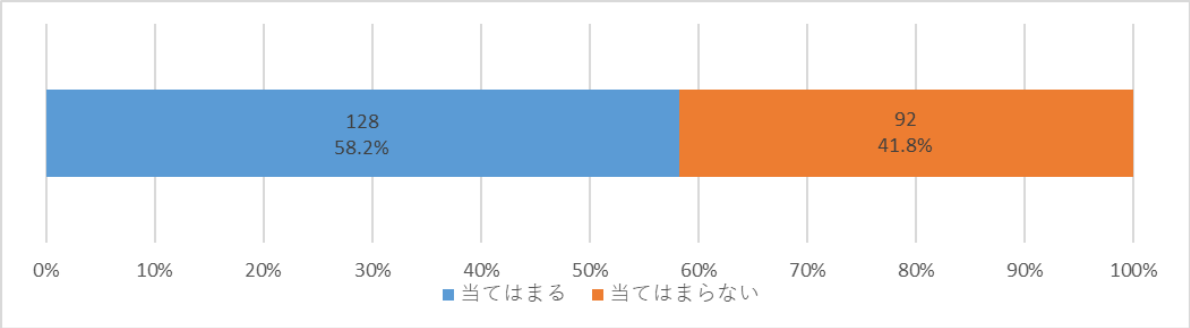
④「グローバル探究」の学びを通して、英語を学ぶことの重要性を感じるようになった。



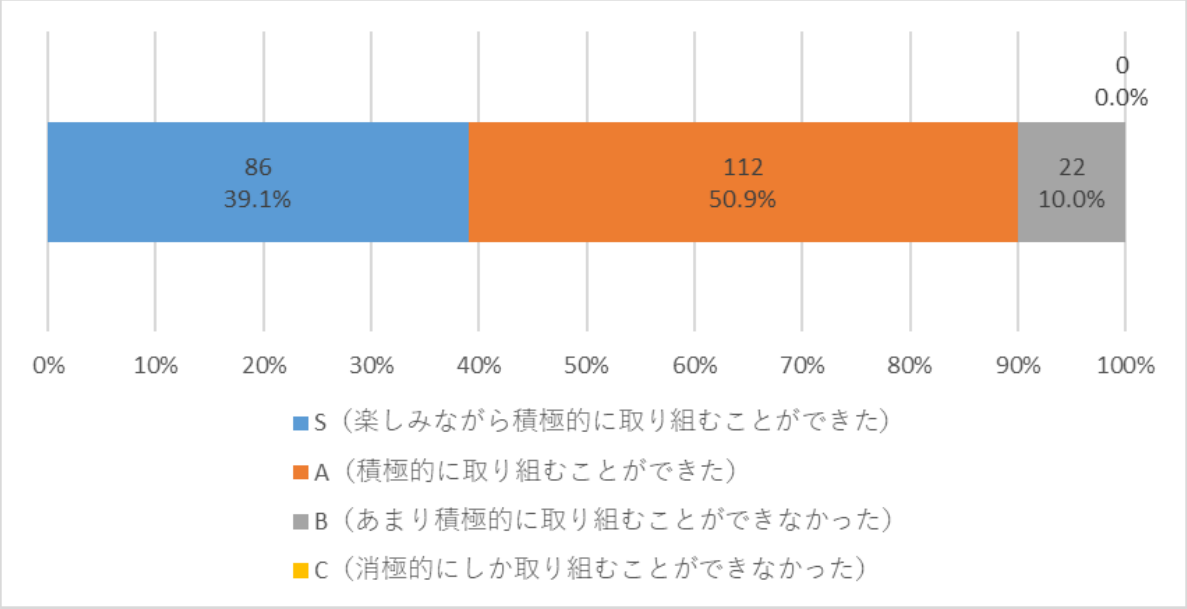
⑤「グローバル探究」の学びを通して、様々な課題に対して、複数の視点からアプローチができるようになった。



⑥「グローバル探究」の学びを通して、自分には良いところがあると感じることができるようになった。



⑦「グローバル探究」の学びに対する自らの姿勢を自己評価してください。



11　提出レポートからの気付き

ⅰ　自らの将来に対する意識の向上

高校 2 年生は本開発単位に続き、開発単位Ⅲとして「キャリア探究」を実施する。休校期間に配信したオリエンテーション動画の中では、「Key Girl」の 8 つの資質、本事業の 3 年間の流れなどを改めて説明した。そのため、生徒たちは次の段階として「キャリア探究」という学びが待っていることをすでに知っている。その影響もあってか【今まで社会についてあまり関心がなかったが、地域協働事業を通して、多くの課題を抱えてはいるが現代社会というものを少しずつ知ってきたように思う。この先に自分の将来があるのかもしれないと感じるようになった：福祉】、【今年は「答えが一つとは限らない課題にチャレンジする」という言葉を何度も聞いた。最初は何も思わなかったが、新型コロナウイルスの影響で社会が右往左往している様子を見ていると、「生きる」ということそのものが、答えが一つではない課題にチャレンジすることだと感じるようになった。商品を売ることも「答えが一つとは限らない課題にチャレンジする」ことだと思う。そう考えると、自分がどんな形で生きていくのかということとも真剣に向き合いたいと思うようになった：環境】、【講師の先生が紛争地域で医師として活躍していた方なので、話すこと全てにリアリティーがあって引き込まれた。自分も社会に貢献しながら誇りを持てる仕事に携わりたい：福祉】、【先生になりたいという思いがあったため、「教育」の分野を選択したが、「グローバル探究」での活動を通して今の教育現場にはこんなに多くの課題があるのかと驚いた。先生を目指すことをやめようと思った時もあったが、今はやはりチャレンジしてみようという気持ちになっている：教育】などと、「キャリア探究」の取り組みを前に「グローバル探究」が自らのキャリアを考えるきっかけを提示していることが分かった。

ⅱ　探究学習に対する意欲の向上

本事業の 1 期生となる高校 2 年生は探究活動に取り組んで 2 年目となるが、本学の中に探究学習が根付いてきたことも影響してか、今年度のレポートからは探究学習に対する意欲の向上が伺えた。

【「グローバル探究」は、自分の取り組みたいことに焦点を当てて取り組むことができるので、純粋に取り組んでいて楽しく、発表のための資料集めなども全く苦にならず、また達成感もあった：女性】、【「グローバル探究」は自分で課題を発見し、解決のために試行錯誤するので、様々なことに関心を持つ力や考える力が養われていることを実感できた。次のプログラムも積極的に取り組みたい：福祉】などのような前向きな意見が数多く見られた。

12　昨年度の課題とその対応

初年度のプレ活動を踏まえ、今年度本格実施となった本開発単位であるが、新型コロナウイルスによる多大な影響を受け、中断期間や活動の縮小という障害がある中においては、その影響を最小限に抑えることができたように思う。ただし、プレ活動の段階であぶりだされた課題に対していかに対応できていたかを検証しておきたい。

ⅰ　課題設定の条件不備

プレ活動における「グローバル探究」では「課題設定および設定力」の向上を意図していたことから、SDGs の「教育」「福祉」「女性」「環境」の分野に関わりがあれば、自由に課題設定をしてもよいとした。しかし、「自由に課題を設定すること」にこだわりすぎて、生徒たちの提示する解決策の設定もバラバラとなり、運営指導委員会においても指摘を受けた。そこで、今年度は、解決策を考えるにあたって、本開発単位が SDGs を踏まえていることから「2030 年をゴールとすること」、「持続可能な仕組みであること」という 2 つの条件をつけることにした。結果として、一部この条件を理解できていないグループも見られたものの、時間軸が整ったことで評価における比較もしやすくなり、次年度も継続していくこととしたい。

ⅱ　「自分で創るフィールドワーク」の実施について

昨年度の段階では、今年度の夏期休暇中に実施予定の「自分で創るフィールドワーク」が東京オリンピック・パラリンピック開催期間と重複するため、宿泊先の確保などが難しいということを危惧していた。しかし、今年度、新型コロナウイルスの影響を受けたため、「自分で創るフィールドワーク」そのものを実施することができていない。次年度に関しては、まだまだ不透明ではあるものの、2 ヶ月前を目途に実施の可否について判断し、実施が難しい場合は今年度同様「自分で創るオンラインフィールドワーク」を実施することとする。

ⅲ　発表会の形式について

個人の探究活動を認めたことによるグループ数の増加によって、発表会場を 2 か所設定したことと、全ての発表を見たいという生徒の要望の両立が課題であったが、これも新型コロナウイルスの影響を受け、対面型の発表そのものを行うことができなかったため、根本的な解決ができないままとなっている。しかし、次項でも述べるが、動画による発表形式にも課題があるため、次年度はそちらへの対応が中心となると考えられる。

ⅳ　「リージョン探究」との連動性

昨年度のプレ活動は、SGH アソシエイトプログラムからの移行も含まれており、「地域から世界

へ」という視点の拡大を意図したSGHアソシエイトプログラムと「地域を世界から見る」という視点の複数化を目指す本事業の意図とがかみ合っていないことから起こった課題であった。

今年度は、いつでも繰り返し視聴できるオリエンテーション動画を活用したことにより、「グローバル探究」の意図については告知できたように思う。そのため、あまり問題は表面化しなかったと認識している。

13　本年度の課題

本開発単位においても、本年度は予期していない新型コロナウイルスの多大な影響を受け、本来予定していたプログラムを中止もしくは縮小せざるを得なかった。そのため、開発単位Ⅰ同様にポスターセッションなどの対面型のプログラムを実施できなかった影響は大きく、本年度の課題もその辺りから生じている。

ⅰ　「探究活動の質」と「発展的活動の難しさ」

開発単位Ⅰと類似の課題であるが、高校 1 年生と比較すると、高校2年生は昨年度の研究成果発表会に参加しており、現高校3年生の高校2年次の優秀班の発表を見ることができているため、「探究の深さ」という部分では、現高校1年生ほどの差を感じることはない。

しかし、現高校3年生は、昨年度「高校生フォーラム」や「探究甲子園」などの外部の発表会、東京大学の「UTSummer」、京都大学の「SDGsリーダーズ研修」など外部の探究型プログラム等に自由に参加して学びを得たり、他の学校の高校生と交流したりするなどして、多くの刺激を受ける機会に恵まれた。その差が「探究活動の質」という部分での差につながったと感じている。

また、開発単位Ⅲ「キャリア探究」のスタートを、1月16日応募締切のナレッジキャピタル主催「未来の“私の”仕事を考える」への応募に置いていたことから、本来12月中に終了するはずの本開発単位が 1 か月遅れてしまったことで、本開発単位の発表の視聴活動、評価活動およびリフレクション活動が重複することになってしまった。そのため、本来1月から3月に設定していた発展的活動の期間も上手く活用することができないまま終わりを迎えることになってしまった。

ⅱ　「表現・発信力」の育成

これも開発単位Ⅰと同様の課題であるが、新型コロナウイルス感染拡大の可能性を踏まえ、対面型の発表形式ではなく、動画による発表形式を採用したことによる弊害だと考えている。特に、高校2年生に関しては発表後の質疑応答の時間を設けることで、瞬間的な受け答えの能力を磨く機会を提供すべきであったと考えており、開発単位Ⅲの発表の際には改善したいと考えている。

ⅲ　客観的かつ適切な評価活動の実施

これも他者に対する評価という部分でどうしても今後の人間関係などを配慮して適切な評価を行うことができていないというのは、開発単位Ⅰと同様であるが、本開発単位には、もう一つ別の要因も含まれている。開発単位Ⅰは完全グループ活動であったため、リフレクションにおいて自己、グループメンバー、教員から重層的な評価を行うことができたが、本開発単位は、グループ活動を推奨するものの、個人での活動も許可したことで、個人で活動した生徒に関しては他者からの評価を受けることができないという事態が生じた。次年度は個人の活動を認めながらも、個人活動を行ったメンバ

ーの中で相互評価ができるように事前に準備しておくようにしておきたい。

ⅳ　オンライン海外フィールドワークの活用

すでに述べた通り、「自分で創るフィールドワーク」を実施できなかったため、グローバルな社会課題についての知識や関心を深める一助として、急遽 Tiger Mov 社による「海外オンラインフィールドワーク」を導入し、生徒へ参加を促した。しかし、あまりにも唐突な申し出となったためか、今年度は１名も参加希望が出なかった。コロナ禍の社会の中で、グローバルな社会課題のリアルを調査する手段の一つとしては有効なものであると考えられるため、次年度はもう少し丁寧に告知を行い、有効活用したいと考えている。

14　「グローバル探究」プレゼンテーション資料（一部）

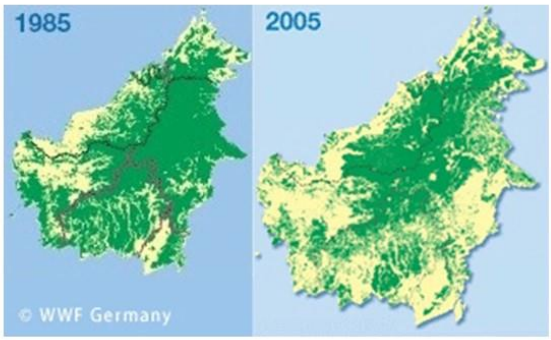
森林伐採によって起こる問題

・気候変化をもたらす

・動物などの住処がなくなる

・病気の蔓延

ボルネオ島における森林伐採の現状

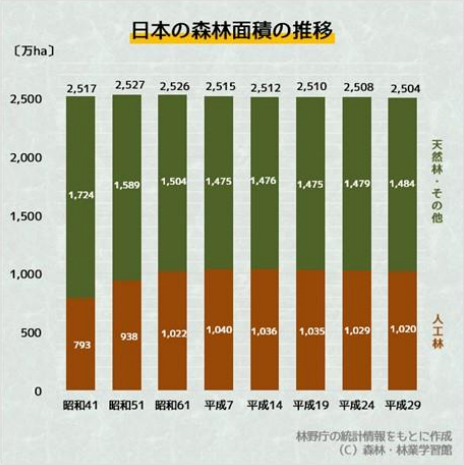


(WWFジャパンより引用)

・2005年にかけて森林面積が減少している

・大規模な森林伐採により、火災が起こっている

日本における森林伐採の現状



・森林の伐採で分かりやすい森林面積の減少は少ないが、人口林も少し増加している

・人工林が増えるとその周りに住むシカやイノシシの餌となる木の実も少なくなり日本の町などに出没する

国を比較して…

- ***マレーシアのボルネオ島や外国のほうが森林伐採の影響を受けやすい***
- ***日本は人口林の影響が大きい***

これらの問題を解決するには・・・

⇩

何度でも再生可能なものを作って無駄な森林伐採を減らす

STUDIOR330

とても環境に優しいデニムとの言葉通り、洗い加工用の水の98%をリサイクルしていたり、箱やタグも環境に配慮した取り組みをしているんだとか！

(ローラinstagramより)

私たちの解決策

- ***和歌山の紀州ヒノキの端材(余分な切れ端)を利用してオリジナルmy箸を作る***

↓

- ***森林伐採を少しでも和らげることができる***

↓

- ***和歌山の地域活性にも影響を与える***

紀州ヒノキを実際に使ってみて

・水に強く、耐久性がある

・端材(余った切れ端)なので、コストを削減できると考えた

・光沢があり、ツヤもある

この活動を熟考していくと世界の環境保全につながる

⇩

私たちが意識的に自然に優しいものを取り込んで行くことが大切

ワクチンで世界を救う

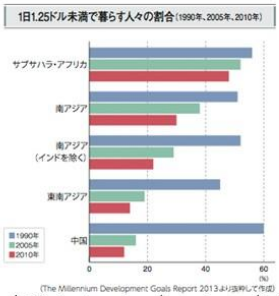
H2G　福祉2班
川嶋珠由　島村望乃　武田春美

現状

●アフリカのサブサハラ・アフリカ地域に
5人に2人が1日1,25ドル以下で暮らしている。

→栄養不足、衛生・環境問題で働けない

※1.25ドル＝約125円



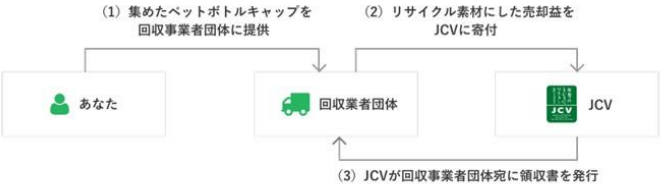
https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/shiryo/hakusyo/13_hakusho/honbun/b1/s3_2.htm

ペットボトルがワクチンになるまでの過程

1, ペットボトルキャップを回収業者に引き渡す

2, リサイクル素材に変える

3, 売却益をJCVに寄付する



https://yahoo.jp/PNUEZA

解決策①

・回収ボックスを作る

自分たちで作り、それを学校に設置

↓

設置することで、ペットボトルキャップでアフリカの貧困で困っている人を助けることができる

解決策②

・切手、書き損じはがき、未使用はがきを集めてワクチンにする

〒108-0073　東京都港区三田4-1-9　三田ヒルサイドビル 8F
世界の子どもにワクチンを 日本委員会　はがき回収キャンペーン係
TEL：03-5419-1081

解決策③

・貴金属、ジュエリー、時計、ブランド品などを送りワクチンにする

STEP.1　「お宝」を梱包します。

STEP.2　ゆうパック（日本郵政）の集荷を依頼します（着払い）。

STEP.3　到着・査定後、ご指定支援団体へ送金。

玄関先まで引き取りに伺います
お近くの郵便局にお持ち込みいただくこともできます
日本郵政（ゆうパック）集荷依頼
0800-0800-111 通話無料
8:00～21:00（年中無休）

解決策のまとめ

・切手、書き損じはがき、未使用はがきを集めてワクチンにする

・回収ボックスを作る

↓

和歌山信愛高校の生徒に知ってもらう

↓

和歌山市全体に広める

③　開発単位Ⅲ「キャリア探究」　（現高校３年生対象　※ただし、昨年度１月よりプレ活動として実施）

1　目的

「2011 年度にアメリカの小学校に入学した子どもたちの 65％は、大学卒業時に今存在していない職業に就くだろう（キャシー・デビッドソン）」。この言葉は、近年至るところで耳にする言葉となった。これは、科学技術等が急速に発展する現代社会の中で、今後 10～20 年の間で社会の構造が大きく変化することを予測した言葉である。この言葉が発表されたのが 2011 年の 8 月。そこからもうすぐ 10 年が経とうとし、その子どもたちはまもなく高校生になろうとしている。

また、近年日本でも「Society5.0」という言葉が聞かれるが、これは「狩猟社会」「農耕社会」「工業社会」「情報社会」に続く、仮想と現実を高度に組み合わせたシステムを用い、経済発展と社会課題の解決を両立する人間中心の新しい社会のことを指している。このようにこれから社会に出ていく生徒たちは、変化を予測することが難しい時代を生きることになる。すでに、新型コロナウイルスの感染拡大によって社会が短時間で大きく姿を変えるということを実感している生徒たちには、このような社会の変化に受け身で対応するのではなく、自ら課題を発見し、時には国籍を越えた他者とも協働しながらその解決を図り、未来を切り拓いていく姿勢が切に求められると感じている。

そこで、本開発単位では、本学のカトリックの理念による教育によって育まれた「奉仕・貢献の心」と開発単位Ⅰ、開発単位Ⅱの学びを掛け合わせながら、自らの生涯に渡って取り組みたい「ミッション（使命）」を見つけ、既存の職業観にとらわれない具体的なキャリアプランニングを行い、不透明な未来や将来に対して「不安」を抱くのではなく、「ワクワク」を胸にチャレンジできる人材へと成長することを目的とする。

2　内容

「奉仕・貢献の心」「リージョン」「グローバル」の 3 要素を意識しながら、人生を賭して取り組みたい「ミッション」を見つけるという探究活動を通して、既存の職業観にとらわれないキャリアプランニングを行う。ワークシート作成、ジェネリックスキル測定テスト、自らのキャリアプランを発表することだけでなく、他者のキャリアプランを聞くことなどの活動を通して、自らのプランをさらに深化させていく。なお、本開発単位は個人による探究活動とする。

3　期待される成果

「Key Girl」の資質　…　①・②・③・④・⑤・⑥・⑦・⑧

4　新型コロナウイルスの影響

本開発単位は昨年度１月よりスタートしている。しかし、緊急事態宣言および和歌山県知事の休校要請を受け、昨年度の 3 月 2 日（月）から今年度の 6 月 13 日（土）まで休校措置をとることとなった。そのため、「キャリア探究」の活動も中断を余儀なくされた。5 月には ICT 環境も整ったため、動画等を用いながら徐々に活動を再開させることができた。なお、高校 3 年生については、受験を控えており、6 月 1 日（月）より午前中 3 限の短縮授業を行い、学習進度の確保および模擬試験等を実施しており、その間の時間を活用し、ジェネリックスキル測定テストを実施している。

5　概要（実践）

i　昨年（2019 年）度実施内容

学期	回	月日	コマ数	内容	実施
2019年度 3	―	―	―	一般社団法人「ナレッジキャピタル」主催「未来の“私の”仕事を考える」への応募	通常実施
	①	1月22日（水）	1	「キャリア探究」ガイダンス	通常実施
	②	2月13日（水）	1	地域協働事業（グローカル型）特別講演 講師：運営指導委員渡邊道子様	通常実施
	③	2月29日（土）	1	リクルート『進学事典』付録「適性検査」の実施	通常実施
	－	3月16日（土）	―	地域協働事業（グローカル型）コンソーシアム特別講演 ・主催国際ソロプチミスト和歌山紀ノ川様	休校により中止

※3 月 16 日の特別講演は、コロナウイルス感染拡大防止による休校措置のため、実施できず。

ii　今年度実施内容

学期	回	月日	コマ数	内容	実施
1	①	5月18日（月）	1	「キャリア探究」ガイダンス動画①およびワークシート①配信	変更実施
	②	5月20日（水）	1	「キャリア探究」ガイダンス動画②およびワークシート②配信	変更実施
	③	5月22日（金）	1	「キャリア探究」ガイダンス動画③およびワークシート③配信	変更実施
	④	6月9日（火）	2	「学び未来PASS」（ジェネリックスキル測定テスト）受験① ※新型コロナウイルスの影響により短縮授業後に自宅受験	変更実施
	⑤	6月10日（水）	2	「学び未来PASS」受験②　※自宅受験	変更実施
	⑥	6月22日（月）	2	ワーク①　シャッフル発表会に向けて発表原稿等の作成	通常実施
	⑦	7月6日（月）	2	シャッフル発表会および評価活動 ・自らと近いキャリアを思い描く生徒とグループを作り発表 ・発表を通して、相互アドバイス。自己および他者評価を実施	通常実施
	⑧	7月13日（月）	2	ワーク②　シャッフル発表会を踏まえブラッシュアップ活動	通常実施
	⑨	7月25日(土）～ 8月13日（木）	4	クラス内発表会 ・各クラスで発表を実施。クラス代表を選出	通常実施
夏期補習期間	⑩	8月上旬	2	「キャリア探究」最終発表会（ホールで選抜者による口頭発表）	中止
2		9月14日（月）	2	動画配信形式の最終発表 ・発表者（22名）がホールに集合し、学年の各HR教室に配信	変更実施
	⑪	9月28日（月）	2	「キャリア探究」リフレクション ・自己、クラスのメンバーおよび担任からの評価活動を実施	通常実施
	－	－	－	「キャリア探究」レポートの作成 ※10月2日（金）を期限とし、Classi上に提出	変更実施

※本来の予定よりも 1 ヶ月程度遅れて終了

ⅲ　担当講師

本開発単位は個人による探究活動であり、担当講師は設定しない。高校３年生に所属する教育改革推進事業運営チームの３名の教員を中心として、学年に所属する全ての教員が運営、指導にあたる。

6　評価

ⅰ　評価方法

カトリックの理念に基づく「奉仕・貢献の心」と開発単位ⅠおよびⅡの学びという３つの要素を意識した上で設定した「ミッション（使命）」を含むキャリアプランニングを提案に向けて、主体的な探究活動の経緯とキャリアプランの具体性、そして、本開発単位に関しては、本事業のまとめに当たるものと位置付けて「継続・発展性」という項目を加味して、プログラム終了後に本学独自のルーブリック評価表（表１）を用いて評価を行った。なお、本ルーブリック評価表は、開発単位Ⅰ・Ⅱと同様に「Ｓ（大変優れている）・Ａ（優れている）・Ｂ（改善を必要とする）・Ｃ（努力を必要とする）」の 4 段階から構成され、本開発単位のスタート段階で生徒に配布し、評価基準を明確にするとともに、目指すべき目標とした。また、評価は自己および他者（クラスのメンバー）、そして担当教員（担任教諭）から実施し、より多面的かつ客観的なものとなるようにしている。

さらに、発表に関してはアドバイスシートに付属したルーブリック評価表（表２）を用いて、生徒および教員からの評価を行った。

ⅱ　ルーブリック評価表

（表１）

	姿勢		探究			コミュニケーション	
	献身性・主体性	興味関心	課題発見力 課題設定力	課題解決力	継続・発展性 【自己評価のみ】	表現力・発信力 （他者へ）	多様性受容力 （他者から）
S	自らの未来と他者や社会への奉仕・貢献という2つの視点が高いレベルで融合した活動を行うことができている。	自らだけでなく他者も大切な存在であると捉えた上で、これからの社会の中でどのようなキャリアを構築するかという点において強い興味関心を持つことができている。	「キャリア探究」というテーマの本質を理解した上で、独自の課題を発見、設定することができている。	丁寧な調査によって社会構造の変化などを予測した上で、論理的で興味深い「最善の解」を提示し、その実現に向けて動き始めている。	これまでのプログラムにおける過程と結果から学んだことを意識し、強い向上心とともに「キャリア探究」における実践に反映されている。	他者に対して自分の思いを分かりやすく伝えることができるだけでなく、その情熱で他者の主体性も引き出すことができた。	自らと興味関心や考え方の異なる他者に強い関心を持ち、その考え方や経験を積極的に取り入れ、より質の高い成果につなげた。
A	自らの未来という視点だけではなく、他者や社会のために奉仕・貢献するという視点も意識しながら活動することができている。	自らを大切な存在であると捉えた上で、今後の自己キャリアの構築に対して興味関心を持つことができている。	「キャリア探究」というテーマを踏まえ、適切な課題を発見、設定することができている。	社会構造の変化などを自分なりに予測した上で「最善の解」を提示することができている。	これまでのプログラムにおける過程と結果から学んだことを意識しながら、「キャリア探究」での実践に取り組んでいる。	他者に対して自分の思いを分かりやすく伝えることで、他者の心にも刺激を与えることができた。	自らと興味関心や考え方の異なる他者にも関心を持ち、その考え方や経験を自らに活用させようとする態度をとることができた。
B	自らの未来という視点が中心となり、他者や社会のために奉仕・貢献するという視点に乏しい活動になっている。	自らを大切な存在であると捉えながらも、今後の自己キャリアの構築について受動的で興味関心を持つことができていない。	「キャリア探究」というテーマを踏まえた上で、課題を発見、設定しているが、その課題設定に物足りなさが感じられる。	「最善の解」を提示することはできたが、それは現状から考えたものに留まっている。	これまでのプログラムにおける過程と結果から学んだことを「キャリア探究」における実践に活かしたいと考えていたが、行動に移せていない。	他者に対して自分の思いを伝えようとする気持ちはあるが、他者を巻き込むには至らなかった。	自らと興味関心や考え方の異なる他者の存在に気付いたが、自分とは違うという思いから何かを得ようとする態度をとることができなかった。
C	自らの未来という視点しか含まれておらず、他者や社会のために奉仕・貢献するという視点に欠けた活動になっている。	自らを大切な存在であると捉えることができず、今後の自己キャリアの構築という重要な課題に興味関心を持つことができていない。	「キャリア探究」というテーマの本質や全体を踏まえることもできておらず、適切な課題の発見、設定を行うことができていない。	しっかりと思いを持って取り組み、考えた上での「最善の解」を提示することができていない。	これまでのプログラムにおける学びが「キャリア探究」における実践に全く反映されていない。	他者に対して自分の思いを伝えたいという気持ちが乏しいため、他者を巻き込むこともできなかった。	自らの興味関心や考え方以外に関心がなく、他者の考え方や経験を自らに活用させることの意義も理解することができていない。

（表２）

【内容】

	S	社会に貢献するミッションと自己実現とが高いレベルで融合した、独自性のあるキャリアを構想することができた。
	A	社会に貢献するミッションを設定し、社会構造の変化などを予測したキャリアを構築することができた。
	B	ミッションを設定し、自らのキャリアについて考えることができているが、自己実現の度合いが強く、貢献の意識には物足りなさが感じられた。
	C	キャリア探究に取り組む意識が低く、ミッションの設定や自己のキャリアについて深く考えることができていなかった。

【発表】

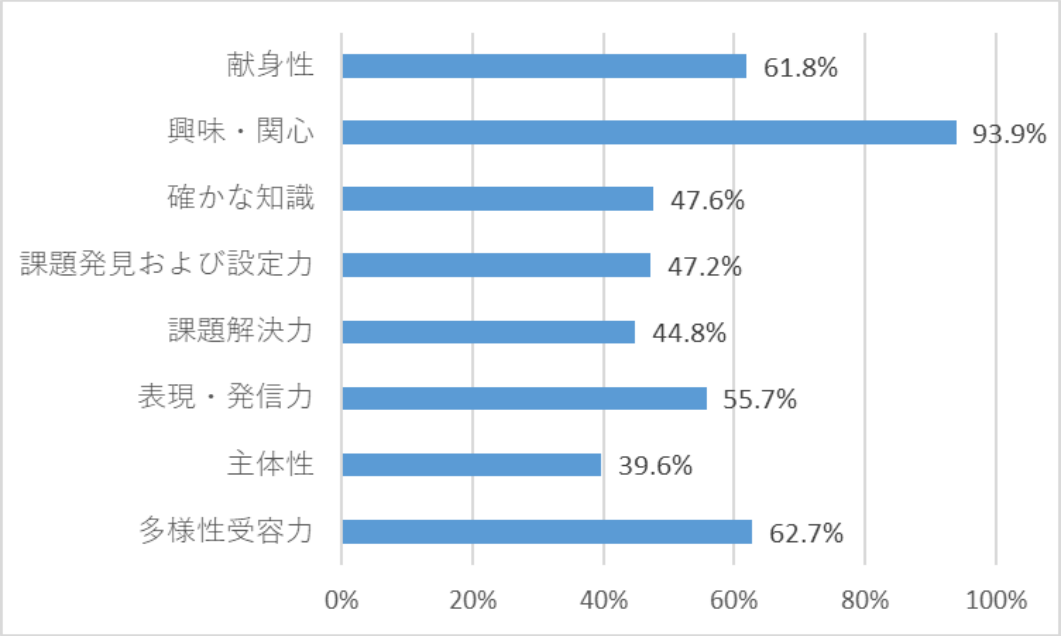
	S	適切な声量と話すスピードで内容を理解しやすく、情熱や創意工夫に富み、聞き手のやる気や主体性も引き出されるような発表だった。
	A	適切な声量と話すスピードで内容を理解しやすく、聞き手にも刺激を与えるような発表だった。
	B	声量や話すスピードなどに物足りなさはあったが、聞き手に自らの探究成果を伝えようとする思いが感じられる発表だった。
	C	聞き手に自らの成果を伝えようという意識や、聞き手とともによりよいものを作っていこうとする意識に乏しい発表だった。

７　成果　　※本文中の【　】は本開発単位終了後の生徒レポートから引用

本開発単位は、本事業の１期生である高校２年生が実施するために、高校３年生を対象に本事業のプレ活動として実施したものである。申請書段階で設定していた内容を実際に運用し、次年度の本格実施に繋げたいという思いがあったが、他の開発単位同様、新型コロナウイルスの多大な影響を受け、思うように実施することができなかった。しかし、そのような中でも、「Key Girl」育成の最終段階として、ふさわしいプログラムであるという一定の成果をあげることができたと認識している。本開発単位では、「Key Girl」の８つの資質を全て育成したいと考えているが、その中でも、自らの人生と真摯に向き合い、「ミッション」を見つけるという観点から「主体性」「課題発見および設定力」、その「ミッション」にいかにして取り組むことができる環境を獲得することができるかという観点から「課題解決力」、そして、「Key Girl」として、その中に「社会課題の解決」を踏まえるという観点から「献身性」の育成を重視した。

なお、終了後のレポートからは、【大切な高校３年生で新型コロナウイルスの影響もあって、当たり前の学校生活を送ることもできず、休校明けの模擬試験では成績も急降下してしまった。正直そんな時にこの「キャリア探究」の活動を提示されても、時間がもったいないし、やりたくないと思ったが、結果的に、学年の色んな人の発表を聞けたことは本当に良かったと思う。最終発表会で発表した人たちは、自分のやりたいことに向かっている感じが伝わってきて刺激を受けた。正直、ウジウジしていても仕方ないと割り切る良いきっかけになったと思う】などの意見が寄せられ、結果的に本開発単位の活動がコロナ禍におけるモチベーションの向上にも貢献できたように感じている。

では、以下に本開発単位で期待される成果と対比させながら詳細を述べていきたいと思うが、本開発単位で実施したアンケートは、9月末段階で実施したもので、1月末段階に実施した開発単位Ⅰ、Ⅱのアンケートは本アンケートを改善したものであり、質問形式には違いがある。「Key Girl」の資質に関しては、「『キャリア探究』における全ての活動を通して、どのような能力が向上したと感じますか。少しでも向上したものを全て選んでください」という文言としたため、8つの資質それぞれについて向上の有無を尋ねた高校1、2年生よりもかなり低い数値となっている。データを確認すると、「全て」を読み落としている生徒も一部いるようである。なお、212 名の高校 3 年生がアンケートに解答している。



ⅰ　資質①「献身性」

上記のグラフの通り、「献身性」の向上を実感した生徒は 61.8%となり、8つの資質の中で3番目に実感値の高い項目となり、開発単位Ⅰ、Ⅱとは少し異なった傾向が見られている。生徒のレポートからは【正直自分の将来について考えることから逃げていた部分もあったと思う。しかし、「キャリア探究」では他の人の発表を聞く機会が多いため、自然と考えなければならないという気持ちになった。「働く」ことを通して、社会に貢献したいという気持ちも大きくなったので、この活動ができてよかったと感じている】、【最初は私に社会課題を解決することなどできるわけがないと思っていた。でも、今ではそれは自らの視野が狭いということだと気づいた。私に環境問題そのものを解決することはできないと思うが、環境に配慮した素材の開発に取り組むことで間接的に環境問題の解決に携わることも大切なことだと思う。そんな具体的な夢を持つことができるこの活動はとても良かったと思う】などと、「ミッション」を設定したことが「献身性」の向上へとつながったように感じている。

ⅱ　資質②「興味・関心」

本開発単位におけるアンケート方式において 93.9%もの生徒が向上を実感したと答える項目となった。生徒のレポートからも【同級生の将来を聞くというのは大きな刺激になる。また、「キャリア探究」は自分1人で行う活動であるため、恥ずかしい発表をしたくないという思いにもなり、具体的

なキャリアを考えるためにこれまでの活動の中で最も興味を持って取り組むことができたと思う】、【今回の探究活動において、一番関心があったのはこれからの社会がどのように変化していくかということだ。特に、新型コロナウイルスによって、社会が一変するのを目の当たりにした今、「変化の予測が難しい社会」という言葉は重く響いた。人口の減少やAIの発展、大規模災害など、社会の変化や混乱をもたらすことなどは、この活動に取り組まないと気づかなかったことだと思う】と、個人の活動であることや社会変化に対する意識などから「興味・関心」の向上を実感していることが読み取ることができた。

ⅲ　資質③「確かな知識」

アンケートからは 47.6%の生徒しか向上を感じていないという結果が出ており、あまり成果を感じることのできない項目となった。また、その理由に関しても、生徒レポートの中ではほとんど触れられていない。未来の社会変化を踏まえたキャリアプランニングを行うという本開発単位の活動は、土台にすべき社会の姿そのものが仮定であるため、「確かな」と言い切ることに抵抗感が感じられたのではないだろうかと推測している。

ⅳ　資質④「課題発見および設定力」

生徒アンケートからは 47.2%の生徒しか向上を感じていないという結果が出ており、資質③と同様あまり成果を感じることのできない項目となった。レポートからは【自分のキャリアについて考えるという「キャリア探究」の取り組みは、とても大切なものだと思った。「探究基礎（※SGHアソシエイトプログラム時代のプログラム名）」、「グローバル探究」の学びと、ジェネリックスキル測定テストの結果なども意識しながら、自分のミッションやキャリアについて色々と考えてみた。しかし、自分の中ではまだまだ悔いの残る発表になってしまったように思う。しかし、自分のキャリアはこれからこそが本番なので、これをきっかけに考え続けていきたいと思う】というように、難しい課題へのアプローチという点に不満が残っているような様子が見られた。

ⅴ　資質⑤「課題解決力」

資質③・④同様、「課題解決力」の向上の実感は、44.8%と低い数値にとどまった。レポートからは【「キャリア探究」はこれからの自分のことを考えるととても大切な活動だと思うし、このようなことを高校時代に行うことは大切なことだと思った。しかし、これまで以上に答えが一つとは限らない活動だし、その答えが果たして正しいのかも分からないとても難しい活動だと思った】、【３年間の活動を通して課題を見つけ、解決する力を育むとともに、「キャリア探究」では、自分についても知ることができたと思う。ただし、課題を解決する力というものは、高校生で身につくようなものではないということも痛感した】などと、探究活動を進めていくことで、「課題解決力」を身につけることの難しさを体感している意見が見られた。満足度を高めるために実感値をあげるような仕掛けも必要かもしれないが、このように謙虚かつ実直に評価する力も大切ではないかと感じた。

ⅵ　資質⑥「表現・発信力」

アンケートの結果からは 55.7%の生徒が「表現・発信力」の向上を実感しているという結果がでた。なお、レポートには、【探究活動を通して学んだことは「自分の考えを伝えることの大切さ」だ。これまで人前で話すことは苦手だったが、この活動を通して少しは慣れてきたように思う】など「表

現・発信力」について触れられているものは多く、【自分の未来について積極的に、徹底的に考えぬいた人の発表には、「おお！」と心動かされた。話すのが上手とか下手とかではない思いの持つ力を感じることができた】などという意見も見られた。

vii　資質⑦「主体性」

アンケートからは 39.6%の生徒が向上を実感しているという結果が出ており、８つの資質の中で最も低い数値にとどまった。しかし、レポートからは【「キャリア探究」は自分の興味を持っていることに取り組むことができたので、これまでの探究活動よりも積極的に取り組むことができた。また、最終発表で発表した人たちのキャリアにとても刺激を受けた】や、【私は看護師になりたいという夢を持っていたが、正直この「キャリア探究」に取り組むまでは、ただなりたいという気持ちしかなく、安易に考えていたように思う。他の看護志望の人たちの発表から、なぜ看護師になりたいのか、どのような科で患者さんと関わりたいのかなどと突き詰めて考える機会を持つことができたように思う。きっと働き出してもこのように自ら突き詰めて考えるという姿勢を持っていることは大切だと感じた】などと、アンケートの結果以上にポジティブな意見が目立った。

viii　資質⑧「多様性受容力」

アンケートからは 62.7%の生徒が向上を実感しており、８つの資質の中でも 2 番目に実感値が高いという結果がでている。【みんなの夢や目標を聞くことのできた「キャリア探究」からはとてもいい刺激をもらった。当たり前だけど、同じ学校に通っていても、将来なりたいものは一人ひとり違う。同じ職業だったとしても、目指す姿は同じではない。だから、社会のレベルで考えれば、色々な考え方をする人がいるということだと思う。これから、より社会との距離感が近くなるが、自らと近い気持ちのよい場所ばかりにいてはいけないなと感じた】、【「キャリア探究」は一人での活動なので、とても気楽だった。高１や高２の時はメンバーの中に人任せにする人がいて大変だったからだ。しかし、他者の存在は気付きを与えてくれるとも思う。「キャリア探究」では、自らのキャリアを考える上で、他者から自分になかった考え方や視点という気付きを与えてもらった。今後は他者を通して自分を高めるだけでなく、他者を高めることのできるような関わりをしていくようにしていきたい】、【今回コロナウイルスで世界が大きく変わるタイミングに直面したことで探究活動に取り組むことの意義を改めて感じた。感染の拡大をとめることを優先するのか、それとも経済活動を優先するのか。また、感染を防ぐために防止策をしっかりとるのか、それとも、大丈夫と思い、旅行等に気楽にいくのかなどと様々な考え方や行動がある。規模は小さいけれど、私たちのやっていることも同じことだと思う。探究活動では「多様性」という言葉をたくさん聞いたが、色んな人の立場や考え方などを尊重することは本当に大切なことだとこの活動が終わって気付いた】など、生徒たちの内面や考え方がしっかりと成長しているが確認できるコメントが多数見られた。

ix　その他の資質

本開発単位終了後のアンケートで「『キャリア探究』の活動を通して、向上したと感じる能力で上記に含まれていないものがあれば教えてください」という項目を実施した。以下に主なものを記載する。

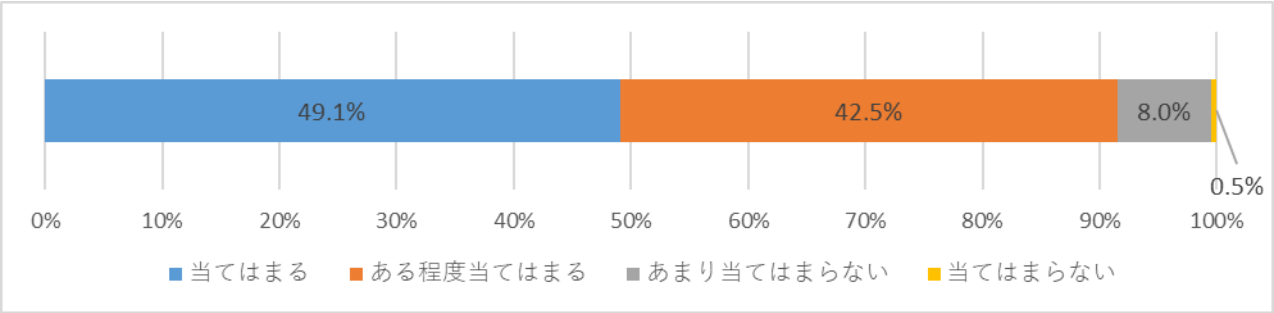
・自らを理解する力
・未来を想像する力
・新しい仕事を創造する力
・他人の夢に耳を傾け、学ぶ力
・社会のことを知る力
・未来や将来を真剣に考える力
・一つのことに徹底的に取り組む力

8　事後アンケートの集約

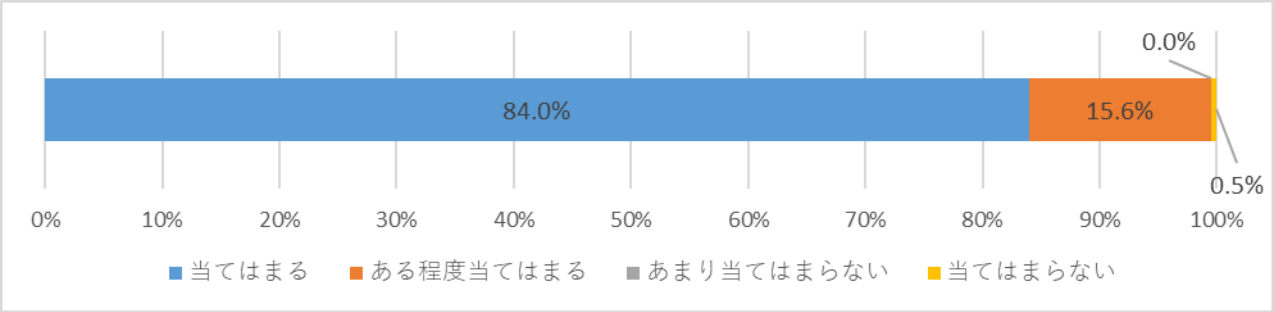
本開発単位の終了後に、学びの効果を測定するためアンケートを実施した。上記に含まれなかった項目を以下にまとめる。

〇質問項目

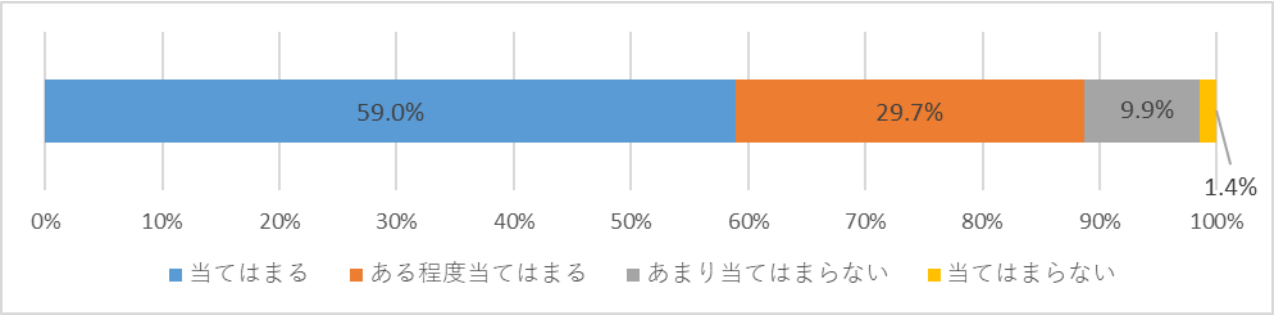
①３年間における全ての探究活動を通して、将来「（自らが生活する）地域」で地域の未来のために貢献したいという思いが強くなった。



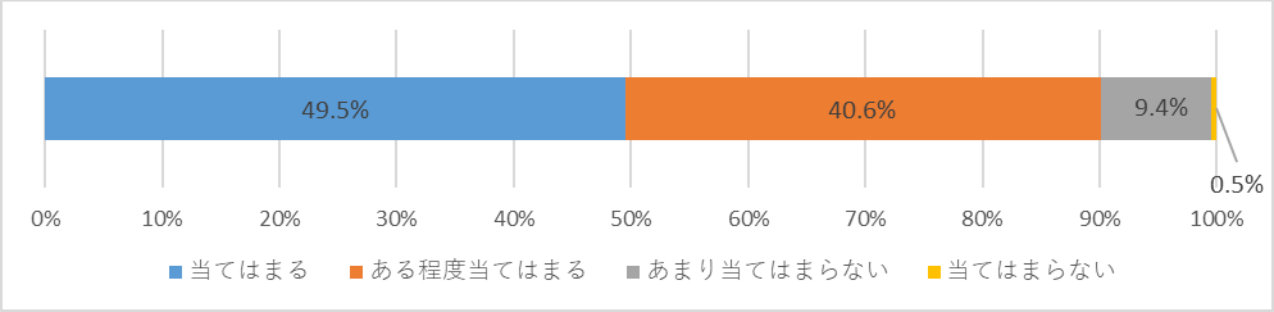
②３年間における全ての探究活動を通して、これからの社会を生きていく上では、「答えが一つとは限らない課題」と向き合っていく必要があると感じるようになった。



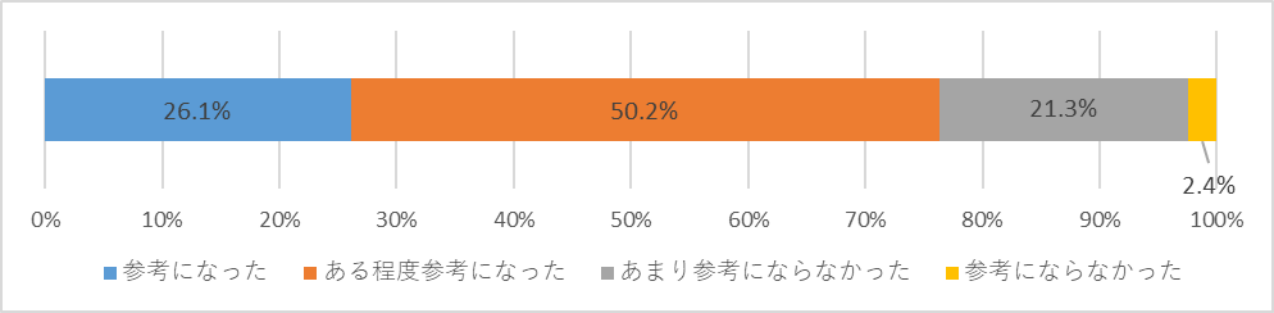
③３年間における全ての探究活動を通して、英語を学ぶことの重要性を感じるようになった。



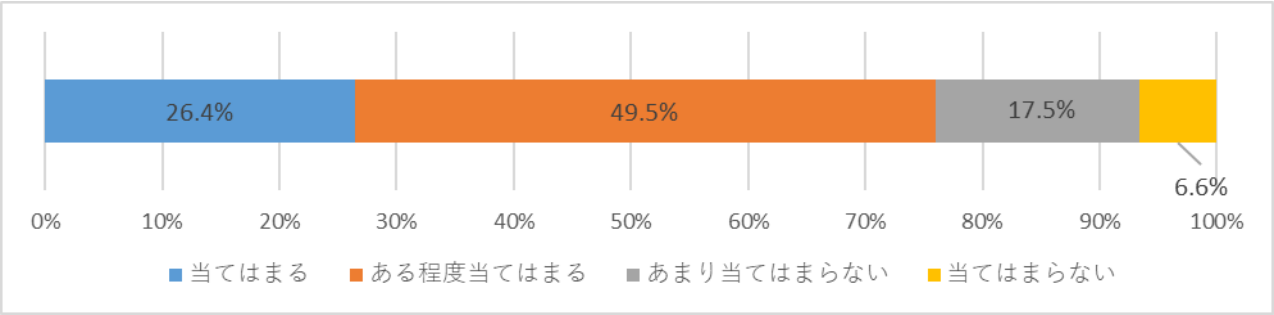
④３年間における全ての探究活動を通して、地域の課題と世界の課題とは関連していると感じるようになった。



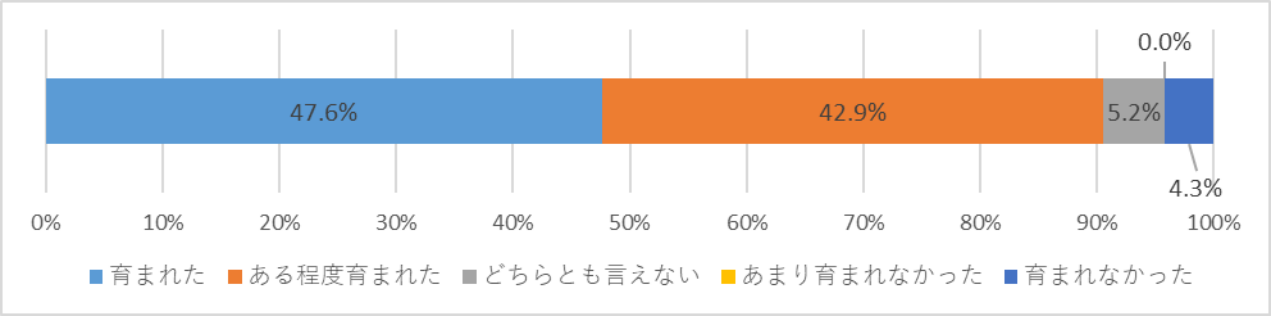
⑤３年間における全ての探究活動を通して、以前よりも計画を立てて行動できるようになった。



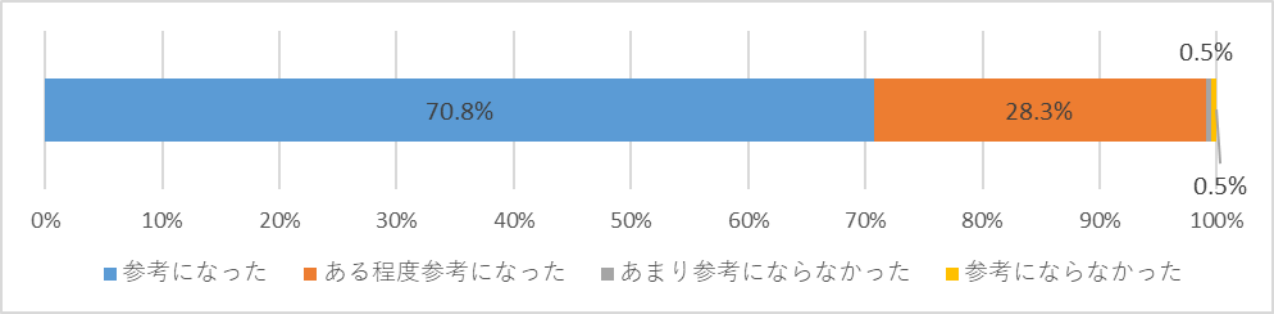
⑥３年間における全ての探究活動を通して、自分には良いところがあると感じることができるようになった。



⑦「キャリア探究」の活動を通して、今後自らの可能性を主体的に発揮して、よりよい社会の構築とともに、幸福な人生の創り手となっていきたいという意識が育まれた。



⑧　「キャリア探究」を通して、様々な立場の人の、様々なキャリアに関する話を聞いた経験は、今後の自らのキャリアを考えていく上で参考になった。



9　提出レポートからの気付き　※３年間の活動を振り返った視点も含まれている

ｉ　本事業が生徒に与えたプラスの効果について

生徒のレポートからは、本事業を通して、生徒たちが様々な学びを実感していることが分かった。【「地域協働事業」は大変だったけど、得るものも多い活動だと思う。自分の中で最も印象深いのは「グローバル探究」でフィールドワークに行ったことだ。発達障害を抱える子供を支援している施設を訪問したが、インターネットや本からは得ることのない「衝撃」を感じた。学校の学びで心が震えるという経験を初めてしたので、忘れることができない】と「体験の重要性」を、また、【「地域協働事業」を通して多くの力が身についたと思うが、特に感じるのは、コミュニケーション能力だ。これからの人生の中で多くの困難などと向き合わなければならないと思うが、その時に「人に頼る能力」はとても大切になると思う。一人で抱えこんでしまうことで事態をさらに悪くしてしまうこともあると思うので、私はメンバーの人に「頼る」ことを学べたことも大きな成果だと感じた】と常に先頭に立って人を引っ張っていくことの重要性が強調されがちな本事業の学びにおいて、新たな視点を提供されたように感じている。

また、資質の育成とは関係しないが、【先生以外の大人の本音のようなものに触れることができたのが貴重な体験だったと思う。数名ではあるが、私たちを一人の人間として尊重した上で、本音で話してくださっていると感じた方がいた。そのような大人の方と話をすることができたことがうれしいし、自分もそんな大人になりたいと思った】と述べている生徒がいた。本事業の申請書の中で、本気の大人との「絆」が地域の将来を担う責任感を醸成するという意見を述べたが、それを証明することができたように感じている。

ⅱ　本事業に対する生徒の批判的な意見について

もちろん、全ての生徒が本事業に対してポジティブなわけではなく、批判的な意見も述べられている。以下に、主なものを３つ挙げておく。

a　本事業の負担の多さ

・【「地域協働事業」は大切だとは思うが、とにかく時間が足りない。普段の宿題などがあることを分かっているのだろうかと思う。また、提出までの設定にそもそも無理があると思う】

・【確保されている時間が少ないので、どうしても放課後などを使うことになる。高１の時は、クラスを越えての活動だったので、メンバー間との調整も大変だし、もう少し配慮してほしい】

b　内向的な生徒

・【自分にとってこの活動がどれほど苦痛だったかは伝えておきたい。全ての人が人前で発表ができると思わないでほしい】

c　実現可能性の乏しさ

・【たとえ自分たちなりに考えても、どうせそのアイディアが採用されて実現されることなどない。もちろん自分たちの視点に及ばない部分はあると思うが、そもそも大人が採用しようと思っているように感じられない】

実際に対応することが難しいものもあるが、できる限りの配慮はしながら最終年度の運営をしていきたいと考えている。

10　本年度の課題

本事業の 1 期生となる現高校２年生の次年度本格実施に向けてのプレ活動としての位置づけであったが、新型コロナウイルスの多大な影響を受け、本来想定していた活動を実施することができなかった。しかし、次年度も新型コロナウイルスの影響を配慮しながらの活動になるであろうと推測されるため、今年度の運営における課題を改善することが次年度の運営にもつながっていくと判断する。

ⅰ　キャリアプランニングにおける客観的測定テストの反映不足

キャリアプランニングを行うにあたり、「自分を知る」という活動の一環として、リクルートの「適性診断」、河合塾「学びみらい PASS」を実施し、客観的に自己理解を行った。それらの結果は、生徒たちにとって意外性などを伴うものであり、注目度は高かった。しかし、発表の際にその結果を反映していると思われる例は非常に少なかった。次年度はワークシートを用いるなどして、キャリアプランニングにより反映するような仕掛けを加えたい。

ⅱ　人生を見通したキャリアプランニングの実施への告知不足

本開発単位のオリエンテーション動画では、人生を見通したキャリアプランニングの実施を呼びかけた。しかし、実際の発表では、社会の変容の予測等に触れたものは多数見られたものの、高校３年生で進路を確定する段階にあるという背景も関係し、どうしても「将来の仕事」のみを扱った発表が目立つこととなった。生徒たちは開発単位Ⅱにおける「女性」分野の成果を通して、現代社会の中で女性が自由に生きていくことの難しさを学んでおり、その課題を人生の中でいかにクリアしていくかという視点を盛り込ませたいという意図があったが、その部分には課題が残った。

ⅲ　発表会の形式について

キャリアの似た生徒で編成するシャッフル発表会、自クラスで発表するクラス内発表会、各クラスから選抜された代表者による最終発表会という３段階の発表形式は、他者の発表から新たな視点を提供され、刺激を受けるなどの効果が見られ、こちらの意図通りのものとなった。しかし、新型コロナウイルスの影響を受け、最終発表会を対面型の口頭発表形式で実施することができなかった。高校３年生は、すでに発表の経験も多く、また代表者による発表ということもあり、最終的に、Zoom を用い、各 HR 教室に配信するという形を採用したが、まだ学校としても発表を配信するという経験がなく、発表者が一方的に発表するだけになってしまい、質疑応答を行うことができなかった。発表会が終了してから感じたことであるが、開発単位Ⅰ・Ⅱの動画による発表形式と異なり、リアルタイムでの配信という形式をとっていただけに、瞬間的な受け答えの能力を磨く機会を放棄したことには悔いが残る。

ⅳ　客観的かつ適切な評価活動の実施

これは、開発単位ⅠからⅢの全てで共通する課題となった。人間関係もある程度成立している高校３年生ではあるが、前述したように、「他者への配慮」からルーブリック評価表を用いて「客観的かつ適切な」評価ができたとは言いがたい。

また、本開発単位は、個人による探究活動となるため、探究の経緯等については他者評価を行いにくい。リーブリック評価表の全ての項目で他者評価を行うことには限界があると感じており、対応を考えたい。

11　「キャリア探究」プレゼンテーション資料（一部）

男女共同参画社会とは？

「男女が、社会の対等な構成員として、自らの意思によって社会のあらゆる分野における活動に参画する機会が確保され、もって男女が均等に政治的、経済的、社会的及び文化的利益を享受することができ、かつ、共に責任を担うべき社会」

男女共同参画社会基本法
平成１１年６月２３日公布・施行

Japan

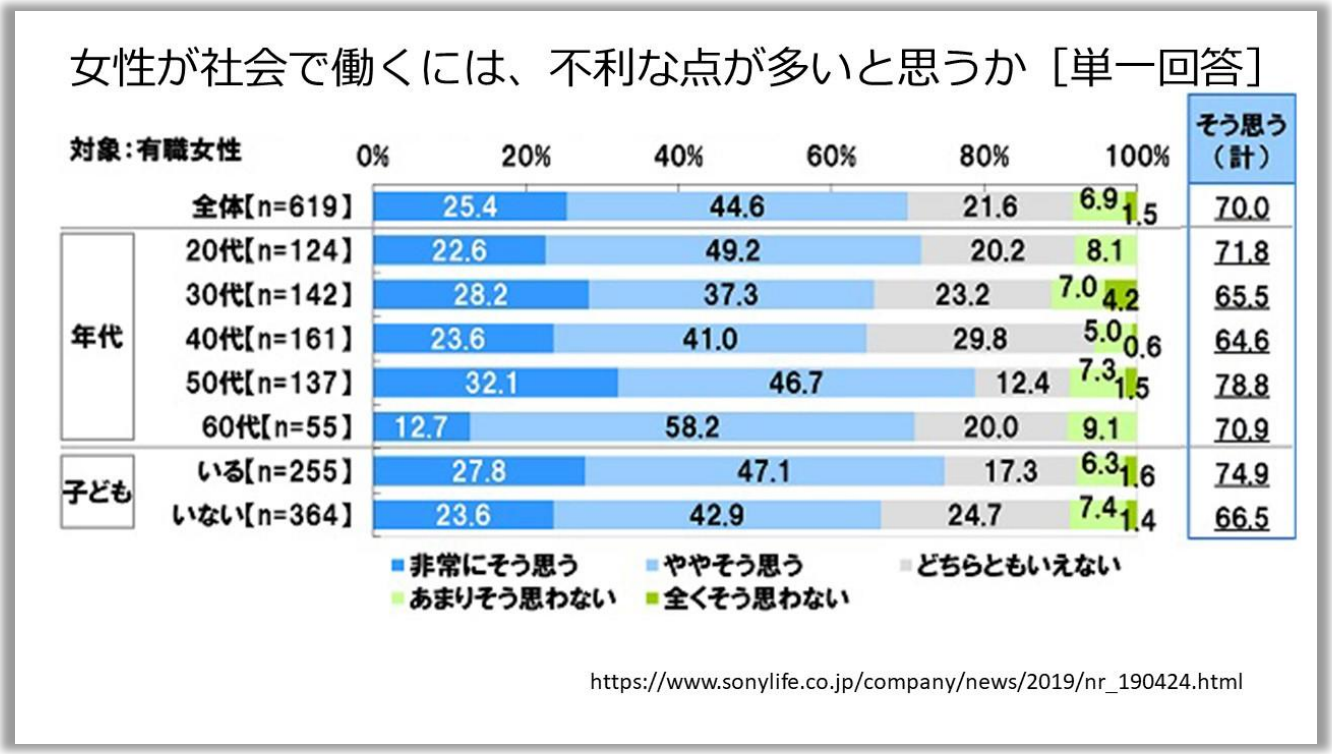
rank (out of 153 countries): 121
score (0.00=imparity, 1.00=parity): 0.652

	2006 score		2020 score	
Global Gender Gap Index	**80**	**0.645**	**121**	**0.652**
Economic participation and opportunity	83	0.545	115	0.598
Educational attainment	60	0.986	91	0.983
Health and survival	1	0.980	40	0.979
Political empowerment	83	0.067	144	0.049

WEF『Global Gender Gap Report 2020』

2020年度ジェンダーギャップ指数のランキングで日本は
153か国中121位

年齢別の年収推移
男性
女性
男女計平均
平均年収（万円）
800
600
400
200
0
162
114
284
249
404
326
470
315
528
314
581
319
635
313
682
322
686
298
537
242
410
211
382
206
19以下
20～24
25～29
30～34
35～39
40～44
45～49
50～54
55～59
60～64
65～69
70以上
年齢
Career Picks
2020/08/08現在　https://career-picks.com/average-salary/nensyu-nenrei/

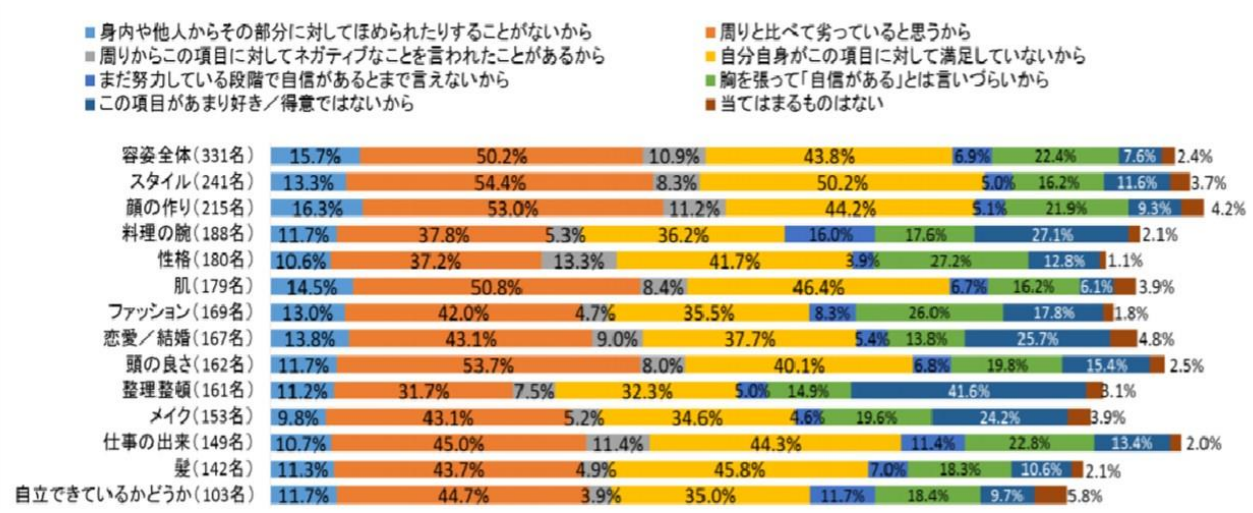

女性が社会で働くには、不利な点が多いと思うか［単一回答］
対象：有職女性
0%
20%
40%
60%
80%
100%
そう思う（計）
全体【n=619】 25.4 44.6 21.6 6.9 1.5 70.0
年代
20代【n=124】 22.6 49.2 20.2 8.1 71.8
30代【n=142】 28.2 37.3 23.2 7.0 4.2 65.5
40代【n=161】 23.6 41.0 29.8 5.0 0.6 64.6
50代【n=137】 32.1 46.7 12.4 7.3 1.5 78.8
60代【n=55】 12.7 58.2 20.0 9.1 70.9
子ども
いる【n=255】 27.8 47.1 17.3 6.3 1.6 74.9
いない【n=364】 23.6 42.9 24.7 7.4 1.4 66.5
非常にそう思う
ややそう思う
どちらともいえない
あまりそう思わない
全くそう思わない
https://www.sonylife.co.jp/company/news/2019/nr_190424.html

全ての女性がポジティブに生きることが
出来る社会を作りたい！

人がポジティブに生きるには・・・

➡ 自分に自信を持つことが必要

自信が持てない理由



https://news.livedoor.com/article/detail/10017165/

パーソナルケア商品とは

化粧品

洗剤

医薬品

今の化粧品の問題点

・良いものほど値段が高い

・年を取るごとに厚塗りしなければならない

・化粧を落とせば元の顔に戻ってしまう

外見を今よりよくすること・若さを保つことへの関心（全体/単一回答）

Q.あなたは、自分の髪型・顔・体型などの "外見"を今よりよくすること・若さを保つことに対してどの程度関心がありますか。

(%)

			関心がある・計				関心がある・計			
			とても関心がある	やや関心がある	あまり関心がない	関心がない	2016年下期 (n=6600)	2017年下期 (n=6600)	2018年下期 (n=6600)	2018年下期 2017年下期との差(pt)
女性全体		(n=6600)	32.5	48.4	13.6	5.5	76.4	80.8	80.9	0.1
女性年代別	15~19歳	(n= 600)	55.3	33.5	7.0	4.2	81.3	87.8	88.8	1.0
	20代	(n=1200)	45.9	41.9	6.7	5.5	79.4	86.3	87.8	1.5
	30代	(n=1200)	34.8	48.2	11.5	5.6	78.7	82.7	82.9	0.2
	40代	(n=1200)	27.3	51.5	15.4	5.8	73.5	79.3	78.8	-0.5
	50代	(n=1200)	25.1	50.1	19.3	5.6	73.9	76.8	75.2	-1.6
	60代	(n=1200)	17.9	57.9	18.7	5.5	74.2	75.4	75.8	0.4
参考	70代	(n= 600)	19.1	55.4	20.6	4.9	69.3	73.2	74.5	1.3

http://hba.beauty.hotpepper.jp/
「15～69歳男女の美容意識と美容行動」より

外見をよくすること・若さを保つことが難しいと思う理由（全体/複数回答）

Q.自分の髪型・顔・体型などの "外見"をよくすること・若さを保つことが難しいと思う理由について、あてはまるものをお選びください。

	女性全体				
	2018年下期 (n=6600)	2016年下期 (n=6600)	2017年下期 (n=6600)	2018年下期 (n=6600)	2018年下期 2017年下期との差(pt)
加齢による衰えがあるので	44.1	35.2	39.0	44.1	5.1
対処やケアをするためのお金がない	43.0	37.3	40.4	43.0	2.6
対策やケアが長続きしないタイプなので	26.8	22.4	26.9	26.8	-0.1
効果がある商品が見つからない	22.4	19.7	20.1	22.4	2.3
対処やケアをするための時間がない	21.0	18.2	20.6	21.0	0.4
どういうお店や施設、商品で対処やケアをしたらいいかが分からない	16.2	15.8	16.5	16.2	-0.3
悩みが大きいので	12.5	10.6	12.4	12.5	0.1
お店や施設、商品などで対処やケアをしても効果が出そうもない	12.0	10.8	9.9	12.0	2.1
理想が高すぎるので	10.5	9.3	11.2	10.5	-0.7
効果があるサロンなどのお店や施設が見つからない	8.1	6.6	7.8	8.1	0.3
周囲に相談に乗ってくれる人がいない	4.2	4.3	4.4	4.2	-0.2
その他	1.2	1.3	1.3	1.2	-0.1
そもそも関心がない	9.6	17.2	11.3	9.6	-1.7

http://hba.beauty.hotpepper.jp/
「15～69歳男女の美容意識と美容行動」より

まとめ

女性は仕事において不利と感じることがたくさんある

↓

ポジティブに考えることで不利と感じなくなるのではないか？

↓

ポジティブになるには自分に自信をもつ（美しくなる）ことが必要

ミッション

真の美を持つ輝く女性を増やす

キャリア探究

高3C31番　松下千夏

環境問題について考えたことはありますか？

fishingjapan.jp

newecologist.com

travelvoice.jp

環境問題に関わる仕事がしたい

①高2グローバル探究（SGH）

電子廃棄物問題をミミズを用いて解決しよう！

・SDGsや世界の環境問題を詳しく調べ、メンバーと話し合う機会
・環境問題を解決する難しさ
・多くの視点から解決策が考えられる面白さ

②カンボジア研修

ゴミ山の見学に行ったこと

③映画「不都合な真実」

元アメリカ副大統領アル・ゴアが**地球温暖化**について語るドキュメンタリー映画

環境問題を直視しない**政府の姿勢を批判**、自然環境を意識した**生活スタイルの重要性**を訴える

https://yahoo.jp/bLTqbR

自分は

どう関わっていくのか？

・環境を考えた技術や製品の研究・開発

・環境コンサルタント

環境を考えた技術や製品の研究・開発

https://yahoo.jp/ce5K9A

https://yahoo.jp/_atuG8

LCA（ライフ・サイクル・アセスメント）

すべてが
エコにつながる
モノづくりを

環境コンサルタントとは…

企業などに対して、環境保全に関する
提案やアドバイスをする専門家

身につけるべきスキル

①環境学、化学、生物学などの専門的な知識

②課題発見力

③コミュニケーション能力

④問題に取り組む強い意志

そのためには…

今はこういったスキルを身につけることのできる大学に進学できるように全力で勉強する！

大学で自分がどのような分野でどのように取り組んでいきたいのかを明確にする！

私のミッション

何らかの形で環境問題に関わり、
環境改善に貢献し、社会の環境問題への
意識を高めていくきっかけになること

④　**開発単位Ⅱ「グローバル探究」**（現高校１年生対象　※本来は１月開始予定）

1　目的

「②開発単位Ⅱ『グローバル探究」１目的」と同じ。

2　内容

「②開発単位Ⅱ『グローバル探究』２内容」と同じ。

3　期待される成果

「②開発単位Ⅱ『グローバル探究』３期待される成果」と同じ。

4　概要（実践）

ⅰ　今年度実施内容

学期	回	月日	コマ数	内容	実施
3	①	2月1日（月）	1	「グローバル探究」ガイダンス動画の配信 ・内容説明およびルーブリック評価表の配布	変更実施
	②	2月8日（月）	2	「グローバル探究」分野選択講義１ ・「女性」「環境」分野　※オンライン	変更実施
	③	2月17日（月）	2	「グローバル探究」分野選択講義２ ・「福祉」「教育」分野　※オンライン	変更実施
	④	2月中旬	1	地域協働事業（グローカル型）特別講演 ・運営指導委員の先生による講演	中止
		3月15日（月）	1	動画による講演（運営指導委員　平山様、渡邊様）	変更実施
	－	3月中旬	2	地域協働事業（グローカル型）コンソーシアム特別講演 ・主催国際ソロプチミスト和歌山紀ノ川様	開催辞退

ⅱ　担当講師

教育　：　和歌山信愛大学教育学部子ども教育学科　辻伸幸先生

福祉　：　日本赤十字社和歌山医療センター

外傷救急部/外科医/国際医療救援登録要員/国際人道法普及担当　益田充先生

女性　：　一般社団法人「女性と地域活性推進機構（WAO)」代表理事　堀内智子先生

環境　：　徳島大学　環境防災センター学術研究員　松重摩耶先生

5　新型コロナウイルスの影響

本開発単位は 2021 年の 1 月開始予定であり、学校としても新型コロナウイルスの感染防止を踏まえた上で探究活動を実施することができるようになった時期ではあったが、開発単位Ⅰ「リージョン探究」の延長により、約１か月遅れのスタートとなった。また、分野選択の講義は４名の講師先生のうち２名が他府県在住ということもあり、Google Meet を用いたオンライン形式で実施をした。また、運営指導委員会やコンソーシアム主催の特別講演に関しては、運営指導委員の２名の先生が首都圏在住であることから動画による配信に、コンソーシアム参加機関である国際ソロプチミスト和歌山紀ノ

川様主催による講演はメンバーの方に高齢者が多いことから開催辞退となった。

6　評価

ⅰ　評価方法

「②開発単位Ⅱ『グローバル探究』8評価、ⅰ評価方法」と同じとするが、今後変更することも考えられる。

ⅱ　ルーブリック評価表

「②開発単位Ⅱ『グローバル探究』8評価、ⅱルーブリック評価表」の（表1）および（表2）を用いる。

7　現状報告

本開発単位は、「リージョン探究」を終了した本事業2期生となる高校1年生が行っているプログラムである。各担当講師は1期生である高校2年生の担当と変更なく、2度目の取り組みとなるため、新型コロナウイルスへの対策としてオンラインでの分野選択講義を依頼したにも関わらず、昨年度よりもスムーズな形で実施してくださったように思う。

また、本来ならば対面型で実施していた運営指導委員の先生方による講演も動画となったが、それぞれの先生方の人間的な魅力によって、生徒の探究学習に対するモチベーションを大きく向上させることに成功している。

現在、生徒たちはワークシートを用いながら、分野の選択および課題設定活動を行っている。次年度、新クラスになった段階で、分野の選択、グループの編成、探究課題の設定を経て、本開発単位の探究活動を再開することになっている。

⑤　**開発単位Ⅲ「キャリア探究」**（現高校２年生対象　※本来は１月開始予定）

1　目的

「③開発単位Ⅲ『キャリア探究』１目的」と同じ。

2　内容

「③開発単位Ⅲ『キャリア探究』２内容」と同じ。

3　期待される成果

「③開発単位Ⅲ『キャリア探究』３期待される成果」と同じ。

4　新型コロナウイルスの影響

本開発単位は 2021 年の１月開始予定であり、本学としても新型コロナウイルスの感染防止への対策を行った上で、探究活動を実施することができるようになった時期ではあったが、開発単位Ⅱ「グローバル探究」の延長により、約１か月遅れのスタートとなった。そのため、本来なら「キャリア探究」の導入として活用していたナレッジキャピタル主催の「未来の“私の”仕事を考える」への応募が締め切り期日の関係もあり、「グローバル探究」の最終発表を前に応募することとなってしまった。補足の説明は行ったものの、生徒たちとすれば「グローバル探究」が終了していないのにという思いの中での応募となってしまい、昨年度よりも連動性に欠けてしまったように思い、それは残念なことであった。

また、「④開発単位Ⅱ『グローバル探究』５新型コロナウイルスの影響」でも述べた通り、運営指導委員の特別講演が動画形式に、コンソーシアム参加機関による特別講演は開催辞退となっている。

5　概要（実践）

ⅰ　今年度実施内容

学期	回	月日	コマ数	内容	実施
冬休み	－	－	－	冬休みの課題として「一般社団法人ナレッジキャピタル主催『未来の“私の”仕事を考える』」への応募	通常実施
3	①	2月8日（月）	1	「キャリア探究」ガイダンス動画の配信 ・内容説明およびルーブリック評価表の配布	変更実施
	②	３月8日（月）	2	リクルート進学辞典付録「適性診断」の実施	通常実施
	③	2月中旬	1	地域協働事業（グローカル型）特別講演 ・運営指導委員の先生による講演	中止
		3月15日（月）	1	動画による講演（運営指導委員　平山様、渡邊様）	変更実施
	－	3月中旬	2	地域協働事業（グローカル型）コンソーシアム特別講演 ・主催国際ソロプチミスト和歌山紀ノ川様	開催辞退

ⅱ　担当講師

本開発単位は各個人による探究活動のため、講師は設定しない。高校３年生に所属する教育改革推進事業運営チームの３名の教員を中心として、学年に所属する全ての教員が運営、指導にあたる。

6　評価

ⅰ　評価方法

「③開発単位Ⅲ『キャリア探究』6 ⅰ評価方法」に準じるが、昨年度プレ学年として高校３年生で実施した「キャリア探究」では、個人活動のため相互評価を行いにくいという課題が残った。発表において相互評価を実施することはできるが、リフレクションの際には自己評価のみで行った方がよいのではないかと考えており、今後改善する予定である。

ⅱ　ルーブリック評価表

「③開発単位Ⅲ『キャリア探究』6 ⅱルーブリック評価表」の（表１）および（表２）に準じるが、「ⅰ評価方法」で述べた通り、昨年度のプレ実施の際に相互評価が難しかったこともあり、発表用ルーブリック、リフレクション用ルーブリックの２種類を改善したいと考えている。

7　現状報告

本開発単位は、「グローバル探究」を終了した本事業１期生となる高校２年生が行っているプログラムである。新型コロナウイルスの影響によって、昨年度と比較すると展開がスムーズになっておらず、今後の修正の必要性を感じている。

また、運営指導委員の先生方やコンソーシアム参加機関主催の講演会の登壇者など生徒たちにとってロールモデルとなるような方々に、講演の中で自らのキャリアに触れていただくことで、自らのキャリアプランニングに役立てさせたいという意図があったが、時間的にも制約のある動画による配信形式となってしまったことで、講演者のキャリアにまで話が及ばなかった。そのため、生徒たちのキャリアプランニングにおいて有機的な繋がりをもたせることができなかったと感じている。

現在、生徒たちは「適性診断」による客観的な自己分析の結果を待ちながら、自らのミッションやキャリアと向き合っている。次年度になった段階で、様々なワークシートやジェネリックスキル測定テストを通して、より具体的なキャリアプランニングを行っていく予定である。

⑥　開発単位Ⅳ　各教科による「ミニ探究」授業開発

1　目的

開発単位ⅠからⅢが本事業の「主」の活動であるならば、本開発単位は、生徒たちにとってその主を補い、さらに発展させるための「副」の活動となる。開発単位ⅠからⅢにおける学びと「ミニ探究」の学びを相互に連携させながら、生徒たちを「生涯に渡って探究を深めていく未来の創り手」へと成長させることを目的とする。

また、本事業の 3 年間の指定が終了した翌年の 2022 年度は新学習指導要領が高等学校において年次進行で実施される初年度となる。この段階においてカリキュラムマネジメントおよび探究学習において地域の学校を牽引できるような存在となることを目指す。

なお、社会が変化することによって、社会から求められる能力も変化している現状において、生徒にチャレンジを求めながら、教員は何もしないという状況では生徒たちにとって説得力がない。教員も新たな学びに向けてチャレンジしているという姿を生徒たちに見せることで、生徒たちの本事業に取り組むモチベーションも向上すると考えている。

2　内容

本学に勤務する全ての専任教諭が、本事業との関わりを考慮した上で、創意工夫のもと探究の要素を含んだ授業を年間に 1 つ開発・実践する。なお、その授業は公開形式とし、校務支援システム上で全教職員に告知し、指導案・資料等を共有する。さらに、授業の実施後は、教科会議において評価・改善を行い教材化する。

また、これらの成果を教科主任で構成されるカリキュラム検討会議において、「Key Girl」として育成したい生徒の資質・能力を踏まえた上で、いつどの段階でどの「ミニ探究」授業を実施するのが効果的かという観点をもって、本学独自の年間カリキュラム作成へと繋げていく。

3　期待される成果

「Key Girl」の資質　…　②・③・④・⑤・⑥・⑦

4　今年度実施状況

今年度は、新型コロナウイルスの感染拡大防止措置に伴う休校によって、本開発単位を実施することができなかった。なぜなら、休校期間における生徒たちの学びの確保や、再びの休校に備えた体制作りが優先されたためである。オンライン教育の推進のため「Classi」や「G Suite for Education」、ロイロノートなどが次々と導入され、教員たちは、それらを効果的に休校中の学習や再開後の授業に落とし込むための対応に追われることとなった。そのため、今年度に関しては、本開発単位の実施を一旦凍結し、オンライン教育への対応を優先することとした。

5　カリキュラム作成

昨年度に実施した「ミニ探究」授業を踏まえ、カリキュラム検討委員会において、継続して 2022 年度より運用する本学独自のカリキュラムを作成している。

6　成果

今年度は実施していないため、特に報告すべき成果はない。

7　次年度への課題

本年度以降における再びの休校措置にも対応できる体制の構築のために、本学の教員全体がこの一年で ICT 環境および機器を活用することができるようになった。そのため、最終年度ともなる次年度は再び「ミニ探究」授業の開発を再開する。

⑦　2020 年度研究成果発表会

1　目的

本学が、本事業への申請を行ったのは、本学の生徒にこれからの社会で必要な能力をいかにして身につけるかという問いに対するチャレンジの延長線上から生じたものであるが、それと同時に「地域の未来」に対する貢献という思いも存在している。近年和歌山県の県庁所在地である和歌山市には複数の大学が開学し、状況は明らかに変化しつつあるものの、和歌山県の大学進学者の 9 割が他府県に流出するという現象が 30 年も続いたという厳しい現実は、地域の未来を明るく照らすものとなるはずがない。そこで、本学の取り組みを少しでも早く地域の学校、地域の方々に見ていただき、地域の未来のために協働できないかと考え、最終年度となる 2021 年度に研究成果発表会を開催予定であったが、それを 2 年前倒しし、2019 年度から実施することにした。

また、本学生徒に関しては、外部の方々の前で発表するという貴重な機会を提供するとともに、学年を越えた発表の機会を持つことで、高校 1 年生、2 年生がともに刺激を受ける機会となることも期待した。

2　内容

今年度 12 月に実施した「リージョン探究」および「グローバル探究」の各最終発表会の中で、評価の高かった優秀班を選び、運営指導委員の先生方だけでなく、公開形式として、地域の学校、地域の方々へ参加を呼びかけた上で実施する。また、最後に運営指導委員の先生方より講評をいただく。

3　新型コロナウイルスの影響

今年度を締めくくる段階となった現時点では、今年度も研究成果発表会を実施しておくべきであったと後悔する部分もあるが、年度当初の段階では、体育館という閉鎖的な空間に高校生 500 名を集めるということで、新型コロナウイルスを爆発的に感染拡大させる恐れがあり、また保護者からの理解を得ることが難しいであろうと考え、研究成果発表会を中止とした。指定最終年度となる次年度は、まもなく完成となる和歌山城ホールを使い、座席の間隔をあけるなどの配慮を行った上で、地域の方々や学校などに告知を行い、本事業の成果を発信するとともに、2022 年度からの新学習指導要領の中でも重要と位置付けられる「探究学習」において、地域の学校を牽引する存在となりたいと考えている。

4　次年度への課題

i　新型コロナウイルスへの対応

何よりも注意すべきはこの項目であるだろう。マスクの着用はもちろんのこと、使用者ごとにマイクの消毒を行うことや発表者の前にアクリルボードを設置すること、参加者には座席の間隔をあけて着席させることなど、With コロナの時代における安全な運営を確立した上で実施をするべきであると考えている。

ii　活発な質疑応答の実施

これは昨年度の研究成果発表会を踏まえての課題である。昨年度の研究成果発表会では一人の生徒が口火を切るまで質問が全く出なかった。さらに、今年度は、新型コロナウイルス感染防止のために撮影した動画を視聴するという形の発表が大半となり、質疑応答を実施することができていない。次年度の発表の際には、Google Meet 等を用いてリアルタイムでの発表を取り入れていくことを考えている。また、高校 2 年生までが個人で iPad を所有することになるため、チャット機能を活用し

て質問を実施する予定である。

これによって、質問に対して瞬時に応答することのできる力を育成し、研究成果発表会でも活発な質疑応答に繋げたいと考えている。

ⅲ 地域への普及について

これも昨年度の研究成果発表会における課題である。昨年度、学校ＨＰやテレビ、新聞などの媒体による告知や、県内の各種学校および全国の本事業採択校に案内を送付するなどの手段を用いて研究成果発表会への参加を呼びかけたが、こちらが望むほどの来場者を得ることができなかった。次年度も新型コロナウイルスの影響を考えると、多くの人に来場いただけるとは思えない。

そこで、発表の様子を班ごとに分けて動画撮影し、YouTube で限定配信するなどして、地域の方々が視聴することができるような環境を整えたいと考えている。

⑧　その他の取り組みについて

A　海外研修（カンボジア）

1　目的

本事業におけるリーダー養成研修的な位置づけとして実施する。カンボジアの地方都市カンポットでの教育支援活動のお手伝いや、カンボジアで活動する日本の方々からのインタビューを中心とし、日本では味わうことのできない非日常の体験が詰まった本研修を通して、「Key Girl」の資質のみならず、1 人の人間として大きく成長するような機会を提供することを目的とする。

2　研修概要

ⅰ 日程　：　冬期休暇（12 月下旬）の 6 泊 7 日（機内泊 1 日を含む）

ⅱ 研修場所　：　カンボジア（プノンペン・カンポット・シェムリアップ）

ⅲ 研修参加者　：　高校 2 年生 10 名

ⅳ 引率　：　教諭　2 名

3　研修参加者選抜方法

ⅰ 公募　：　1 学期末試験後に海外研修説明会を実施。

ⅱ 提出書類　：　参加申込書、同意書、志望理由書 (800 字以上)、英語力を証明する書類 (写し)。

ⅲ 選考方法　：　「総合的な探究の時間」における活動実績、志望理由書、英語力を総合して、校長・副校長・教頭を含む教育改革推進事業運営委員会にて選考。

4　事前研修

ⅰ　調べ学習

研修参加者で相談のもと、カンボジアに関しての調べ学習を実施する。保護者同伴のもとで実施する海外研修説明会で発表・共有。

なお、これまで「クメール語」、「カンボジアの歴史」、「カンボジアと日本との関係」、「カンボジアの教育環境」、「カンボジアの農業」、「カンボジアの産業」「アンコールワットについて」などのテーマで調べ学習を実施している。

ⅱ　現地高校生との事前交流

2019 年度の海外研修より、本学の海外交流アドバイザーである現地のシスターの紹介により、現地カトリック校である聖フランシスコ高等学校の生徒と Facebook に付随する「Messenger」アプリを用いて、オンラインによる事前交流を、英語を使用言語にして 2 週間に 1 回行った。これにより現地校を訪問した際にスムーズな交流が可能となり、非常によい方法であったと感じている。

ⅲ　現地小学校における特別授業の準備

海外交流アドバイザーである現地のシスターは、本学の経営母体である「ショファイユの幼きイエ

ズス修道会」のカンポット共同体に所属しており、周辺の村々にも幼稚園や小学校を建設、運営している。そこで、研修訪問時にはカンボジアの学校では実施することが難しい授業を 50 分×2 コマ実施してほしいとの依頼を受けている。そのため、参加生徒たちは事前に現地の教育環境を調査し、現地で実施することが難しい実験等の授業や日本の文化を伝えるような授業を実践している。

ⅳ　募金活動の実施

現地では、子どもたちの教育環境をよりよいものにしたいと切望しながらも、金銭面の不足で実現できていないという現状がある。そのため、体育祭等の機会を利用し、保護者などを対象に募金活動を実施している。

ⅴ　未使用文具の回収・配布活動

前項と同様、現地で学ぶ子どもたちには、鉛筆やノート、消しゴムといった当たり前の文具が不足している。そのため、各家庭で使われないまま眠っている未使用文具を回収する活動を行い、現地に届けるという活動を行っている。子供たちとの交流の最後にそれらの文具を子供たちに配布しているが、目を輝かせながら我先にと文具を求める子供たちの姿から生徒たちは多くのことを感じ取り、考える機会となっている。

5　今年度の実施について（新型コロナウイルスの影響を含む）

多くの生徒が実施を心待ちにしていたということもあり、10 月末日まで実施の可能性を模索した。しかし、カンボジアへの入国基準の高さおよび帰国後の待機期間など多くのハードルがあったこと、また保護者の理解を得ることが難しく、生徒の健康面の安全を保障できないことから中止の決定を行った。

なお、教員のみが訪問し、現地で動画等を作成し、オンライン海外研修の実施も考えたが、教員の入国も非常に難しく断念した。

6　次年度の実施について

次年度も今年度同様、新型コロナウイルスの影響により実施には多くの困難が立ちはだかるだろうと推測している。本学の渡航時期は冬期休暇中であるため、ワクチンの接種や効果の有無、渡航へのハードルなどを鑑みながら 10 月を目途に実施の可否を決定したいと考えている。

なお、本学の海外交流アドバイザーである Happy Smile Tour の伊東邦将氏との相談の上、次年度渡航が難しい場合は、動画とオンラインを組み合わせたオンラインカンボジア研修を何とか実施したいと考えている。

B　合同カンボジア研修研究会（オンライン）

1　目的

同じカンボジアをフィールドに海外研修を実施している高等学校が一堂に会し、それぞれの学校のカンボジアにおける学びを共有し新たな気づきを得たり、学校を越えたネットワークを構築したりするきっかけの場とするとともに、今後の探究学習に対する意欲の向上や深化を目指す。

2　幹事校

和歌山信愛中学校高等学校（本学）

3　参加校

昭和女子大学付属昭和中学校・高等学校（地域協働事業グローカル型）
啓明学園中学校・高等学校（ＳＧＨアソシエイト校）
岡山学芸館高等学校（地域協働事業グローカル型事業特例校、ＳＧＨⅡ期校）
広島女学院中学高等学校（WWＬコンソーシアム構築支援事業 事業連携校、ＳＧＨＩ期校）

4　新型コロナウイルスの影響

本学だけではなく、今年度は全ての参加校が海外研修を中止しており、本研究会に参加した生徒の大半がカンボジアに渡航できていない。

また、例年であれば幹事校の所在地にある研修施設において、1 泊 2 日の日程で本研究会を実施していたが、今年度は新型コロナウイルスの感染拡大防止の観点から、生徒の移動を避けるべきであると判断し、本研究会をオンラインで実施した。

5　日程

2021 年 1 月 9 日（土）

第 1 部　全体会　　14:00　～　16:30
第 2 部　生徒交流会　17:00　～　17:30

6　各校参加者数

本学　　高校 2 年生 6 名、教職員 6 名
昭和女子　高校 2 年生 4 名、高校 1 年生 4 名、教職員 3 名
啓明学園　高校 3 年生 1 名、高校 2 年生 2 名、高校 1 年生 4 名、教職員 1 名
岡山学芸館　高校 2 年生 7 名、教職員 1 名
広島女学院　高校 2 年生 6 名、教職員 1 名　　【合計 46 名】

7　オンライントークセッション登壇者およびモデレーター

登壇者　　山勢　拓弥　様　（一般社団法人 Kumae 代表理事）
　　内田　隆太　様　（任意団体 Share the Wind 代表）
　　古川　沙樹　様　（NPO 法人サンタピアップ代表）
モデレーター　伊東　邦将　様　（Happy Smile Tour CEO、本学海外交流アドバイザー）

8　内容

月　日	時刻	内　容
2021年1月9日（土）	13:55	接続開始
	14:00	全体会開会、幹事校校長挨拶、諸連絡
	14:10	各校自校紹介　※終了後切断
	14:25	再接続
	14:30	オンライントークセッション 　ディスカッションテーマ提示後切断
	15:15	自校内ディスカッション
	15:40	再接続
	15:45	ディスカッション内容の発表・共有 登壇者講評
	16:30	全体会閉会
	16:55	接続開始
	17:00	生徒交流会開会、幹事校生徒挨拶
	17:05	交流開始 　トークルーム①「進路・将来について」 　トークルーム②「探究活動について」 　トークルーム③「コロナ禍で学んだこと」
	17:30	閉会

9　成果

本学も含め、今年度実際にカンボジアに渡航できないという環境のもとで最大限の学びを、またこれまで継続して実施してきた本研究会を途絶えさせないという思いで、今年度本学が幹事校として本研究会を開催した。もちろん、例年のようにカンボジアを訪問し、大きな衝撃をすでに味わっている各校の生徒たちが、他校の生徒との協働活動を通して、さらなる化学反応を起こし、思考力・表現力などが大きく向上する例年の本研究会の成果には及ぶべくもないが、現地の邦人社会起業家によるトークセッションなどを通して、気づきや学びを提供することができたと感じている。

10　次年度に向けて

次年度も新型コロナウイルスの多大な影響が考えられるため、オンラインによる実施の可能性も十分あるが、各参加校からはこれまで実施したことのない和歌山で本研究会を開催してほしいという声が強く、次年度も本学が幹事校として、本研究会を継続させることが決定している。なお、次年度はカンボジアをフィールドとして海外研修を行う他の高校に声をかけるなどして新規参加校を増やしたいとも考えている。

C　「Glocal High School Meetings 2021（全国高等学校グローカル探究オンライン発表会）」へ協力校としての参加

1　目的

地域協働事業（グローカル型）指定校の高校生が日頃取り組んでいる「グローバルな視点をもって地域課題の解決に挑む提言や実践」を日本語や英語で発表することにより、研究成果を発信・共有する場を設け、ふだん直接交流する機会が少ない全国の高校生が一堂に会して新たな気付きを得たり、ネットワークを構築したりして、今後のグローカル探究の深化や意欲の向上を図る。

2　主催　　文部科学省指定グローカル型地域協働推進校探究成果発表委員会

3　共催　　文部科学省

4　幹事校　名古屋石田学園星城中学校・高等学校

4　協力校　九里学園高等学校、昭和女子大学附属昭和中学校・高等学校、本学

5　参加校　全国の地域協働事業（グローカル型）指定校・事業特例校・アソシエイト校

6　日程および内容　オンライン発表会　2021 年 1 月 30 日（土）

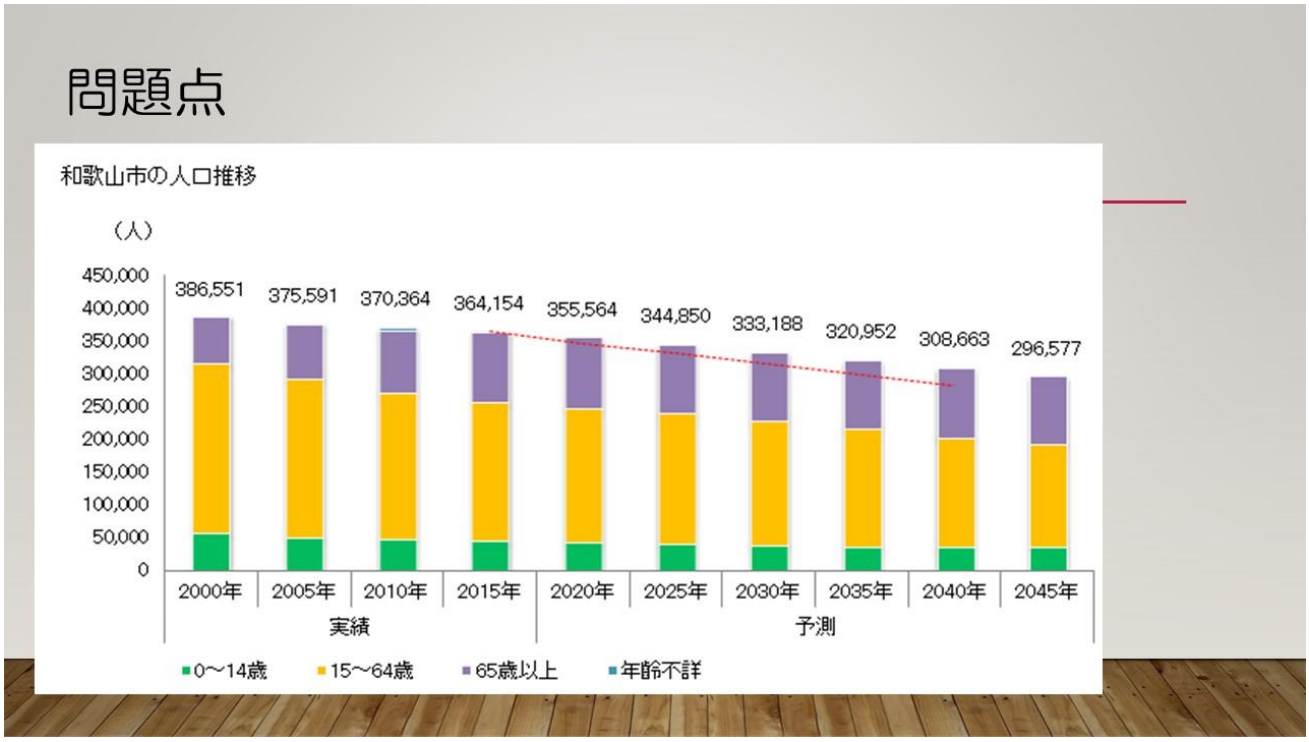
10:00　大会委員長挨拶
10:05　文部科学省代表挨拶
10:10　審査委員長挨拶
10:15　（グループごとに）参加校 1 分間紹介リレー
10:50　表彰校による発表（英語部門・日本語部門）
11:20　審査委員長総評
11:40　閉会

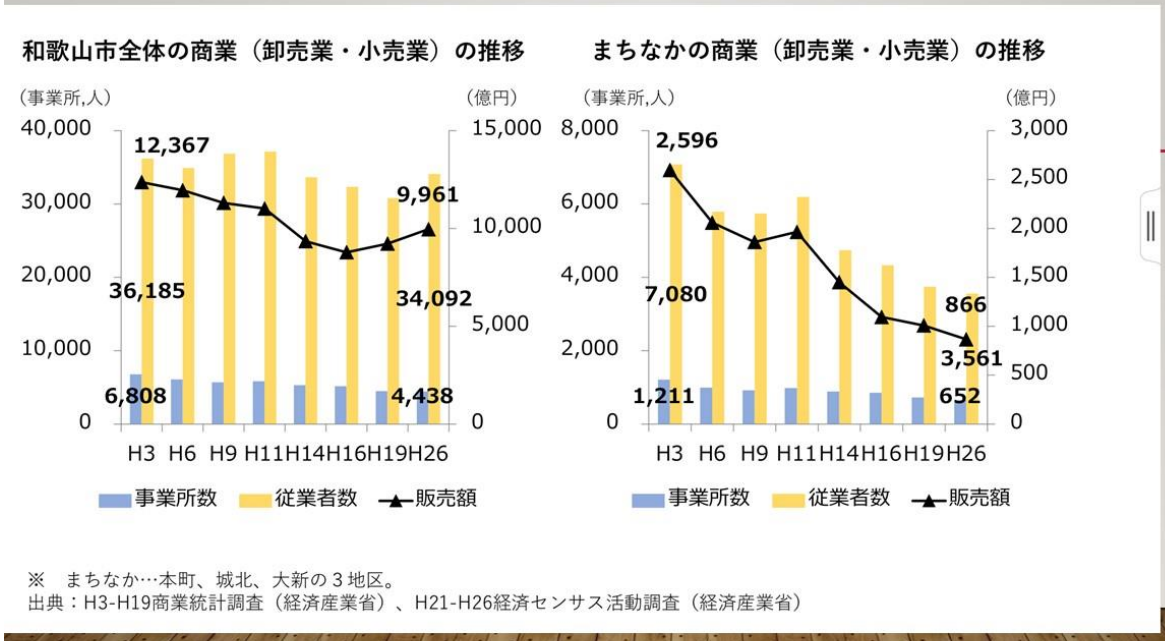
7　本学参加生徒

高校１年生　５名（日本語部門発表５名、うちＣグループ日本語部門司会２名を含む）
高校２年生　３名（英語部門発表１名、Ｃグループ英語部門司会２名）

８　発表用ＰＰＴ資料

【日本語部門】





ぶらくり丁とは？

創設１８０年の歴史

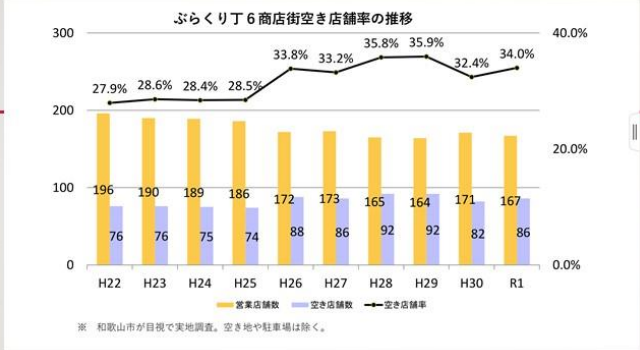
かつては大阪市以南

最大の繁華街！

今と昔のぶらくり丁

問題点

- 人が少ない
- 暗くて雰囲気が悪い
- 高齢者が多い



そこで私たちが考えたテーマは

「若者が気軽に利用するには」

解決策

「和歌山市×済州島」

解決方法①

世界中に影響を与えているもの

・韓国のグルメ

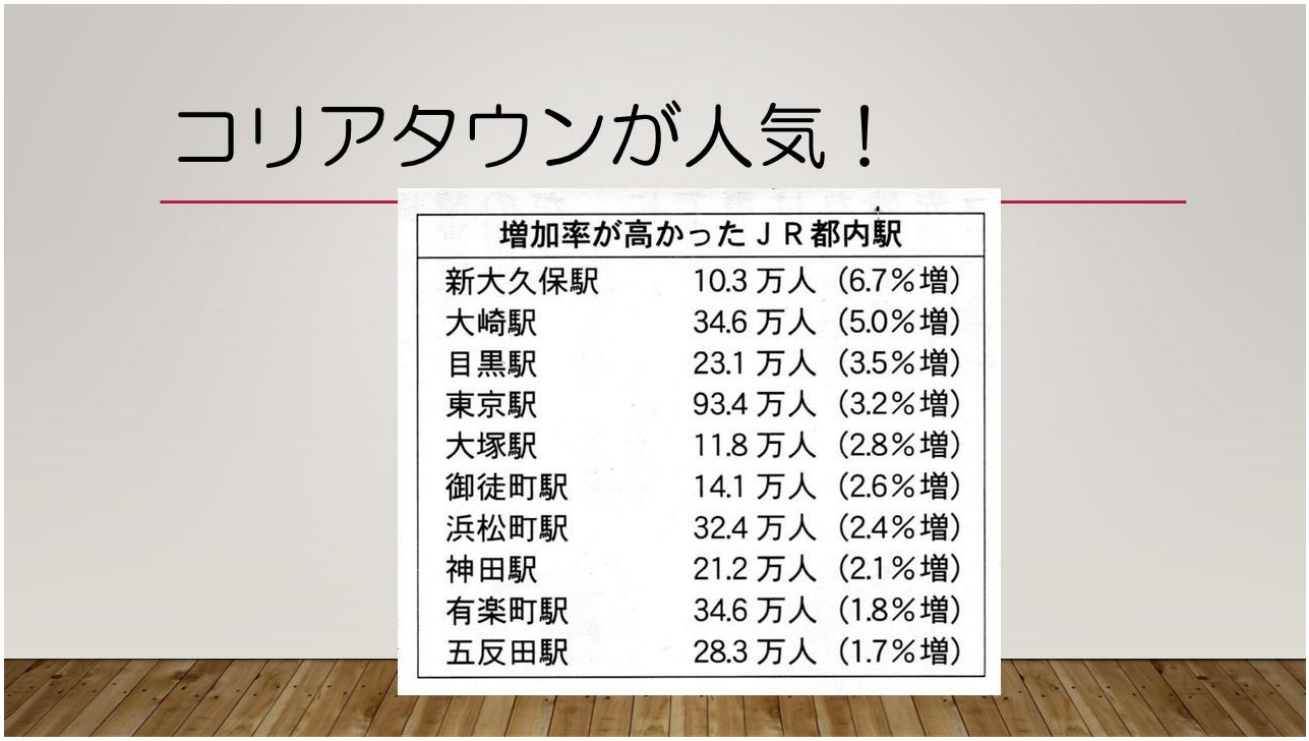
ファッション

コスメ

アイドル

第４次韓流ブーム　到来！
グルメ編

韓国コスメ
innisfree
No-Sebum
Mineral Powder
with Jeju natural mineral and
natural originated mint
Net Wt. 0.17 Oz. / 5 g
3CE
STYLENANDA
ETUDE
HOUSE



増加率が高かったＪＲ都内駅	
新大久保駅	10.3 万人（6.7％増）
大崎駅	34.6 万人（5.0％増）
目黒駅	23.1 万人（3.5％増）
東京駅	93.4 万人（3.2％増）
大塚駅	11.8 万人（2.8％増）
御徒町駅	14.1 万人（2.6％増）
浜松町駅	32.4 万人（2.4％増）
神田駅	21.2 万人（2.1％増）
有楽町駅	34.6 万人（1.8％増）
五反田駅	28.3 万人（1.7％増）

なぜ済州島なのか？

- １９８７年から和歌山市と姉妹都市を結んでいる。
- 日本からも人気の観光地！
- 自然が豊かできれいなビーチが人気

解決方法②

流行はどんどん変わり、今のぶらくり丁のようにいつか風化してしまう

↓

活気を失う

↓

元通りのぶらくり丁に戻る

↓

長期的に流行させる

解決策②

・常に新しいものを取り入れる
・期間限定のものを作る
・SNSでの情報発信

対策

・食べ歩きをなくし、飲食スペースを作る
・空き店舗を利用する

↓

空き店舗を減少させることにつながりコロナ感染を気にせず飲食することができる！

【英語部門】

Sustainable Fashion Is NOT a Trend

Miyu Uno

What is SUSTAINABLE FASHION?

A. it is made with materials and methods that can sustain nature.

Sustainable materials

Sustainable methods

Why sustainable fashion is being made?

A. It has been revealed that the fashion industry is causing a lot of problems because of the fast fashion craze.

Environmental Damage in the Fashion Industry

- WATER

The fashion industry is the second most water-consuming industry in the world.

For example, it takes about 7,600 liters of water to make a pair of jeans.

7,600 liters of water =8cups of water /day ×10 years

When making clothes with animal fur, a very harmful chemical called sodium is used when processing fur.

Sodium flowing from factories into rivers causes water pollution.

Welfare issues in the fashion industry

In India, factory people working in factories during the treatment of fur are barefoot dealing with toxic sodium

In Bangladesh, an eight-story commercial building called Rana Plaza collapsed due to sloppy safety management to keep workers working in poor conditions with low wages.

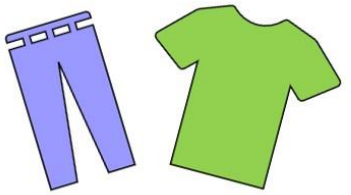
Problems posed by FAST FASHION

The fashion consumption cycle has been shortened by the great leap forward of fast fashion and the expansion of SNS.

The production volume of apparel products increased rapidly as accompanied by the trend of such an era.

The accumulation of production lines, incineration due to inventory overruns, versatile disposal of sales, disposal of remaining goods for sale, etc. are also placed above the list price as prices, leading to a squeeze on workers' wages.

There is no doubt that this is unhealthy, both environmentally and in business models.



FAST FASHION

Price
+
On top of that, there's a lot of cost.

Sustainable Brands 1

- ***Stella McCartney***

More than 50% of items sold use recycled materials.
In addition, leather and fur are never used for other things.
In 2013, for example, we unveiled a new nappa leather-style material that uses more than 50% vegetable oil as eco-friendly artificial leather.
Since 2010, PVC (polyvinyl chloride) leather, which is concerned about environmental hormones, has not been fully used.

Falabella Series

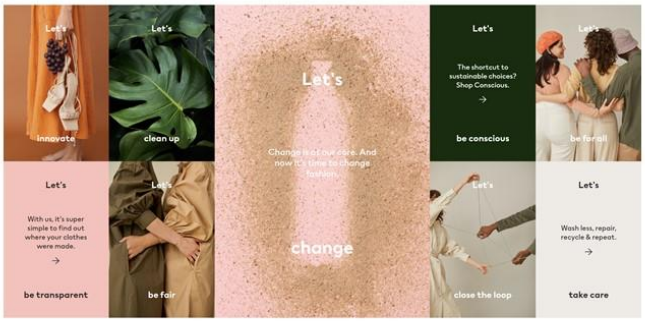
The Farabella bag series has been an icon of the brand since its inception in 2010.

Sustainable Brands 2

- ***H&M***

Conscious Collection

It uses "Piñatex", an alternative material for natural leather made from cellulose fibers extracted from pineapple leaves, "Orange Fiber", which has a silk texture recycled from citrus juice byproducts, and "BloomForm", a plant-derived and flexible firing material.



Sustainable Brands 3

- *ZARA*

JOIN LIFE

Released in 2015. Zara's commitment to sustainability aimed at delivering ethical and responsible products.

CARE FOR FIBRE...Use more sustainable raw materials such as organic cotton, tencelTM, lyocells and recycled fibres

CARE FOR WATER...Clothing manufactured with technology that reduces water consumption in the manufacturing process.

CARE FOR PLANET...The use of clothing made using processes that reduce CO2 emissions and chemical products in the manufacturing process.

Clothing Care

Caring for your clothes is caring for the environment.

The purpose of this Clothing Care Guide is to help you extend the lifespan of your clothing and to reduce the environmental impact of care processes. Follow this guide to minimize clothing wear and tear and to reduce the amount of water and energy used when washing, drying and caring for your clothes.

#JOINLIFE

10.
Accessories Care

Simple actions such as cleaning your acc
cloth or soft brush can help you care for fibre
impact. Whenever possible, look for eco-fri

Reuse of clothes

MERCARI

Apps that can use flea markets on your smartphone.

Sustainability

Circulate our limited resources to help society thrive

Mercari is taking on initiatives in the following 5 areas as part of our continued efforts to achieve a more abundant society.

Read more

"Sustainable Fashion Show" to be held at Mercari Tokyo office in Roppongi Hills to promote sustainable consumption in line with "Green Friday"

Green Friday.. A movement to counter Black Friday, which originated in the United States, and promote sustainable consumption. It is spread mainly in Europe, with some areas holding unwanted clothing replacements around the same time as Black Friday, as well as workshops to repair and reuse broken objects.

Solutions

I thought more people needed to know about sustainable fashion initiatives.

In particular, I thought that young people who will be responsible for the preservation of the global environment in the future should know that.

So as a solution, we need to teach about sustainable fashion in the school education curriculum and know about it ourself.

For example, I think that it is good to add indigo dyeing experience to the curriculum of the elementary school.

Through the indigo dyeing experience, you can learn that indigo dyeing is a Japanese tradition that is naturally derived and is good for the environment.

If you have knowledge about environmental issues and environmental destruction, I think more people will be able to make sustainable choices in their daily lives, even if there is no epidemic.

9　成果

英語部門・日本語部門ともに表彰を受けることはできなかったが、協力校としてグループ内の司会を担当したこともあり、参加した生徒は多くの刺激をうけた。事後のアンケートやレポートでは８名全ての生徒が「参加してよかった」と回答し、【他の学校の方々はとても堂々としており、自分たちとの差を感じた。金賞を受賞した学校の発表はすばらしく圧倒された。また、英語部門の発表の発音がなめらかですてきだなと感じた。これまで英語は苦手で避けていたが、あんな風に話せるようになりたいと感じ、これから頑張っていきたいと感じた】などと、今後の探究学習や英語の学習に対してモチベーションがあがったと述べている。一部の生徒しか参加することはできなかったが、コロナ禍において、他校の生徒と交流するという非日常の体験が生徒にとって非常に貴重なものであるということを確認することができた。

10 次年度への課題

ⅰ　協力校として

連絡協議会等の機会を通して構築された地域協働事業（グローカル型）指定校の横のつながりによって本学も協力校３校の中の１校として、本発表会の運営に携わった。しかし、実質は星城中学校・高等学校の先生方の尽力によるもので、ほとんど協力することができていない。次年度も協力校として参加してほしいとの依頼を受けているため、今年度の経験をもとに星城中学校・高等学校の先生方の負担を少なくするような関わりをしていきたいと考えている。

ⅱ　生徒の課題

昨年度の「全国高校生フォーラム」の経験を踏まえ、今年度の全国レベルの発表会においては、昨年度以上の成果を披露したいと考えていた。しかし、新型コロナウイルスの影響によって、自由な活動を行うことができず、例年よりも深い探究活動を行うことができなかったように思う。そのような中で、他校はコロナ禍においても深い探究活動を実現させていたことに驚きを感じている。これまでは、「積極性」や「表現力」という部分での見劣りが気になったが、今年度は「探究の深さ」の違いを感じている。次年度は環境や時間を言い訳にせず、生徒たちが深い探究活動を行うことができるようにサポートしていきたいと感じている。

D　「京都大学ポスターセッション 2020」への参加

1　目的

研究発表（ポスターセッション）を通じて、高校生が日ごろの課題探究活動の成果を府県や学校の枠を越えて披露し、その後の自らの探究心および知的創造力のさらなる向上を目指していく。

2　主催　　京都大学

3　開催日　　令和 3 年 3 月 20 日（土・祝）～21 日（日）　各日　9:00　～　21:00

4　参加生徒　京都大学が指定する高等学校および中等教育学校後期課程に在籍する生徒
※　本学高校 2 年生　3 名

5　発表要旨　　「やさしい egg 殻」

i　はじめに　～ 本探究活動の背景 ～

発展途上国においては、現在もなお「栄養失調による死亡率の増加」が解決すべき社会問題として認知され続けている。実際、5 歳以下の子どもの 55%が十分な栄養を摂取することができず、幼い命が失われている。

ii　目的

発展途上国の貧困問題に対し、「食」の観点からアプローチを行うことができる仕組みを確立する。とりわけ、南アフリカ（実際、多くの人々の栄養が不足している）などの食文化に適した方法を提案する。

iii　方法と結果

私たちの日常生活において、最も身近に存在する卵の殻、すなわち「卵殻」の有用性に着目した。卵殻は 95%が炭酸カルシウムで構成されており、「カルシウムの宝庫」と呼ばれるほど栄養価が高く、高血圧や糖尿病、動脈硬化などといった病気の予防に一定の効果が期待できる。また、作物を栽培する際の肥料としても再利用することが可能である。しかし、卵殻にはサルモネラ菌などの雑菌が多く含まれているため、調理するにあたって十分な注意を要する。今回、私たちの探究活動では現地の食生活で実際に食べられている食材（主にイモ類）の「ヤムイモ」という料理に雑菌処理をした卵殻を混ぜるという調理を試みた。

結果、味には支障は出なかったものの、卵殻特有の固い食感を完全に消去することはできなかった。ある程度の予想はできていたが、人工的に卵殻を粉末状にして食材に混合させるには限界が生じた。（一方、クッキーに混合させるとヤムイモとは異なり卵殻特有の食感が認められなかった。）

iv　今後の展望

卵殻は取り扱いにさえ注意すれば、調理に用いて相対的に摂取できる栄養価を高めることが可能であることがわかった。しかし、卵殻は調理そのものに手間がかかり、現地（発展途上国）の食文化に適した形に加工して輸送する仕組みの確立も困難であり、この点が課題として残る。

キューピー株式会社でも似たような取り組みが行われており、余った卵殻膜を化粧品の原料や食品の原料として活用されている。

まずは身近なところから、例えば家庭内ゴミの回収と同様に、家庭内で余った卵殻を回収するための「卵殻回収日」を全地域で設け、一箇所に集約できる仕組みを作っていきたい。私たちの小さな行動から、世界中で貧困に苦しむ人々が減り、健康で人間らしい生活ができるようになることを願っている。

v　参考文献

https://www.unicef.or.jp/special/10sum/5th_birth.htmlhttps://calorie.slism.jp/102026/ 日本ユニセフ協会

https://cucanshozai.com/2017/02/eating-eggshell.html　卵の殻を食べる健康効果と適切な調理方法

https://www.hungerfree.net/hunger/background/special21_1/　アフリカの多様な食文化と飢餓

https://www.kewpie.co.jp/mayonnaise/tips/efficient-use.html　キューピー株式会社

6　発表ポスター

7　成果

「グローバル探究」の福祉分野で探究活動を行っていた高校２年生３名が参加した。表彰等を受けることはできなかったものの、普段、学業面で目立つとは言えない生徒たちが自ら参加の意思を表明し、本ポスターセッションにチャレンジしたことには大きな意義を感じている。「グローバル探究」の中間発表の段階で高評価を受けたことがきっかけであったが、そこからメンバーで協力しながら、遅くまで自主的に残って活動している姿を通して、探究学習が生徒に与える影響の大きさを改めて感じることができたように思う。今回の経験は、参加生徒に自信を与え、追求することの充実感を提供する非常に大きな機会となった。本学が京都大学ポスターセッションに参加させていただくことになった経緯は、2019 年度の「全国高校生フォーラム」で楽しそうに発表する本学生徒の姿にある。そういう点でも、探究の質にはまだまだ改善の余地はあるものの、本学らしく参加することができたように思う。

E　英語運用能力向上プロジェクト

1　目的

本事業のグローカル型として、英語力の向上は必須であると考え、「英語運用能力向上プロジェクト」を実施する。すでに本学は地域の中では「英語の信愛」という評価を受けているが、これまでは大学入試で高得点をとるための英語という側面が強かった。そのため、本事業においては、英語の「表現・発信力」の向上を意識し、特に「リスニング」「スピーキング」の 2 技能に注力する。

2　実践

ⅰ　オンライン英会話授業（高校全生徒）

タブレット端末を用い、高等学校の全クラスの生徒が週に 1 コマ、フィリピンとオンラインで接続する「オンライン英会話授業」を、本年度も学校再開後から実施した。

ⅱ　Advanced Communication Program

例年ならば、夏期休暇中に 5 日間、校内にて海外からの留学生などを本学に招き、希望者を対象に短期集中型の語学プログラムを実施していたが、今年度は新型コロナウイルスの感染を拡大させる恐れと、4 月・5 月の休校によって 8 月上旬まで 1 学期を延長、2 学期の開始を 8 月下旬に設定したため、夏期休暇が 10 日程度しかなかったことから、高校 1 年生を対象に実施していた同プログラムを次年度へと延期した。

ⅲ　ニュージーランドおよびカナダの語学研修（希望者）

例年ならば夏期休暇中に実施をしていた同プログラムであるが、前項でも述べた通り、夏期休暇が 10 日しかなかった上に、現地への渡航のめどが立たないこともあり、中止となった。次年度においても現状実施は難しいと考えている。

ⅳ　アジア高校生架け橋プロジェクト 3 期生の受け入れ

前年度に引き続き、ＡＦＳよりアジア高校生架け橋プロジェクト 3 期生として、中国国籍の生徒 1 名の受け入れ打診を受けたが、新型コロナウイルスの影響もあり、学内および保護者からの理解を得ることができなかった。そのため、受け入れを断念した。

ⅴ　トビタテ！留学 JAPAN 高校生コース第 6 期生への応募

新型コロナウイルスの影響によって、4 月 17 日の段階で高校生コース第 6 期生の採用手続が中止となってしまったため、実際に参加することはできなかったが、高校 2 年生の 12 名が応募した。なお、今年度高校 1 年生となった本学の旧中学 3 年生に対しても、例年ならば前年度終わりの段階で生徒たちへの告知を行っていたが、今年度は休校措置による混乱の影響もあり、告知することができなかった。

ⅵ　個人留学

2020 年 2 月より高校 2 年生 1 名が本学の単位交換制度を用い、カナダの Burnaby Central Secondary School に 1 年間の自費留学を実施した。新型コロナウイルスの感染拡大の影響は受けたものの、先日 1 年間に渡る留学を終え、2021 年 2 月より高校 3 年生として本学に復学した。帰国後

の 14 日間の待機期間の影響もあり、今年度の受験は叶わなかったが、海外大学の進学を視野に入れ、現在準備をしている。

vii　今年度の CEFR 達成状況

	高校3年生（n=212）	高校2年生(n=206)	高校1年生（n=228）
B2	10.4%	4.9%	1.3%
B1	48.1%	17.5%	12.7%
A2	37.7%	67.4%	48.2%
A1	3.8%	10.2%	37.7%

F　運営指導委員の先生方による特別動画講演

1　目的

本事業の採択に向け、運営指導委員を引き受けてくださった平山恭子様、渡邊道子様の両名は、以前から本学の教育内容の変革を応援してくださっていた方で、本学の生徒たちにとってロールモデルとなるすばらしい方々である。その方々のお話を伺うことで、1 人の女性として社会でどのように生きていくかということを考えるきっかけや材料を提供することを目的とする。

2　対象生徒

高校 1・2 年生（ただし、今年度は動画での講演となったため、高校 3 年生のためにも動画を作成してくださったため、卒業を控えた高校 3 年生にも動画の URL を告知している）

3　新型コロナウイルスの影響

昨年度は運営指導委員会に参加するため本学を訪れてくださった翌日に講演を実施した。ところが、お二方が首都圏在住ということもあり、今年度はオンラインで運営指導委員会を実施したため、直接生徒の前で話していただく機会をとることはできなかった。しかし、ぜひお二方の言葉を生徒に届けたいと思い、動画による講演を依頼した。本学の探究プログラムの進捗状況に合わせた講演動画を作成いただいたため、YouTube 上に限定配信し、Classi を用いて生徒に告知した。

4　成果

渡邊様は産業能率大学の学生の方にも協力いただき、探究学習の進め方と発表の行い方に関する動画を、平山様は「Key Girl」という本学が育成を目指す姿を念頭に、それぞれの学年における到達度の確認および今後の目標やポイントなどをまとめた動画を学年ごとに作成してくださった。生徒たちは、自主的にそれらの動画を視聴し、今年度の取り組みに対する自らの不足を認知するとともに、次年度の本事業に取り組むモチベーションを大きくアップさせている。

⑨　次年度に向けて

1　高校３年生「キャリア探究」の完全実施

すでに今年度１月のガイダンス動画からスタートしているが、本事業の１期生である新高校３年生を対象に、今年度の高校３年生を対象に実施したプレ活動の「キャリア探究」を来年度は完全実施する。

2　「ミニ探究」および「英語で学ぶ」授業開発の再開

昨年度の末より、新型コロナウイルス感染拡大防止の観点からＩＣＴを用いた教育環境の整備推進を優先するために凍結せざるを得なかった各教科による「ミニ探究」および「英語で学ぶ」授業の開発を再開する。

3　研究成果発表会の実施

当初３年間の指定の最終年度に実施する予定であったが、初年度から前倒しで実施をしている。ただし、今年度は新型コロナウイルスの感染拡大の可能性を鑑み、中止とした。しかし、次年度は指定最終年度ということもあり、外部施設を借りて、研究成果発表会を実施する。

4　「合同カンボジア研修研究会」の実施（幹事校として）

今年度オンライン開催となった全国５校による「合同カンボジア研修研究会」を、今年度同様幹事校として開催する。和歌山の研修宿泊施設にて１泊２日での研修実現を目指すが、新型コロナウイルスの状況によっては、今年度同様オンラインでの開催とする。

5　オンライン型海外研修（カンボジア）の開発

これまで同様、12 月のカンボジア研修の実現に向けて準備を行っていくが、新型コロナウイルスの状況によって実施できない場合は、本学海外交流アドバイザーの伊東邦将氏とともに、オンライン型海外研修（カンボジア）を共同開発する。なお、これは教材化を目指し、将来的には希望する高等学校に販売できるものとする。

6　株式会社マイナビとの探究学習教材の共同開発

次年度から本学コンソーシアムに、株式会社マイナビが新たに参入することがすでに決定している。本学のプログラムとともに、マイナビが開発を進める探究学習教材「locus」のバージョンアップにつなげる。

7　探究学習における ICT 利用のさらなる推進

新型コロナウイルスの感染拡大防止措置に伴う休校によって、本学の教育環境も iPad や Classi の導入を皮切りに ICT 化が進んでいる。探究学習においても対面を避けるために積極的に活用を目指したつもりであったが、他のグローカル型指定校と比較するとまだまだ及んでいない部分があると感じる場面が多かった。次年度は、チャット機能を用いた質疑応答など、さらなる活用を目指していくつもりである。

8　指定後の取り組みについて

次年度は指定最終年度となるが、本事業を継続・発展させていく体制を構築する。

Ⅲ　コンソーシアム運営会議報告

①　第１回コンソーシアム運営会議

1　日時

2020 年 4 月 10 日（金）　17:30　～

※ ただし、コロナウイルス感染拡大防止の観点から中止とした

2　場所

和歌山信愛中学校高等学校　本館３Ｆホール Ａ

3　内容（予定していたもの）

ⅰ　開会

ⅱ　挨拶

ⅲ　協議

・「リージョン探究」についての協議

今年度の課題決定、今年度の予定について

・その他プログラムについて

進捗状況の確認、今年度の予定について

・各種発表会について

情報告知、人員派遣など

ⅳ　次年度の予定

ⅴ　挨拶

ⅵ　閉会

4　対応

新型コロナウイルス感染拡大防止に伴う休校措置による混乱および会議参加予定者の安全を優先し、第 1 回のコンソーシアム運営会議を実施することはできなかった。そのため、メール等を用いて、コンソーシアム参加機関の窓口担当の方と連絡をとり、調整を行った。なお、次回以降の会議をオンラインで実施することとした。

② 第２回コンソーシアム運営会議

1　日時

2020 年 9 月 25 日（金）　17:30　～

2　形式

ビデオ通話アプリ Zoom を用いたオンライン会議

3　コンソーシアム参加機関出席者

和歌山県　…　文化学術課長　島本由美　様

和歌山市　…　和歌山市教育委員会　学校教育課　前田いさ　様

みなべ町　…　うめ課主幹　下浦智久　様

国立大学法人和歌山大学経済学部　…　副学長・経済学部教授　足立基浩　様

公立大学法人和歌山県立医科大学　…　地域医療支援センター　センター長　上野雅巳　様

学校法人和歌山信愛女学院和歌山信愛大学　…　副学長　大山輝光　様

一般社団法人「女性と地域活性推進機構」　…　代表理事　堀内智子　様

国際ソロプチミスト和歌山紀ノ川　…　会長　黒田美智子　様

4　内容

i　開会

ii　挨拶　　学校法人和歌山信愛女学院　理事長

和歌山信愛中学校高等学校　　校長　森田登志子

iii　出席者紹介

iv　進捗状況の報告と協議

・「キャリア探究」

活動および最終発表会の形式（オンライン配信型）の報告

・「リージョン探究」

コロナ禍における活動のさらなる充実と各種発表会の運営方法の提案と協議

・「グローバル探究」

各種発表会の運営方法の提案と協議

・海外研修（カンボジア）

10 月中旬に最終の判断

「合同カンボジア研修研究会」はオンラインでの実施を模索

・「Glocal High School Meetings 2021」

開催のために協力校として参加することを報告

・2020 年度研究成果発表会

開催の可否を協議。中止の決定

v　次回会議の予定

vi　挨拶　　和歌山信愛高等学校　副校長　紙岡智

vii　閉会

③　第３回コンソーシアム運営会議

1　日時

2020 年 11 月 13 日（金）　17:30 ～

2　形式

・ ビデオ通話アプリ Zoom を用いたオンライン会議

・ 2020 年度第１回運営指導委員会と合同開催

※コンソーシアム参加機関と重複している場合は、代表で１名の方が参加

3　内容

「運営指導委員会」の項目にて報告

④　第４回コンソーシアム運営会議

1　日時

2021 年 3 月 17 日（水）　17:30 ～

2　形式

ビデオ通話アプリ Google Meet を用いたオンライン会議

3　コンソーシアム参加機関出席者

和歌山県　…　文化学術課長　島本由美　様

和歌山市　…　和歌山市教育委員会　学校教育課　前田いさ　様

みなべ町　…　うめ課主幹　下浦智久　様

国立大学法人和歌山大学経済学部　…　副学長・経済学部教授　足立基浩　様

公立大学法人和歌山県立医科大学　…　地域医療支援センター　センター長　上野雅巳　様

学校法人和歌山信愛女学院和歌山信愛大学　…　副学長　大山輝光　様

一般社団法人「女性と地域活性推進機構」　…　理事　牛窪篤子　様

国際ソロプチミスト和歌山紀ノ川　…　会長　宮本安津子　様

4　内容

i　開会

ii　挨拶　　学校法人和歌山信愛女学院　理事長

和歌山信愛中学校高等学校　　校長　森田登志子

iii　今年度の成果と進捗状況の報告および協議

・ 成果報告

プレ学年である高校３年生のアンケート等の報告

・ 各プログラムの進捗状況報告

・ With コロナの時代における各プログラムから見えた課題に関する協議

休校期間による実施期間短縮による探究の深さの不足
動画発表による「表現・発信力」の伸び悩み

iv　その他の活動に関する報告
- 合同カンボジア研修研究会
- 「Glocal High School Meetings 2021」
- 運営指導委員による動画講演

v　文部科学省（2 月 15 日）との意見交換報告
- 文部科学省からの意見
  ICT 教育環境整備への評価と更なる活用依頼
  客観的かつ適切なルーブリック評価の実施への期待
  2022 年度へ向け、カリキュラムマネジメントの推進
  コンソーシアム参加機関との更なる連携強化
- 文部科学省からの説明
  高等学校普通科改革について

vi　次年度に向けて
- コンソーシアムへの新規参入機関の紹介
- 探究教材の開発の実施
- 2021 年度「リージョン探究」の提示課題、フィールドワーク先の調整

vii　今後の予定

viii　挨拶　　和歌山信愛中学校高等学校　副校長　紙岡智

ix　閉会

Ⅳ　運営指導委員会報告

①　第１回運営指導委員会

1　日時

2020 年 11 月 13 日（金）　17:30 ～

※第３回コンソーシアム運営会議と合同開催

2　形式

ビデオ通話アプリ Zoom を用いたオンライン会議

3　参加者

和歌山県知事　仁坂吉伸　様（代理出席）
和歌山市教育委員会　教育長　富松淳　様（代理出席）
国立大学法人和歌山大学経済学部　学部長　藤永博　様（代理出席）
公立大学法人和歌山県立医科大学　理事長・学長　宮下和久　様（代理出席）
学校法人和歌山信愛女学院和歌山信愛大学　副学長　大山輝光　様
一般財団法人 Future Skills Project 研究会　事務局長　平山恭子　様
学校法人産業能率大学　入試企画部企画課長　渡邊道子　様
みなべ町　うめ課主幹　下浦智久　様
一般社団法人「女性と地域活性推進機構」　理事　牛窪篤子　様
国際ソロプチミスト和歌山紀ノ川　会長　宮本安津子　様
（推進校）学校法人和歌山信愛女学院　理事長・和歌山信愛中学校高等学校　校長　森田登志子
（推進校）和歌山信愛中学校高等学校　副校長　紙岡智
（推進校）和歌山信愛中学校高等学校　教育改革推進事業運営委員長　大村寛之
（推進校）和歌山信愛中学校高等学校　教育改革推進事業運営チームの教諭 17 名

4　内容

ⅰ　開会
ⅱ　挨拶　学校法人和歌山信愛女学院　理事長
和歌山信愛中学校高等学校　　校長　森田登志子
ⅲ　進捗状況報告　　教育改革推進事業運営委員長　大村寛之
ⅳ　指導および助言
ａ　休校期間の活動について

（委員より）

休校期間にも動画やオンラインを活用して、探究活動をスタートさせたことは評価できる。特に高校３年生の「キャリア探究」は個人での探究学習ということもあり、個人での活動に励んだ様子がうかがわれる。しかし、その取り組みを可視化させるという点に意識が及んでいたのかを伺いたい。

大学では、ワークシートを活用することで、自らの活動の様子を残すようにしている。また、それが探究の様々な場面での振り返りに活用できると認識している。

（推進校より）

本学は今年度より教育プラットフォーム「Classi」を導入した。個人の活動を可視化するという意

識はこれまであまりなかったが、再びの休校措置も考えられるため、ワークシートを作成、配信するなどの対応をとりたい。また、それらのワークシートを「Classi」を通して統合することでグループの探究活動を進めることも可能であると考える。ぜひ前向きに取り組みたい。

b　中間発表動画の視聴を通して

（委員より）

今回の中間発表動画を視聴したが、取り組んでいる生徒は異なるはずなのに、去年の発表で聞いたような内容のものが目立った。大学などでは、過年度と同じ内容を取り扱うと下級生がそれを模倣することが多いため、せめて１年は課題をクーリングオフするようにしている。自由で柔軟な発想を追求していくためにも、そのような工夫を行ってはどうかと感じる。

（推進校より）

研究成果発表会を実施して、高い評価を受けた発表を見る機会があったことも、今回のことに関係しているように感じる。次年度のテーマ設定には今回の指摘を反映させたい。

c　With コロナ時代の探究活動について

（推進校より）

学校再開後も新型コロナウイルス感染防止の観点から様々な活動が制約を受けたり、中止になったりしてしまった。報告を踏まえた上で、指導や助言をお願いしたい。

（委員より）

・大学も前期は遠隔授業が中心だったが、大学生においては、その期間に自らと向かい合った学生が多く、内省が深まったように思う。何が他者と比べて不足しているのかなど、自分と向き合うということも大切な学びであると感じる。
・私たちの大学でも学生主導で行うイベントを実施することができなかった。しかし、本来「学ぶ」ということは楽しいことなので、コロナ禍においても「学び」はあり、「楽しむ」ことはできるはず。不自由の中から見つけられることもあるということを意識させることは大切。実際、推進校の生徒の発表動画を見せてもらったが、調査活動などは十分にできていないかもしれないけれど、動画づくりが大変工夫されていると感じた。探究活動の質という部分とは少し話の方向性が異なるかもしれないが、推進校の生徒が「学び」を楽しんでいることは十分確認できたと思う。
・オンライン海外インターンシップを急遽導入し、それに対して応募する生徒がでなかったという報告があったが、その結果については気にしなくてもいいと思う。推進校の生徒にとって、まだまだ聞きなれないものであり、不安が先に立ったということも十分に考えられる。大切なのは、学校側が守りに入らないこと。文部科学省の指定事業として運営しているので、運営側がどんどんチャレンジしていくことは必要なことだと思う。その姿勢は必ず生徒に伝わるはずだと感じる。

ⅴ　次回会議の予定

ⅵ　挨拶　　和歌山信愛中学校高等学校　副校長　紙岡　智

ⅶ　閉会

② 第 2 回運営指導委員会

1　日時

2021 年 2 月 19 日（金）　17:30　～

2　形式

ビデオ通話アプリ Google Meet を用いたオンライン会議

3　参加者

和歌山県知事　仁坂吉伸　様（代理出席）
和歌山市教育委員会　教育長　富松淳　様（代理出席）
国立大学法人和歌山大学経済学部　学部長　藤永博　様（代理出席）
公立大学法人和歌山県立医科大学　理事長・学長　宮下和久　様（代理出席）
学校法人和歌山信愛女学院和歌山信愛大学　副学長　大山輝光　様
一般財団法人 Future Skills Project 研究会　事務局長　平山恭子　様
学校法人産業能率大学　入試企画部企画課長　渡邊道子　様
（推進校）学校法人和歌山信愛女学院　理事長・和歌山信愛中学校高等学校　校長　森田登志子
（推進校）和歌山信愛中学校高等学校　副校長　紙岡智
（推進校）和歌山信愛中学校高等学校　教育改革推進事業運営委員長　大村寛之
（推進校）和歌山信愛中学校高等学校　教育改革推進事業運営チームの教諭 17 名

4　内容

ⅰ　開会
ⅱ　挨拶　学校法人和歌山信愛女学院　理事長
和歌山信愛中学校高等学校　　校長　森田登志子
ⅲ　進捗状況報告　　教育改革推進事業運営委員長　大村寛之
ⅳ　指導および助言
ａ ルーブリック評価について
（委員より）
文部科学省との意見交換で話題にあがったルーブリック評価の妥当性についてもう少し詳しく説明をお願いしたい。

（推進校より）
ルーブリック評価表を用いて、適切な評価ができていると感じているかという問い合わせがあったため、自らに対しては厳しく、他者に対しては今後の人間関係等を考慮してか甘く評価する傾向があるということを伝えた。それに対し、文部科学省からは、ルーブリック評価を行う場面を探究活動以外でも増やしていくようにという助言を受けた。ルーブリック評価表を用いた評価を日常的に行うことで、客観的かつ適切な評価を行うことにつながっていくということだと理解している。

（委員より）
私たちの大学でも、新型コロナウイルスの影響で、ルーブリック評価表を用いた評価機会が減って

しまった。その結果、同様の傾向が見られているため、実施回数の増加は評価の精度と関係していると感じる。探究以外の場面でもルーブリック評価を実施するとよいと思う。

b　Key Girl の要素の一つである「表現・発信力」の育成について

（委員より）

対面型の発表ができなかったために、「表現・発信力」の伸びが昨年度と比較するとよくないという報告があったが、その辺りについて詳しく説明してほしい。

（推進校より）

プレ学年である高校３年生のリフレクションの中には、「自分は本来人前で話すことが苦手だが、探究活動では人前で話さなければならない場面があったため、発表することに慣れ、多少は克服することができたように思う」というものがいくつも見られた。しかし、今年度の２年生、１年生は、新型コロナウイルスの影響もあり、ＰＣや iPad のカメラに向かって話す機会ばかりで、撮り直しや編集もでき、人前に立ち、たった一回の発表で自らの思いを伝える機会を提供できなかった。それが、「表現・発信力」の育成に影響を与えたのではないかと感じている。

（委員より）

人前で話すということには、聞き手の表情や反応を見て話すということを学ぶ効果があると思う。また、昨年の研究成果発表会に参加した際には、質問力の高い生徒やその場で質問に対応する力に秀でた生徒の姿を見ることができた。現状で、対面型の発表を行うことは難しいと考えられるため、質疑応答に時間をかけることで「表現・発信力」を伸ばしてみてもよいのではないか。

（推進校より）

文部科学省との意見交換でも、ビデオ通話アプリ等を用いて発表を行うことはやむを得ないと思うが、チャット機能を用いて質疑応答をしてもよいのではないかという意見をいただいている。ぜひ、最終年度となる次年度は、その形を採用してみたいと感じているので、発表をご覧いただく際には、質問を寄せていただくようにお願いしたい。

（委員より）

・私たちの大学では、この一年ほぼ全ての授業がオンラインであった。学生のアンケートでは、オンラインの方がよいという意見が意外と多く、少しショックも感じているところである。その経験から感じていることであるが、チャットは人の本音を引き出すように思う。チャットからトークを広げることで楽しみながら学ぶことができると思う。
・スマホ等に慣れ親しんでいる高校生にとって、チャット機能はフィットすると思う。また、チャットは記録に残すことができるため、後日回答することができる点にもメリットがあると思う。

c　今後の指導について

（推進校より）

本学はここまで生徒の主体的な取り組みを大切にし、そこから生じる成長を期待している。実際に生徒のレポートの内容を見ても、学年の進行とともに、確かな成長を感じることができており、方向

性としては間違っていないと考えている。今年度「京大ポスターセッション 2020」に招待を受けたのも、本学の生徒たちが「楽しそうに」発表していたからだと聞いている。しかし、その一方で、他校の発表内容などを見ると明らかに大人の手が入っているのではないかという印象を受け、各種コンテスト等で入賞を果たすためには、発表の内容、構成、英語発表であれば徹底的な発音指導などにまで教員が関わらなければならないのではないかという気もしてくる。その辺りを委員の先生方はどのようにお考えかをうかがいたい。

（委員より）

・私は生徒主導で行うべき探究活動に、教員が過度に手を加えすぎることは本末転倒だと思う。連絡をいただき、「Glocal High School Meetings 2021」で他の学校の発表動画も見たが、確かにそのような印象を受けるものもあった。

・私も同じ意見である。今回の生徒アンケートの内容を見ても、推進校の生徒に様々な気付きがあることがよく分かる。推進校の生徒の「楽しそうに」取り組む姿こそ学びの本質であると思う。ぶれずに最終年度も取り組んでもらいたい。

v　次年度の予定

vi　挨拶　　和歌山信愛中学校高等学校　副校長　紙岡智

vii　閉会

2019年度文部科学省採択
地域との協働による高等学校教育改革推進事業（グローカル型）
研究開発実施報告書【第２年次】

発行日　2021年４月
発行者　学校法人和歌山信愛女学院和歌山信愛中学校高等学校
　　校長　森田　登志子
所在地　〒640－8151　和歌山市屋形町2－23
　　電話 073-424-1141　　Fax　073-424-1160
Ｈ　Ｐ　https://www.shin-ai.ac.jp/